

文部科学省科学研究費補助金
特定領域研究

セム系部族社会の形成

研究領域番号：124

平成 19 年度研究報告

領域代表者 大 沼 克 彦

(国士舘大学イラク古代文化研究所教授)

平成 21 年 3 月

目次

平成 19 年度の研究成果

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」	大沼克彦	1
計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」	佐藤宏之	4
計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」	西秋良宏	27
計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」	藤井純夫	30
計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」	常木 晃	36
計画研究「「シュメール文字文明」の成立と展開」	前川和也	40
計画研究「環境地質学、環境化学、 ¹⁴ C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」	星野光雄	42
計画研究「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」	本郷一美	45
計画研究「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」	宮下佐江子	49
公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」	高濱 秀	51

第 4 回公開シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」

2007 年度 ビシュリ山系の総合調査	大沼克彦	61
メソポタミアにおける考古遺跡のデータベース化の研究 2007	松本 健	62
ガーネム・アリ周辺に発達する河岸段丘と微地形	齋藤 毅	64
ガーネム・アル・アリ村の歴史	常木 晃	65
新石器時代のビシュリ	西秋良宏	67
セム系部族社会の生業基盤	本郷一美	68
ユーフラテス河中流域の古代建築遺構	岡田保良	69
パルミラのテッセラについて	宮下佐江子	70
旧石器時代に「部族」の可能性を探る	佐藤宏之	72
シュメール「語彙リスト」のシリアにおける受容	前川和也	73
テル・タバム出土資料から見た部族	沼本宏俊・山田重郎	81
初期騎馬遊牧民の考古学から見た部族	高濱 秀	90
遊牧部族の形成：カア・アブ・トレイハ西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化	藤井純夫	91

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」

平成 19 年度の研究報告

大沼克彦（国土舘大学イラク古代文化研究所・教授）

1. 研究組織

研究代表者 大沼克彦・国土舘大学イラク古代文化研究所・教授
連携研究者 藤井純夫・金沢大学人間社会研究域・教授
西秋良宏・東京大学総合研究博物館・教授
常木 晃・筑波大学大学院人文社会科学研究科・教授
宮下佐江子・古代オリエント博物館研究部・研究員
佐藤宏之・東京大学大学院人文社会系研究科・教授

2. 研究目的

本班が総括する特定領域研究「セム系部族社会の形成」は、人文、自然科学の多彩な研究分野と研究機関の融合的な連携を通してシリア国北東部ユーフラテス河中流域ビシュリ山系で総合調査をおこない、同地における定住社会の出現とどのように関係してセム系部族社会が形成されたかを通時的に解明する。

この研究目的を達成するため、総括班は領域全体でおこなう現地調査と国内・外関連研究を統括的に促進する。会議、研究発表会、シンポジウムを定期的に開催して領域全体の研究進行方向を調整する。また、ニューズレター、成果報告書、ホームページを通して領域全体の研究成果を迅速かつ頻繁に公表する。

3. 平成 19 年度の研究成果

①会議・シンポジウム・講演会等の開催

総括班会議を 4 回開催した（担当：大沼）。(3) 研究代表者会議を 4 回開催した（担当：大沼）。(4) 研究発表会を 4 回開催した（担当：常木）。(5) 若手研究者の研究成果発表会を 1 回開催した（担当：佐藤）。(6) 公開シンポジウムを 1 回開催した（担当：西秋）。(7) 招聘研究者による専門知識の提供を 1 回開催した（担当：大沼）。

②海外調査

第 2 次から第 5 次の現地調査（ガーネムアリ遺跡の平面図作製と周辺調査、同遺跡の発掘調査と周辺調査、同遺跡の発掘調査と周辺地域の地質・地形調査、ビシュリ台地砂漠のケルン墓の発掘調査と周辺調査）を統括した（担当：総括班全体）。この一連の現地調査の結果、現在、ビシュリ台地砂漠の古代遊牧民・アモリ人がガーネムアリ遺跡などユーフラテス河氾濫原の農耕村落社会の形成に果たした役割を解明しつつある。

③主な論文等

論文等

大沼克彦 2007a 「総括班：総合的研究手法による西アジア考古学」『セム系部族社会の形成：平成 18 年度研究報告』、1-13 頁。

大沼克彦 2007b 「総括班：総合的研究手法による西アジア考古学」『セム系部族社会の形成：第 3 回シンポジウム「平成 17～18 年度の研究成果」』、60-62 頁。

大沼克彦（編）2007 『セム系部族社会の形成：平成 18 年度研究報告』、全 166 頁。

大沼克彦（編）2008 『セム系部族社会の形成：第 3 回シンポジウム「平成 17～18 年度の研究成果」』、全 62 頁。

大沼克彦（編）2007a 『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』6 号、全 28 頁。

大沼克彦（編）2007b 『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』7 号、全 20 頁。

大沼克彦（編）2007c 『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』8 号、全 24 頁。

大沼克彦（編）2008『特定領域研究「セム系部族社会の形成」ニューズレター』9号、全12頁。

長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦 2008「農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落：シリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2007年度発掘調査」『考古学が語る古代オリエント（第15回西アジア発掘調査報告会報告集）』、62-69頁。

Ohnuma, K., Al-Maqdissi, M., Al-Khabour, A. and others 2008 Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2007, In Al-Rafidan XXIX, pp.117-193.

研究発表

大沼克彦 2008.2「2007年度ビシュリ山系の総合調査」『特定領域研究「セム系部族社会の形成」第4回シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」』（平成20年2月16日：池袋サンシャインシティ・コンファレンスルーム）。

学会発表

長谷川敦章・木内智康・根岸洋・大沼克彦 2008.3「農耕と牧畜のはざまに ユーフラテス河中流域の青銅器時代拠点集落：シリア、ビシュリ山系テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の2007年度発掘調査」『日本西アジア考古学会第15回西アジア発掘調査報告会』（平成20年3月15日：池袋サンシャインシティ文化会館）。

公開講演

木内智康・長谷川敦章 2008.1「テル・ガーネム・アリの発掘調査」『特定領域研究「セム系部族社会の形成」公開講演会「部族社会を遡る：西アジア社会の起源を探る」』（平成20年1月27日：国土館大学世田谷キャンパス多目的ホール）。

ホームページ

総括班は平成17年9月14日にホームページを開設し、平成20年3月時点で23度更新した。

URL: <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryuiki/index.html>

4. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するか

総括班は、総括班会議、研究代表者会議を開催し、領域全体の研究方向を調整する。研究発表会、公開シンポジウム、専門知識提供者招聘研究会の開催を通して研究班相互の連携研究を促進し、研究の成果を蓄積する。計画・公募研究班すべての連携でニューズ・レターと研究成果報告書を出版し、研究成果を積極的に公表する。シリア現地調査の許可を獲得した平成19年3月以降は、現地調査における研究班相互の連携を促進している。

平成19年9月25日におこなわれた中間評価により、「一層の努力が必要である」（評価B）という評価を得た。この評価では以下の5点の改善すべき事項が提起されている。

① 今後、遅れをできるだけ取り戻し、当初の研究目的を達成するよう、強く希望する。② 自然科学、歴史学、考古学などを総合することを標榜しつつも、現状では、伝統的な考古学的手法にまだ比重が置かれていることも今後の改善すべき点であろう。③ 大規模で異なる専門分野から構成される領域を纏め上げるためには、総括班の強い指導力が求められる。④ 今日の人文・社会科学ではいささか問題含みとなっている「部族」という用語を積極的に用いている以上、概念規定については、より一層厳密な定義づけが不可欠である。

これら4点の改善事項に対して、総括班は以下のように対応している。

① 現地調査の遅れの回復：中間評価ののち、平成19年度と20年度に現地調査を3回実施した（第4次：平成19年11月～12月、第5次：平成20年3月、第6次：平成20年4月～6月）。このことから、現地調査の遅れはほぼ回復した。② 伝統的考古学的手法からの脱却：現在発掘調査を実施しているガーネムアリ遺跡の周辺には、ユーフラテス河氾濫原の都市的農耕村落遺跡群、氾濫原直近河岸段丘上の墓地遺構群、河岸段丘直上からビシュリ山まで広がる砂漠台地のケルン墓群が分布する。現在、これらの遺跡・遺構群のすべてにおいて、研究項目A01（考古学的研究分野）が主体となって発掘調査をおこなっており、都市的農耕村落遺跡群、氾濫原直近墓地遺構群、ケルン墓群の3者にまたがる当時の人間集団の動態を解明しつつある。今後は、その他の研究項目（A02、A03、A04、A05）が出土遺物の分析と周辺調査をおこなうために現地調査に合流し、公募研究「人類学・歴史学によるアラブ系

部族組織再考」によるビシュリ山系遊牧民に関する文化人類学的研究成果を援用しながら、「部族社会の形成」の時空的規則性を解明し、そのモデルづくりを推進する。③ 大規模な本領域を纏め上げるための総括班の強い指導力：本研究領域の主眼「複数研究分野の連携を通した総合的研究」は現地調査を通してこそ実現可能であるという観点から、現在、総括班による日程調整にもとづき、現地調査における研究班相互の連携を推進している。また、国内・外関連研究の統括的促進を通して、個別研究成果の単なる総和でない総合的研究を推進している。④ より一層厳密な「部族」の定義づけ：平成 20 年度の公募研究として、「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」が採択された。この公募研究の研究成果をもってビシュリ山系の「部族」の様相を明らかにする。また、研究発表会に「部族」専門研究者をこれまで以上に頻繁に招聘して、「部族」の厳密な定義づけをおこなっていく。

以上の連携研究を通して、総括班は本領域の全体課題「セム系部族社会の形成」の内実を解明し、「部族社会の形成」のモデルづくりを推進する。

計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」

平成 19 年度の研究報告

佐藤宏之（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）

I 平成 19 年度の研究計画とその成果の概要

1. 研究組織

研究代表者 佐藤宏之・東京大学大学院人文社会系研究科・教授
研究分担者 大沼克彦・国士舘大学イラク古代文化研究所・教授
橘 昌信・別府大学文学部・教授
安斎正人・東京大学大学院人文社会系研究科・助教
研究協力者 山口大介・アテネ大学大学院博士課程・学生
西村昌也・関西大学 GCOE「文化交渉学教育研究拠点」・助教

2. 研究目的

後期旧石器時代初頭に世界規模で出現した現代人ホモ・サピエンスは、同後半期になると、氷期の不安定な気候変動等に影響された資源構造の変化に伴い、次第に各地の動植物資源に代表される地域生態に多面的かつ効率的に適合した地域社会・文化を形成しはじめる。この時、最初の部族社会（分節社会）の初源形態が誕生した可能性が高い。

現代人が誕生の地アフリカを脱して最初に拡散した西アジアの後期旧石器集団は、遊動型狩猟採集民であり、西アジアという気候環境に適応した狩猟採集戦略の中に、いち早く植物質資源の管理・半栽培と動物資源の馴化技術を組み入れた。長期にわたる試行錯誤の過程を経ながらこれらの生業戦略は、晩氷期の気候変動への本格的な対処戦略として採用され、完新世以降の安定化した温暖な気候環境のもとで、農耕・牧畜を主体とした定住的生業 = 社会システムに本格的に移行したと考えられている。

従って、西アジアにおける部族社会の形成プロセスの初期段階を探る試みは、少なくとも後期旧石器時代に遡及した、人類の行動進化と定住化プロセスの進行過程の中に求める必要がある。従来の社会進化論に基づく発展段階論では、旧石器時代はバンド社会を基本とする平等社会とされ、それが農耕・牧畜を基調とする新石器時代になると、社会が分節化したいわゆる部族社会に進化すると見なされてきた。しかしながら、この視点では、新石器時代に至って突如として出現する分節社会（部族社会）の出現プロセスを展望することは容易ではない。本研究では、むしろ最近注目を集めつつある、威信獲得行為の発達が富者（エリート）と一般人との分節化を促進したと考える祭祀説に依拠しながら、旧石器社会の中に社会分節化の兆しを探る視座を採用していきたい。

上記した西アジア更新世 / 完新世移行期に関する一般的なシナリオは、十分な検証を受けたとは言い難い。そこで、本研究では、近年東アジア・北東アジア・北米等の世界の他地域で組み立てられつつある稲作農耕や階層化狩猟採集民社会等の定住化過程論、および後期旧石器時代における地域社会形成論との比較考古学的・比較民族考古学的検討を行い、西アジア定住化仮説の理論的妥当性について検討することを第一の目的とする。併せて、本研究領域の共通調査フィールドであるシリア・ビシュリ山系一帯において、具体的な地域相に関する検討も行う。

3. 平成 19 年度の研究経過と研究成果

研究第 3 年度にあたる平成 19 年度は、上記した研究目的の達成のため、下記の項目について研究を実施した。

① 資料収集

平成 17 年度より開始した西アジアおよび世界各地の行動進化と定住化過程論に関する文献資料等の収集と

データ集成を、本年度も継続して実施した。

② 会議・シンポジウム等

2007年5月25日（金）に、東京大学にて研究班会議を行い、平成19年度の研究計画とその実施体制について打ち合わせを行った。特定領域研究の総括班会議（第1回：2007年4月21日、第2回：同7月7日、第3回：同9月8日、第4回：同12月23日、第5回：2008年1月15日）には研究代表者および分担者が参加して、研究の実施状況の説明および全体計画とのすりあわせ等を行った。領域の公開シンポジウム（2007年1月16日）では、当研究班からは研究代表者の佐藤宏之と分担者の大沼克彦が研究発表を行った。また、広報普及活動として2008年1月27日に開催した公開講演会（「部族社会を遡る：西アジア社会の起源を探る」於国士舘大学世田谷キャンパス）では、分担研究者の安齋正人が講演を行った。

③ 海外調査

今年度は、領域共通研究フィールドであるシリア・ビシュリ山系の現地踏査と関連資料調査を重点的に行った。

(1) シリア

2007年7月28日～8月6日まで、特定領域の共通研究フィールドであるシリア・ビシュリ山系の現地踏査を行った。ラッカ博物館の共同研究者とともに、調査対象エリア内を車両を使用して踏査し、主として石器散布地点の把握に努めた。短期間の調査であったが、既知のビール・スバイ遺跡、バリーア・テル・ハンマム遺跡等以外にも、新たにメトバ1・2遺跡等の新発見の遺跡もあった。対象エリアで主として発見される石器群は、中期旧石器時代（ムステリアン）とPPNBに属しており、わずかに終末期旧石器時代や青銅器時代等も含まれている。特に、ムステリアンは、シリア砂漠内部とユーフラテス河沿いで石器群の特徴が異なる可能性があり、土地利用と行動論上今後の研究課題となろう。

またダマスカス国立博物館等で、ラタムネ遺跡出土資料等の実見・調査も行った。なお、本調査の簡単な報告は、Newsletter9号に、同行した分担者の橘昌信が報告している。また橘によるラタムネ遺跡出土資料に関する分析を、本報告に付した。

(2) ギリシャ

2007年8月27日～9月5日まで、ギリシャを訪問し、当地の代表的な旧石器時代資料と洞窟遺跡等の現地踏査を行った。西アジアの地中海沿岸地帯であるレヴァントは、ホモ・サピエンスの拡散ルートとして著名であるが、レヴァントからヨーロッパへの拡散ルート上にあるギリシャの様相については、従来よく知られていなかった。特に、ヨーロッパ最初期の後期旧石器文化であるオーリニャシアン（オーリニャシアン）の起源地のひとつとして、現在東ヨーロッパやヨーロッパ・ロシア南部が有力視されているが、その実態を知るためには、ギリシャの実情の調査が必須と考えられる。

今回の調査では、ギリシャでは数少ない正式な報告書が刊行されているフランクティ洞窟遺跡の現地踏査と資料調査を目的とした。資料調査については、相当前から周到に事前準備をしていたにもかかわらず、結果として一部の資料しか実見できなかったのは残念であったが、洞窟遺跡については、現地踏査によって十分な調査を行うことができた。ギリシャ政府の埋蔵文化財担当部局（エフォリア）と現地留学中の山口大介君の協力により、他の洞窟遺跡や資料調査も実施することができた。

(3) ベトナム

2007年12月20日～29日まで、ベトナム・ハノイを訪問し、ベトナム考古学院および在住の西村昌也君の協力のもと、当地の更新世および完新世初期の考古学院所蔵資料と出土した洞窟遺跡等の現地踏査を行った。ベトナム考古学では、ドー山（前期旧石器）、ソンビー文化（中期または後期旧石器）、グオム・インダストリー（後期旧石器）、ホアビニアン（更新世～完新世）と変遷したとされているが、いずれも礫器インダストリーを主とし、わずかに一部に剥片石器群が伴っているため、従来は停滞的な石器製作技術が一貫して連続していたと見なされてきた。今回の調査では、これらのインダストリーに属する代表的な資料を調査した結果、以下の予察を得るこ

とができた。

1. 前期旧石器時代に比定されていたドー山のいわゆる「ハンドアックス」は、刃部のみを加工し基部をそのまま残すことに特徴を有する東アジア型ハンドアックスとは異なり、粗い加工が器体前面を覆うので、前期旧石器とは考えがたい。
2. ソンビーは礫器（サイド・チョッパー）主体で、グオムは刃部にわずかな加工がある expedient な剥片石器群を意味している。いまのところ両者が明確に共伴する例がないので確実とは言えないが、構造的には同時期である可能性が高い。
3. ホアビニアンは礫器を主体とし、その存続期間は長期にわたることが予想され、時間の経過とともに、局部磨製石斧等がはつきりと共伴するようになるらしい。ただし、器種分化が明瞭なわりには、リダクションも顕著なため、結果として器種間の形態的連続も認められる。
4. 高～中緯度地帯のように、更新世 / 完新世移行期を挟んだ石器製作技術の明確な交代が不明である。特に剥片石器群には形態の規格性や洗練された剥片剥離技術に乏しいことに特徴が認められ、中緯度地帯以北の更新世石器群に顕著に観察される管理性よりもむしろ、臨機的製作と使用といった道具の運用体系が、更新世以来一貫して採用され続けたことを示唆している。更新世からの植物質食糧重視型食糧獲得戦略が一貫して継続したためであろう。

このように、ベトナムを含む低緯度地帯の石器群を古拙な外観から“停滞的”と評するのは誤りで、生業適応論的かつ行動論的な石器群構造の解釈が重要である。従って、型式学的分析や対比には、慎重さが要求される。

4. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するか

従来の発展段階論に基づく社会進化論では、旧石器時代は平等社会と見なされ、部族社会に代表されるような分節社会は新石器時代から出現したと考えられてきた。磨製石器、土器、農耕、定住を指標とするとされた新石器時代を西アジアに当てはめると、土器の出現がもっとも遅くなり、このセット関係が出現する段階では、すでにかなり複雑な分節社会が出現していた。磨製石器、土器、農耕、定住といった重要な考古学的現象は、それぞれ段階を異にして地域の歴史的事実に応じて出現することがわかってきたので、より詳細に跡付ける必要がある。従って、部族社会のような分節社会の出現は、現代人の登場する後期旧石器時代に遡って検討する必要がある。

本研究班の研究は、完成された部族社会の出現プロセスとその変容過程を検討する上で、重要な知見を提供するものと言える。

5. 研究成果の公表状況

[著書・論文等]

佐藤宏之編著 2007 『ゼミナール旧石器考古学』同成社、230p.

佐藤宏之 2007a 「北東アジアの狩猟文化—環境・生業・居住・領域・行動・技術の民族考古学—」『東アジアのなかの日本文化に関する総合的な研究』[オープン・リサーチ・センター整備事業研究成果報告書]57-68 頁、東北芸術工科大学東北文化研究センター

佐藤宏之 2007b 「台湾におけるイノシシの跳ね罾猟」『東アジアにおける人と自然の対抗 / 親和の諸関係に関する宗教民俗学的研究』[平成 16～18 年度文科省科学研究費補助金・基盤 (B) 研究成果報告書] (中村生雄編)、89-97 頁、学習院大学

佐藤宏之 2007c 「送り儀礼の民俗考古学—野生と合理性—」『狩猟と供犠の文化誌』(中村生雄・三浦祐之・赤坂憲雄編)、273-297 頁、森話社

佐藤宏之 2007d 「スティーブン・ミズン著、熊谷淳子訳『歌うネアンデルタール：音楽と言語の起源から見るヒトの進化』」『旧石器研究』3号、137-145 頁

佐藤宏之 2007e 「持続的資源利用の人類史」『地球史が語る近未来の環境』(日本第四紀学会編)145-163 頁、東京大学出版会

- 佐藤宏之 2007f 「計画研究「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」」『文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究「セム系部族社会の形成」 第3回シンポジウム「平成17～18年度の研究成果」記録集』（大沼克彦編）1-6頁、国土舘大学イラク古代文化研究所
- 佐藤宏之 2007g 「日本旧石器文化の課題」『季刊考古学』100号、19-22頁
- Sato, H. and T. Tsutsumi 2007h The Japanese microblade industries: technology, raw material procurement and adaptation. *Origin and Spread of Microblade Technology in Northern Asia and North America*, edited by Kuzmin, Y.V., Keates, S.G. and Shen, C. pp.53-78, Archaeology Press, Simon Fraser University, Burnaby, B.C. Canada.
- Izuho, M. and H. Sato 2007i Archaeological obsidian studies in Hokkaido, Japan: retrospect and prospects. *Indo-Pacific Prehistory Association Bulletin*, 27: 114-121.
- 佐藤宏之 2007j 「民族考古学という風」『史学雑誌』116編11号、36-38頁、史学会
- 佐藤宏之 2007k 「総論① 縄文時代の狩猟・漁撈技術」『なりわい—食料生産の技術』[縄文の考古学 V巻]（小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編）、3-16頁、同成社
- Tsuneki, A., M. Zeidi and K. Onuma 2007 Proto-neolithic caves in the Bolaghi valley, south Iran. *Iran*, 44: 1-22.
- 橘 昌信 2007a 「横尾貝塚と大分県の貝塚」『図説 大分・由布の歴史』20-21頁、郷土出版社
- 橘 昌信 2007b 「「岩戸遺跡」—旧石器時代唯一の「こけし形石偶」」『図説 海部・大野・武田の歴史』18-19頁、郷土出版社
- 橘 昌信 2007c 「「牟礼越遺跡」—後期旧石器～縄文早期の六文化層—」『図説 海部・大野・武田の歴史』20-21頁、郷土出版社
- 橘 昌信 2007d 「「竜宮洞窟」—山深い川辺の縄文洞窟—」『図説 海部・大野・武田の歴史』22-23頁、郷土出版社
- 橘 昌信 2007e 「「大石遺跡」—縄文晩期農耕の提起—」『図説 海部・大野・武田の歴史』24-25頁、郷土出版社
- 安斎正人 2007a 「『ナイフ形石器文化』批判—狩猟具の変異と変遷—」『考古学』5号、1-32頁
- 安斎正人 2007b 『人と社会の考古学』柏書房
- 安斎正人 2007c 「石鏃を副葬した人々」『縄文社会の変動を読み解く』（縄文社会をめぐるシンポジウム5 予稿集）1-8頁
- 安斎正人 2007d 『前期旧石器再発掘—捏造事件その後—』同成社
- 安斎正人 2007e 「円筒下層式土器期の社会—縄網時代の退役狩猟者層—」『縄文時代の社会考古学』27-58頁、同成社
- 安斎正人 2007f 「旧石器時代の祭祀—狩猟者の儀礼、思考、想像力—」『祭りの考古学』5-62頁、学生社
- 安斎正人 2007g 「色の考古学」『季刊東北学』14号、116-127頁

[学会発表等]

- 佐藤宏之 2007年6月17日 「東北地方における考古学研究の現状」東北芸術工科大学オープンリサーチセンター 整備事業『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究』第1回全体研究会にて研究発表
- 佐藤宏之 2007年10月21日 「民族誌からみた先史時代」岩宿大学 [於岩宿博物館]にて講演
- 佐藤宏之 2007年11月30日 「再び新ドリラス期の諸問題」第27回環境文化史研究会にて研究発表
- 佐藤宏之 2007年12月1日 「環日本海北部地域における後期更新世の環境変動と人間の活動」総合地球環境学研究所プロジェクト研究『日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討』全体研究集会にて研究発表
- 出穂雅実・森先一貴・山田哲・佐藤宏之・Popov, Aleksander N.・Mikishin, Yuri A.・Malkov, Sergey S.・Batarshev, Sergey V. 2007年12月1日～2日 「2007年沿海地方ハサン地区一般調査報告」総合地球環境学研究所プロジェクト研究『日本列島における人間—自然相互関係の歴史的・文化的検討』全体研究集会にて研究発表 [ポスター]

- 熊木俊朗・A.A. ワシリフスキー・高橋健・榊田朋広・V.A. デリューギン・福田正宏・井出靖夫・大貫静夫・佐藤宏之
 2008年1月12日～14日「サハリン中世遺跡の考古学的調査」中世総合資料学シンポジウム実行委員会主催
 のシンポジウム『中世総合資料学の実践 間宮海峡から琉球弧へ』にて研究発表 [ポスター]
- 佐藤宏之 2008年2月2日 「地考古学が考古学に果たす役割」日本第四紀学会シンポジウム『考古遺跡から何が
 わかるか?— Geoarchaeology —』にて講演
- 佐藤宏之 2008年2月16日 「旧石器時代に”部族”の可能性を探る」文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『セ
 ム系部族社会の形成』第4回公開シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」にて研究発表
- 佐藤宏之 2008年2月18日 「民族考古学からみた縄文社会」東北芸術工科大学東北文化研究センター オープ
 ンリサーチセンター整備事業『東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的综合研究』考古班公開講
 座にて講演
- 山田哲・佐藤宏之 2008年3月15日 「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」第9回北アジア調査研究報告会に
 て研究発表 (於北海道大学)
- 熊木俊朗・A.A. ワシリフスキー・高橋健・榊田朋広・佐藤宏之・大貫静夫 2008年3月16日 「サハリン南部東海
 岸における中世遺跡の調査」第9回北アジア調査研究報告会にて研究発表
- 森先一貴・佐藤宏之・Popov, Aleksander N.・Mikishin, Yuri A.・出穂雅実・山田哲・Malkov, Sergey S.・Batarshev, Sergey V.
 2008年3月16日 「2007年度沿海州ハサン地区一般調査報告」第9回北アジア調査研究報告会にて研究発表
- 橘 昌信 2007年7月21日 「縄文時代のブランド商品—黒曜石の流通—」2007年度地域連携・生涯学習公開講
 座『歴史のとびら』にて講演
- 橘 昌信 2007年9月8日 「響灘周辺の先史文化」第13回土井ヶ浜シンポジウム『響灘の考古学』にて講演
- 安斎正人 2008年1月27日 「先史時代の西アジア」文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『セム系部族社
 会の形成』公開講演会「部族社会を遡る:西アジア社会の起源を探る」にて講演

II 旧石器時代に“部族”の起源を探る

佐藤宏之 (東京大学大学院人文社会系研究科・教授)

1. 分節社会としての部族社会研究

出現以来人類は、何らかの集団を形成して生活を送ってきた。初期人類に属するアファールレンシスやアウストラロ
 ピテクス等は、雌雄の個体差が著しいことから、近縁の霊長類サル目同様の性差に偏りのある群れ社会を形成してい
 たと考えられているが、脳の巨大化等に起因する保育コストの増大に促されて、原人のある段階になると、次第に
 家族を形成するようになったと思われる。この家族の形成以降、現生狩猟採集民に認められるようなバンド社会に類
 似した社会を構成するようになったと考えられるが、普通バンド社会は分節社会とは呼ぶことができないため、平等
 社会と見なされている。分節社会とは、氏族や部族のような何らかの地域社会が形成されるか、あるいは階層のよう
 な社会構造内の複雑化が発生した社会を指し示すことが一般的である。

表1 社会階層化に関する主要な学説 (高橋 2004 より)

M.フリード(1967)	E.サーヴィス(1962)	I.ゴールドマン(1970)	M.サーリンズ(1958)	M.ゴドリエ(1986)	J.F.コリアー(1988)	B.ヘイデン(1995)	吉岡政徳(1993)
国家社会	国家組織						
階層化社会		階層化社会 (stratified)	1				
			2A				
位階社会	首長制組織	開放社会 (open)	2B			(首長制)	首長制
	部族組織	伝統社会 (traditional)	3	ビッグマン	不平等婚資社会	アントウレプレヌアー共同体	位階階梯制
				グレートマン	平等婚資社会	レシプロケーター共同体	ビッグマン
平等社会	バンド組織				労働提供社会	アスポット共同体	

今日分節社会の代表的存在とされる部族社会の特徴としてよく指摘されるのは、土地の占有（領域化）、（擬制的）血縁関係の重視、共通の言語、習慣・文化の共有、信仰・宗教の共有、自己（集団）アイデンティティーの形成と他者との競合等である。これらの人類学的特徴を考古学的に検討することは容易ではないが、すくなくともその一部は、分析可能と考えられる。本発表では、これらの諸特徴が旧石器社会に確認されるかどうかを検討してみたい。

伝統的な人類学・考古学の理論研究では、人類社会の進化に関する理論を、唯物論を通奏低音とする発展段階論として理解してきた。その代表的な学説は、生産経済発展段階論とでも形容可能な学説群で、E. タイラーや H. モルガンといった人類学の創始者に始まり、H. スпенサーの社会ダーウィニズムにも通底している。モルガン学説に強く影響を受けた F. エンゲルスや K. マルクスによって一応の完成を見たこの学説では、農耕の発達による余剰生産の蓄積とその再配分をコントロールする支配者ないし支配者階級の形成という階級社会の出現に社会の分節化の始まりを見た。M. フリードや E. サーヴィス・M. サーリンズ等の新進化主義者は、農耕社会が成立する新石器時代を部族社会と定義し、旧石器社会は社会分節化が出現する以前の平等社会と見なした。

社会構造の複雑化・構造化（=階層化）を指標とするこの新社会進化論は、今日でも非常に大きな影響力を保持しているが、肝心の部族社会の成立プロセスを具体的に検討する場面においては実態が不明瞭のままであり、依然として作業仮説にとどまらざるを得ない。そこで近年では、社会の分節化の契機として、現生狩猟採集民社会等によく見られる威信獲得を目的とした儀礼行動に着目する研究が注目を集めつつある。B. ハイデンや M. ゴドリエ等によれば、狩猟採集のような余剰を生まない低経済段階でも、エリート層やビッグマン・グレートマンと呼ばれる個人が、集団内・間の競争的な儀礼交換をコントロールすることにより威信獲得行動を活発に行い、それを契機として社会の分節化が進展すると考えた（表 1）。この祭祀統合説とも仮称できる社会階層化論の立場にたつと、新石器時代の部族社会のような社会に至る分節化のプロセスの検討が理論的に可能となる。いわば生業（生産）から儀礼（社会）に視点をスライドさせることにより、旧石器時代における社会分節化の可能性とその出現プロセスが具体的に分析可能となろう。

2. 旧石器時代における各種の証拠

旧石器時代の人々は遊動型狩猟採集民であったが、ネアンデルタール等の先人類との比較研究が進んでいるヨーロッパでは、現生人類が出現した 4～3 万年前になると、それ以前の時代に比べて、空間や土地利用の階層的構造が飛躍的に輻輳化していることがわかっている。ネアンデルタールの段階では、生活上の単位集団が近接する集団と緩やかな関係性（おそらく婚姻関係を主）を有するにとどまっていたらしいが、現生人類になるととたんに複雑化した。中・大型獣狩猟を主とする広域移動型資源開発戦略を重視する寒温帯地域の現生人類の行動圏は広域化し、そのため隣接集団との同盟関係を強化することが要請された結果、生活圏・資源交換圏・通婚圏・様式圏等が重層化した空間構造を生み出していたことが、石器石材や石器型式、装飾品の材料・様式等の分析から推定されている。このような空間構造の輻輳化は、ヨーロッパに限られた現象ではなかった。同様に調査事例の蓄積している日本列島では、100～200km 程度を単位とする地域石器群（社会）が後期旧石器時代後半には形成されていたことがよく知られている。こうした地域石器群の構成は、基本的に後の時代にも維持されているが、後期旧石器時代末期の有舌尖頭器石器群では、北海道と本州以南のような、より広域に地域を越えた様式（社会慣習）的な差異の存在も発見されている。このような現象は、遊動型狩猟採集民による計画的行動戦略の強化に基づく階層的な社会構造出現の初期段階を示唆している可能性が高い。

一方儀礼行動の側面ではどうであろうか。東方グラベット文化に属するロシア・バイカル地方のマリタ遺跡では、偶像・垂飾等の各種骨角製の副葬品を伴った複数の墓が出土しており、シベリア各地の同時期の遺跡でも同様な発見例がある。南ドイツの後期旧石器時代初頭のオーリニャック文化を始めとして、後期旧石器時代の各文化でも、数多くの骨角製装飾品や人形・動物形骨角製偶像が発見されている。現生人類がヨーロッパ等よりもはるかに古くから存在したと推定されているアフリカでは、南アフリカ・ブロンボス洞窟等の MSA 期相当層から 7 万年前の貝製ビーズが発見されているが、最近西アジア・レヴァントのスフル洞窟からは、同様な貝製ビーズがより古い時期の文化層（10 万年前以前）から発見された。モスクワ近郊のスンギール遺跡では、各種骨角製装飾品とともにマンモス牙製の

槍が真っ直ぐに整えられた状態で副葬された墓が発見された。特に重要なのは、この墓から検出された2体の人骨が子供であった点にある。現生狩猟採集民の事例から、狩猟採集民においても狩猟に優れた狩人のようなエリートの存在がよく報告されているが、彼らは優れた技術の保有能力によって威信を獲得しているため、子供に権威がそのまま伝達されることはない。一方スギールの例では、子供にもかかわらず非常に手厚い埋葬が行われており、個人的な威信の世襲的扱いがすでに存在していた可能性を示唆している。

断片的な事例であるが、これらの例からみると、旧石器時代の一部の地域では、個人の差異化や集団的アイデンティティを示唆する象徴品・物・装置（洞窟壁画等）が発生していた可能性は高い。

3. 旧石器時代の“部族”の可能性

旧石器時代には、後の新石器時代以降の部族社会を準備したようなある種の分節社会の萌芽が存在した可能性は大きいと言えよう。しかしながらその社会は、後の部族社会と比較すると、いびつで不完全な分節化にとどまっていたと考えられる。そしてその分節社会は、新石器型の定住部族社会ではなく、あくまでも遊動型の分節社会にとどまっていたであろう。

Ⅲ ラタムネ遺跡のアシューリアン石器群と東アジアのハンドアックス石器群

橘 昌信（研究分担者：別府大学文学部・教授）

1. はじめに

2007年夏、ユーフラテス河中流域ビシュリ調査期間中、西アジアにおいてアシューリアンの最も豊富な資料を提供している遺跡として知られるシリア・ラタムネ遺跡の石器群の一部をダマスカスの国立博物館で実見する機会を得た。ラタムネ遺跡の出土石器は博物館地下1階に設けられた一収蔵室の奥壁全体を使った収蔵棚の遺物ケースに収納されており、そこからハンドアックス石器群などの主要な石器が入っていると考えられるものを無作為に20数ケース選び、300点ほどの石器観察と写真撮影を行った。資料ケースや石器を入れたビニール袋にはラベル代わりのメモ用紙が添付され、ラタムネの遺跡名、Bifacialesなどの器種名、それに、Modde…… 61/62、Clark 64/65などの簡単なメモが走り書きされていた。

クラークの1967・68の二つの報告書（Clark, J.D. 1967・68）では、62・64・65年発掘調査の主要出土石器はshaped tools 370点、utilized pieces 230点と報告されているので、限られた時間内であったが、ラタムネ遺跡の主要な石器群の半分近くを実見することが出来たことになろう。

西アジア地域のアシューリアンを代表する前期旧石器時代のハンドアックス石器群を手にして、150万年前の前後の時期から、アフリカ大陸を出て西アジアへ、さらにヨーロッパ、そして東アジアへと拡散したホモ・エレクトゥスが製作・使用した石器と向かい合っていることに、まず、ある種の感激を素直に覚えたのである。

次に「アシューリアンのハンドアックスとはこんなだったかな？」と言う素朴な疑問が湧いてきたのである。これまでイギリス・フランスなどヨーロッパの博物館で何度か目にしたものと、また、旧石器時代の概説書等で紹介されているハンドアックスの写真・図ともあまりにもかけ離れていたのである。フリントの礫塊や礫片、さらにそれらを打ち割った厚みのある大形剥片などを素材に用いた40点ほどのハンドアックス石器群の多くは、一端に両面から尖り気味な粗い加工が施され、反対の基部の方は分厚くて自然面・摂理面や主要剥離面が大きく遺されているのである。大形で重量感のあるこれらの石器は、これまで断片的にはあるが実見する機会があった、あるいは報告書・論文・図録などの写真・実測図で目にした中国・韓国など東アジアの前期・中期旧石器時代の所産と判断されている尖頭状をした大型両面加工石器や、東アジアの地域においてアシューリアン石器群との関連が初めて本格的に問題視された韓国全谷里遺跡およびその近郊の漢灘江・臨津江流域遺跡群などで出土あるいは採集されている石器（絹川 2001、金 2005）の一部に「形態的・技術的に良く似ている」と言う驚きの印象である。

それに、この大型で重量のある両面加工石器群と東アジア地域の前期・中期旧石器時代に特徴的な大型石器である

チョッパー・チョッピングツールとはどのような関係にあるのだろうか。

このような極めて単純な疑問・印象に関連して、それらの少し先にあるモヴィウスの旧世界における「前期旧石器時代の二大文化圏」仮説とグレハム・クラークの石器製作技術に基づいた進化段階の「モード論」を考えてみようと思ったのが、この小論の動機であり、素朴な問題提起でもある

2. アシュリアン石器群と「前期旧石器時代の二大文化圏」

ラタムネ遺跡は中期アシュリアンに位置づけられており、その年代については石器包含層上位に認められる地層の熱ルミネッセンス年代が56万年前で、それを根拠にして80～60万年前と推定されているようである（西秋1997）。アシュリアン石器群についての一般的理解は、前期ではストーンハンマーによる粗い両面加工が特徴的な大形石器であるのに対して、後期は軟質ハンマーによる精巧な加工が器体の全面に及び、左右均整で薄手に仕上げられ、小形化するなど、アシュリアン石器群の技術・形態に進展傾向が認められる。この技術的進展について、安斎がクラークの見解を紹介している。それによると、ハンドアックス、クリーヴァーなどの両面加工石器は「必要に応じて均整の取れた対称的な平面形と両凸ないし平凸形の断面に仕上げられている。石材が礫の形で存在するところでは、両石器の製作は直接打法による礫のリダクション→小型化・変形化→過程をとる。後期アシュリアンではさらに技術的発展をみる中部更新世後期までに、特に両面加工石器の素材となる大型剥片を剥離する調整石核のさまざまな剥離技術………を生み出していた」（安斎2003、93p）。

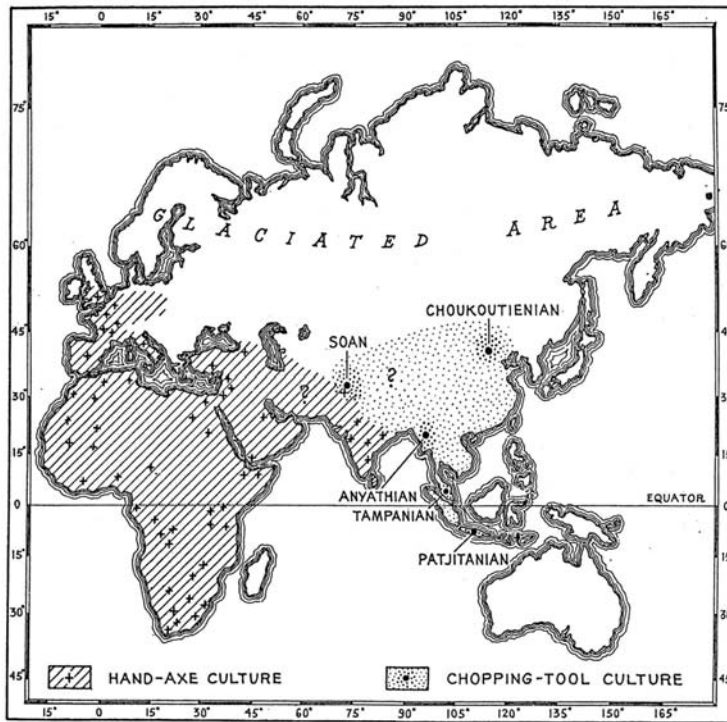
ラタムネ遺跡の石器群が後期アシュリアンの両面加工石器→ハンドアックス→とは形態的・技術的に大きく異なっていることを改めて実感したのである。同時に、これまでに目にする機会があったハンドアックスの多くは後期の所産で、剥離技術の洗練化・形態の標準化・器種の増加なども納得できる。

アシュリアン石器群は時期差による大きな相違が認められ、さらに、西アジアにおける遺跡の分布上でも前・中期が東アフリカから景観が連続する死海地溝帯や海岸部に集中するに対して、後期では内陸乾燥地にまで広がりを見せ、それまでとは異なる環境に適応できる能力が備わったと考えられているようである¹⁾。

アフリカ・西アジア・ヨーロッパそれにインド亜大陸西部までの広い地域の前期旧石器時代を象徴するアシュリアンは、前・中期と後期の石器群の相違や文化の質的な違いが指摘されながら、おそらく研究史上のことや、これまで築き上げてきた前期旧石器時代の調査・研究成果の余分な混乱を避けることなどの理由によるものであろうか、「アシュリアン」と一括して呼ばれていることに、正直ある種の抵抗を感じたのである。この点について、（佐藤2008、印刷中）によると「最近の旧大陸旧石器考古学では、かつて前期と後期に二分されながらも基本的には同質の文化と考えられていたアシュール文化が、実は荷担者の異なる二つの文化と捉える視点が生まれ始めている」。詳細は知り得ないが、これなら納得しやすく今後の研究の進展が期待される。

これまでのアシュリアンの理解では旧世界の前期旧石器時代を地域的かつ文化的に二分する「モヴィウスライン」や東アジアにおけるアシュリアンの波及などの問題に関して、少なからず影響を与えているように思えるので、そのことについても触れてみたい。

前期旧石器時代における旧大陸での石器群の差異や文化論的解釈を示すものとして登場したハラム・モヴィウスの二大文化圏学説については、その内容や社会的背景、今日的評価など佐藤の論文に詳しい（佐藤2004）。今更挙げる必要もないくらい多用されている第1図は、1940年代にモヴィウスによって提示された（Movius1948、409p）西の「ハンドアックス文化圏」と東の「チョッパー・チョッピングツール文化圏」の分布図である。アフリカからインドまで（途中のイラン・アフガニスタン・パキスタンなどの地域は「？」になっており、それに、白紙の地域は人類の進出がまだ見られないことを示している）の広範な地域にハンドアックス石器群の分布が認められ、それより東はチョッパー・チョッピングツール石器群と言うように二大別され、後者の停滞性が説かれている。この説による限りハンドアックス石器群の東アジアへの波及の可能性は考えられないのであるが、この分布圏は前期旧石器時代後半、それもアフリカ・ヨーロッパ・西アジア等の地域でハンドアックス石器群が発達する後期アシュリアン段階に該当するものと考えられる。実際、東アジアの前期・中期旧石器時代遺跡では、西側世界で普遍的に見られる精巧な両面加工石器のハンドアックスやクリーヴァーが主体になる石器群は皆無の状況である。それに、アシュリア



第1図 旧世界における前期旧石器時代のハンドアックス文化圏と
 チョッパー・チョッピングツール文化圏 (Movius 1944
 より)

ンのハンドアックス等の両面加工技術から出現したと考えられているルヴァロワ技法やムステリアンなど発達した調整石核技術で特徴づけられる中期旧石器時代石器群の明確な要素も認められないことからすれば、モヴィウスラインは肯定されよう (藤本 1994、佐藤 2004)。従って、モヴィウスラインを正確に理解するとすれば、前期旧石器時代後半から中期旧石器時代にかけての時間軸で認められるアフリカ・ヨーロッパ・西アジア・インド亜大陸西部などの地域と東アジアにおける石器群構造の基本的差異を表す分布上のラインとしての把握で、しかも、この差異は東洋世界の停滞性を表すものでないことはもちろんである。藤本は「停滞性」という文化的解釈を除き、また前期旧石器時代後半という条件付きで妥当な仮説としている (藤本 1994)。それに対して黄は、東アジアのチョッパー・チョッピングツール文化圏の気候変動が乏しいということや、また、それに起因して文

化的に停滞しているとの見解も否定し、モヴィウスラインの存在も認めていないのである (黄 1998・1999・他)。

問題提起で少し触れたように近年、韓国全谷里遺跡が所在する漢灘江・臨津江流域 (裴 1999・2006) や中国南部の百色盆地 (黄 2003)、あるいは長江流域 (房 2007)、洛南盆地 (王社江・他 2007) などの遺跡において両面加工石器の発見が相次いでおり、東アジアにおけるハンドアックス石器群の存在が注目されている。これらの発見が特に問題視される側面には、前期旧石器時代における西側世界のアシュリアン石器群波及の有無や旧世界における前期旧石器文化の理解に関係するからであろう。それらについては全谷里遺跡でのハンドアックス、クリーヴァーの発見が契機となり本格的に問題提起され、多少の見解の相違は見られるが概ね西側の石器群伝統を東アジアの石器群に認める立場 (鄭 1984・1984b・85、崔 1997、黄 1992・1999・2003、裴 2006・2007 など) と、アシュリアンのハンドアックス石器群と形態的・技術的に類似しているがその関連性は否定し、東アジアで独自に出現・発達したとの立場 (藤本 1994、加藤 2000、安斎 2003・2007、など) とに大きく分かれる。概して前者には韓国・中国などの研究者が多く、それに対して日本側の研究者は後者の考え方を支持する傾向にある。両者の見解の一部については先で少し述べることにして、アシュリアンはモヴィウスラインが示しているように確実にインド亜大陸西部まで及んでいるのである。ところが、それより南あるいは東南地域、すなわち東アジアとインドとの中間地域の状況がほとんど不明であり、いずれの立論にも、特に前者の大きな障害になっている。

そのような現状で、東アジアにおけるアシュリアンの展開にアプローチすることは極めて難しい。それに、確かに東アジアでハンドアックス石器群が発見されている遺跡数は限られ、それも偏在的な傾向が見られ、また、一遺跡でのそれらの石器数は必ずしも多くなく、礫器・小型剥片石器を主体とする石器組成の中であって客体的な存在である。このような諸相は、東アジアの前期・中期旧石器時代における大型両面加工石器群の特徴とも考えられるものであり、アジア地域におけるアシュリアン石器群伝統の波及の在り方を示唆するものと予想されるのである。そこで、ラタムネ遺跡の石器群を見た際の「似ている」の印象を第一歩にして、尖頭状をしたハンドアックスなどの両面加工石器群が顕著に認められるアシュリアン前半の時期に、この石器群の伝統が東アジアへ波及した可能性を探ってみたい。

まずは、このような問題意識の導入になったラタムネ遺跡の石器群について、観察所見とクラークの発掘調査報告

からハンドアックス石器群などを中心にその特徴を概観しておきたい。

3. ラタムネ遺跡のアシュリアン石器群

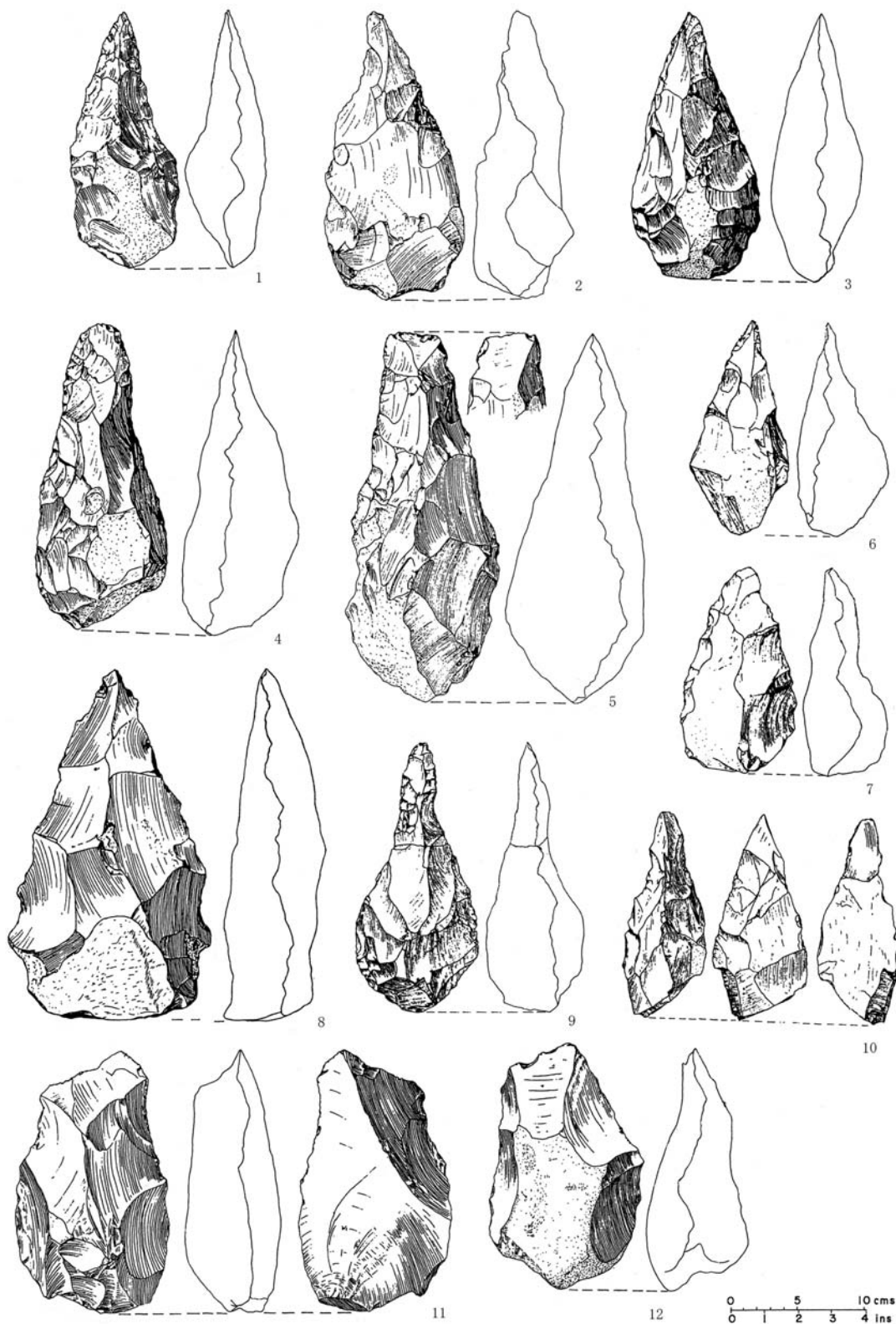
遺跡はシリア北部、ハマの北 39km、地溝帯の最も北よりのオロンテス川中流域に位置している。1960年、W.J. ヴァン＝リェールによって発見、62年に発掘が実施され、その後の64・65年、J. D. クラークによる発掘が行われている (Clark 1967, 68)²⁾。62年の調査区に接した64・65年の拡張調査で最終的に14×19mほどの広さが発掘されている。その結果、調査区のほぼ全域で、ハンドアックスで代表される大型石器群と小型搔削器が主体をしめる剥片石器など、いわゆる定型的な石器370点、使用痕が観察される石器236点、それに多量の剥片・碎片などが出土している。この発掘で最も注目されたのは、遺跡内に持ち込まれたと考えられる25～40cm大の石灰岩100点余りが、石器群が集中するエリアに比較的密に分布しており、意識的に配置された可能性が窺えることである。また、それらに隣接して20～40cmほどのフリント岩塊10点ほどが出土しており、ちなみに当遺跡の利用石材の95%がフリントで占められている。報告書によると調査区の北東は川の侵食を受けており、浸食ラインに接するように石器類・石灰岩・フリントが分布している。この出土状況から遺跡は北東方向に向かってさらに広がっていたことが理解されると共に、発掘で出土した石器類の数量や組成は当遺跡が遺された当初の状態を必ずしも示めしてなく、さらに推測すれば、遺跡内のより川沿いで行われたであろう行動・行為に関連する石器群の一部が発掘前に流失していることになる。この遺跡がオロンテス川の増水によってたびたび冠水していたことを示す痕跡は、今回実見することができた一部の石器、特に剥片石器類に顕著に認められた。

64・65年のクラークの調査による出土石器類は2825点で、それらの7.4%が定型的な石器、5.8%が使用された石器類、残り86.8%はいわゆる碎片・剥片類となっており、当遺跡で石器製作が行われていたこと示唆している。ハンドアックス石器群で代表されるアシュリアンのラタムネ遺跡であるが、碎片・剥片類の存在も注目されよう。ハンドアックス石器群と剥片・碎片の数量的なことについての製作実験が行われている³⁾。それによると、重さ230gのハンドアックス1個を作るのに51個の剥片が出来、チップは4618片に達するとの結果がある (ジョン・ワイマー 1989)。調整剥離の精粗を勘案しても、ラタムネ遺跡ではハンドアックスの数102点に比較して、碎片・剥片類の数は少ないと言えよう。この状況は製品としてのハンドアックスの一部が当遺跡に持ち込まれたのか、あるいは川辺で石器製作が行われ碎片・剥片類の一部が押し流された結果のいずれによるものか、はたまた、その両方なのかである。もし、このような推測が可能であれば、アシュリアンの荷担者と考えられているホモ・エレクトゥスがその前半期の段階に、主要な大型石器の搬入・搬出の行為や石器製作に関連して特定の場所を限定するような思考や行動を備えていたことになろう。この場合、特定石器の持ち込み、持ち出しという行為と生活遺跡内での特定場所の選定が同じ次元で考えられるかどうか検討課題と言えよう。

62年調査の出土品を加えた当遺跡での定型的な石器は、次のように分類されている。(A) Large Cutting Toolsは10cm以上の大きさがある両面・片面調整のCutting edgeの石器。その中ではハンドアックスは当遺跡を代表する石器であるだけにやはり多く102点で、定型的な石器の27.8%を占めている。その外でクリーヴァー2点、両面加工ナイフ5点である。次はやはり10cm以上の大きさの(B) Heavy Duty Toolsは、石核搔削器が13.2%とやや多く49点、片刃礫器17点、球状石器18点である。(C) Light Duty Toolsは10cm以下の小型の石器で、小型搔削器が141点と定型的な剥片石器では群を抜いて多く38.1%を占め、それ以外では石錐・プロトビュアリン・ビュアリンなどの小型石器が33点である。

ハンドアックス石器群

ラタムネ遺跡出土の102点のハンドアックスについて、クラークはElongate Ovate 21点、Lanceolate 54点、Lanceolate Acuminate 9点、Trihedral 7点、Triangular 4点、Irregular 7点と分類している (Clark 1968)。そこで、報告書および実見から、それぞれのハンドアックスについては長卵形・尖頭形・槍先形・三稜形・三角形・不規則として理解した。数で尖頭形 (Lanceolate) が最も多くハンドアックスの半数を超えており、今回、無作為に選んで実見することができた40点ほどの内、やはり尖頭形のものが多くて2/3近くを占めていた。特徴的なハンドアックスとしては尖頭部が細長く抉りのある槍先形 (Lanceolate Acuminate) のものと、厚みのある礫や礫片を素材にした三



第2図 ラタムネ遺跡出土のハンドアックス・クリーヴァー (Clark 1967 より)
 1～6 : Lanceolate, 7 : Elongate Ovate, 8 : Triangular, 9 : Lanceolate Acuminate,
 10 : Trihedral, 11・12 : Cleaver

稜形 (Trihedral) のものがある。全体的には断面の厚みが最大幅にほぼ近いものと最大幅の 1/2 以上の厚みのある素材を用いたものが目立ち、尖頭形のものの中には三稜形と明確な区分が困難な資料も存在している。それらとは反対に断面の厚みが最大幅の 1/2 以下の扁平なものは極めて少ない印象を受けた。この点について、62 年調査の 53 点のハンドアックスを用いて、最大幅と最大厚の比についてのデータが示されており、サンプルの大半が幅 1 : 厚 1 と幅 2 : 厚 1 の中間に集中する傾向が読み取れ、数は少ないが幅と厚さがほぼ等しいものも存在しており、全体的に幅

に対して部厚いハンドアックスが多いことが理解される。このような傾向について報告者のクラークは、ラタムネ遺跡のハンドアックス石器群の特徴として、また、アシュリアンの早い時期の一般的特徴としてとらえている。

最大幅と最大厚の比率に関連する素材の利用では、フリントの厚みのある剥片、すなわち大きな礫塊や礫片から打ち剥がした大形剥片を素材に用いたものが、実見したものでは半数以上を占めている。その素材の大型剥片であるが、製作者が当初から想定した目的とする大きさ・形・厚みなどを意識して大きな礫から素材剥片を生産しているのか、それとも打ち剥がした剥片の中から製作しようとしたハンドアックスなど両面加工石器に見合う大きさや形・厚みのある剥片を素材に選んでいたのであろうか。この目的とする素材の生産や選択については、アシュリアンの技術的進展が長期間にわたることやホモ・エレクトゥスの石器製作の認知に関わる問題ように思えるが⁴⁾、ここでは岩塊・礫片を打ち割ることで作出される大形剥片を素材に利用することを重要視しておき、後のモード論の関係で少し考えてみたい。

5 類に分類されているハンドアックス石器群の先端部は全体的には尖っているが、若干丸みを帯びる、あるいは鑿刃のように平坦になっているものなど細部ではバリエーションが認められるが、それ以上に、より共通する大きな要素が認められる。すなわち、ハンドアックスの刃部近くを主体に体部の2/3ほどの両面に加工が集中し、基部は自然面・摂理面・剥離面など素材の形態がそのまま遺されたものが顕著であり、それに連鎖して左右が対称的に整えられているものが少ないなどである。これらのことは当遺跡におけるハンドアックス石器群で特徴的に認められる断面形の分厚さに関係している。

加工の大半は大きく抉れるような剥離面で構成され、硬質ハンマーによる直接打法の結果によることが明瞭であり、側面の稜線は幅のひろいS字状を呈しているものも見られる。今回、見学できなかったハンドアックス石器群が半数以上あるので、その中に軟質ハンマーによるものが存在することも否定できないであろうが、硬質ハンマーによるものが主体を占めていると見なして大過ないように思えた。

ラタムネ遺跡の尖頭形あるいは三稜形ハンドアックスは東アジアの大型両面加工石器に類似しているとの第一印象は全体を見終わってより強くなった。その反対に、東アジアでは極めて特徴的な形態である槍先形のものは見られないようで、また、大きな岩塊や礫片を打ち割った厚めの剥片を素材にしたものも少ないなど、異質な面が有る事も理解できた。これについては、石器製作構造を支えている要素の一つである石材が、ラタムネ遺跡では緻密で良質なフリントが用いられているのに対して、東アジアの大型重量石器の主要石材が石英・珪質岩などであり、その石材の産状や石質が関わっているのであろう、と言うのが見学時点での率直な感想である。

クリーヴァー

アシュリアンを代表する両面加工石器の一方がハンドアックスで、もう一方がクリーヴァーであることは周知の事実である。それにピックも加えられるが、これは槍先形ハンドアックスと区別が困難に思える。ラタムネ遺跡出土の器種分類でも見たようにクリーヴァーは僅か2点のみである。両面加工石器が主に収められていたケースを無作為に選択した中に幸いにもその2点のクリーヴァーが入っており、実見することができたのである。フリントの大型剥片を素材にした1点は直角に近い角度の大きな二つの剥離面が先端部に施されており、もう1点は拳よりやや大きめのフリント礫塊を素材に用いて、先端から体部にかけて両面からのチョッピングツール状の大きな剥離面で構成されている。他のハンドアックスとは形態的・技術的に異なっており、剥離による直線的なエッジが刃部として確保されている。全体的に加工が少ないことや僅か2点と言う数の少なさなどからであろうか、ハンドアックスの未製品の可能性が指摘されている(安斎 1983)。しかし、使用によるものか、何らかのアクシデントによる痕跡なのか明確な判断は下せないが、先端部の直線的なエッジおよびそれに接する両側のエッジにも微細な剥離と磨滅が観察されるので、報告書の通りで良いのであろう。ハンドアックスと同様な素材利用のあり方、すなわち、礫と大形剥片の両者がクリーヴァーの素材にも認められることは当遺跡の石器群やアシュリアン石器群前半期の石器製作の在り方を理解する上で重視したい。

石核・大型石核搔器

無作為に抽出した主要な資料収納ケースの遺物に 15~16 点の石核と判断できるものがあり、それらには 10cm を大きく超えるような大型のものは見られず、剥片剥離作業が進行しているせいか 5~6 cm 大の多面体の石核が目立

ち、フリントの礫塊や礫片を素材に用いたと思われるものが認められた。剥離は自然面や節理面を打面にしてチョッピング状に周辺から横長剥片を取っているようで、当遺跡の定型的な石器で最も数の多い小型搔削器などに、これらの石核から剥離されたものが基本的に提供されたのであろう。石核の中にはフリントという良質な石材に恵まれたせいか、整った縦長の剥離面も見られるものも存在した。また、やや扁平な礫の側面周辺に粗い剥離が施され、その側面の剥離面を打面にして片面に求心状の剥片剥離が施された 10cm 大の石核は注目される資料であろう。

1 点であったが実見することができた大型搔器は、素材にやや扁平な礫を利用しており、平面形は馬の蹄のような「U」字形を呈し、背が高いその側面にはほぼ直角に近い大小の剥離が施され、半円形に鋸歯状の刃部が巡っており、そのエッジには微細剥離が観察される。報告書の器種に重量石器 Core Scraper があり、その典型的な資料と考えられるもので報告書にも実測図が掲載されている。

小型搔削器

ラタムネ遺跡はハンドアックス石器群で象徴される遺跡であるが、数量では小型軽量石器の比率が高く、中でも不定形な小形剥片を素材にした搔削器の多いことは先述したとおりであり、この遺跡の特徴とされよう。ハンドアックスなどの両面加工石器の出現・発達と小型の搔削器は連鎖しているようで、「オルデュヴァイ・インダストリーの石器形態のヒストグラム」(ジョン・ワイマー 1989、86p)によると、オールドワンの大型石器はチョッパーであり、小型剥片石器では僅かに搔削器が認められ、その比率は極めて低い。それが進歩的オールドワン C になると大型石器のバイフェス(ハンドアックス)が礫器を追い抜いており、それと共に小形の搔削器が飛躍的に増加し、その比率は圧倒的に高いのである。大型両面加工石器のハンドアックスなどの石器製作技術は小型搔削器などの剥片石器の発展に技術連鎖するのであろう。

ラタムネ遺跡の石器組成で特に問題視されるのは 102 点のハンドアックスに対してクリーヴァーは僅か 2 点と言う数であり、両面加工石器を特徴とするアシュურიアンの中でもクリーヴァーを組成しない、あるいはほとんど必要としない石器群の存在が示唆されていることである。これとは対照的な状況がイスラエルの地溝帯に所在するジスル・バノト・ヤコブ遺跡で認められる。時期的にもラタムネ遺跡よりやや新しい時期が考えられ、石器組成で数量的にハンドアックスとクリーヴァーが拮抗していること、玄武岩が石材に使用されていること、それに剥片が素材に用いられていることなどアフリカ的な様相が極めて濃い遺跡で、アフリカからの移住などの直接的な関係やアシュურიアン前半期段階における出アフリカを示唆している(安斎 1994、西秋 1997)。

4. アシュურიアン石器群とモード論

J.D. クラークのモード論は、世界の先史時代主として旧石器時代について石器製作技術を 5 つの進化的モード、しかも前のモードを累積的に重ねていく技術形態学に基づく総合的な見方のようで、安斎(1994・2003)、佐藤(2003)、加藤(2001)らの論文で見られる。これらは今回筆者が引用・参考にしたもので、他の研究者の手になるものもあるのであろう。拙稿に関係するのはモード 2 であるが、その前後のモードも含めて東アジアを視野に入れている佐藤から借用したい(佐藤 2003、17p)。

モード 1：チョッパー、チョッピング・トウルと剥片からなる石器群で、オールドワンがその典型である。中国の泥河湾遺跡群の小長梁遺跡等もこれに含まれる可能性がある。主に初期ホモ属が荷担者であろう。

モード 2：ハンドアックス、クリーバー、ピック等の両面加工石器が含まれる石器群。アシュურიアンおよび東アジアのハンドアックス石器群が主な石器群である。ホモ・エレクトゥスが荷担者であろう。モード 1、2 が前期旧石器時代。

モード 3：ルヴァロワ技法のような、調整石核技術に特徴づけられる。中期旧石器時代に相当し、ムステリアンと東アジアの各種石核技術が含まれる。古代型ホモ・サピエンスの時代。

ラタムネ遺跡の石器群はハンドアックスで代表されるアシュურიアンの両面加工石器であり、当然、モード 2 になる。佐藤は「東アジアのハンドアックス石器群」も主なものとして上げているが、西側のアシュურიアンのハンドアックス石器群とは異なるものと捉え、「モビウス・ラインの東西で異なる様相を持つハンドアックスがあると見るの

が自然ではないか」(佐藤 2004、25p) と。なお「東アジア型ハンドアックス」については、西世界のアシュール系のハンドアックスとは技術が異なり、基部側に原礫面を残し、調整加工が先端部に集中していることなどをその特徴として上げている。それと共に、「アシュール系と同様、先端が尖るタイプ（ピック、狭義のハンドアックス）と平縁なタイプ（クリーバー）の大きくふたつが存在する可能性が高いので、アジア型のハンドアックスと見ておきたい」(同 25p) と理解の示し、先のモヴィウスラインに関連して「アシュリアン系と非アシュリアン系の分布的対立」(同 26p) の構造を考えている。なお、先に上げた最近の論攷では東西における分布的対立では「後期アシュリアン」としている(佐藤 2008、印刷中)。

そこでラタムネ遺跡の石器群観察から得た筆者なりの理解を加え、モード 2 の石器群と東アジアのハンドアックス石器群の特徴を考察してみる。

ハンドアックス、あるいは広く大型両面加工石器群について、まず石器素材の視点では、東アジアにおける大半の大型両面加工石器で使用される基本的な素材は、手ごろな大きさ・形・重さの礫・礫片であり、石器製作の最初の段階に自然界に存在する礫・礫片からの素材の選択・確保がある⁵⁾。モード論に関して安斎は「モード 2 は大型剥片または両面体石核を素材にする両面加工石器すなわちハンドアックス・クリーヴァー・ピックの製作で特徴づけられ、アシュリアンが含まれる」(安斎 2003、78p) とある。この際礫・礫片が上がっていないが、素材の一つである「両面体石核」の元もとの素材には、礫・礫片それに大型剥片が使用されていると考えられるので、モード 2 石器群での両面加工石器の素材は礫・礫片と大型剥片の二つに置き換えることができよう。実際、別の行で、アシュリアンの両面加工石器は「大型剥片を素材とした人類史上初めて出現した大型石器」(同 93p) と素材に剥片が使用されていることを重視している。

モード 2 の両面加工石器の素材は、東アジアでは手ごろの大きさの礫・礫片を基本にしているが、西アジア・アフリカ・ヨーロッパなどでは、さらに大形剥片が素材に加わり、しかもそれに比重をおいた石器製作に最も大きな特徴があり、東アジアのそれとは異質な面が認められる。先に上げたラタムネでは極めて少数の存在であったが、アシュリアンの基本的な石器組成ではハンドアックスと共に器軸の一端に直交あるいは斜めの直線的な鋭いエッジを有するクリーヴァーが存在しており、この石器では素材としての大型剥片と製品との対応関係は、ハンドアックスよりも強固な結びつきが見られる。同じモード 2 の両面加工石器でも石器製作工程の最初に大型剥片という素材確保の手段として礫・礫片を打ち割ると言う新たな一段階が加わる。この新たな石器製作構造はモード 1 の礫・礫片を素材にしたチョッパー、チョッピングツールには認められないものである。藤本(1994) は後期アシュール型のハンドアックスを指してであるが、礫器とは全く異なった石器であると認識している。

これらのことをクラークの石器モード論に当てはめると、東側の両面加工石器は素材に礫・礫片を用いたものが卓越しており、それは見方によればモード 1 の石器製作の伝統に関連させて位置づけることも可能である。それに対して西側のそれはモード 1 石器群の伝統とモード 2 の新たな石器製作構造の両方が存在することになり、それでいて、東側世界の大型両面加工石器とは反対に、より剥片素材に傾倒したモード 2 にアシュリアンのハンドアックス、クリーヴァーの特徴が表れているのである。また、ラタムネ遺跡のハンドアックスの項で問題にしたように、素材の確保を最初から目的にした「意識的な打ち割るか」、それとも「打ち割られたものからの選択か」によって重大な差異が生じるが、前者の可能性が高く、自然界の礫・礫片から素材に相応しいものを選択する段階とは、石器製作の構造上一線を画するものと判断される。よって素材に大型剥片が用いられる石器製作技術の発現をモード 2 の特徴と考え、アシュリアンはまさにモード 1 に新たな素材利用が付加された累積的なモード論に基づいた「モード 2」として理解したい。その際重要な事は、モード 2 の新たな石器群構造がチョッパー、チョッピングツールと小形剥片からなる石器群モード 1 からの直接的な発展・進化としてとらえることが出来るかどうかである。言葉を変えて言うと、モード 1 は自然界に在る礫・礫片の中から彼らが目的とするチョッパー・チョッピングツールを作るのにふさわしい素材を選択するのに対して、モード 2 は大きな礫塊・礫片を打ち割ることで様々な大きさの剥片が出来る事を認知し、それらの中から形・大きさなどが相応しい剥片を素材に選択、あるいは、剥片生産の開始直前にあらかじめ想定した目的的な大形剥片を意図しての剥離、次に、素材剥片が具備する鋭いエッジをそのまま活用し、もしくはそれに加工を加えて大形石器を作る。この二者の石器製作構造には大きな間隙が存在すると考え、モード 1 から 2 への直接的な

発展・進化の可能性は低いであろう。

アシュリアンの両面加工石器を特徴とするモード2石器群構造は、礫や礫片を適当な大きさに打ち割る剥片剥離技術や石器体部の両面に剥離面を重ねるような調整技術を育む。それは同時に素材あるいは製品としての小型剥片やそれを用いた各種の剥片石器の発達を促し、さらにはルヴァロワ技法などの各種の調整石核技術に連鎖して、中期旧石器時代の「モード3」の石器構造に累積されていくことになるのであろう（藤本 1994・佐藤 2003）。

このように考えると東アジアの両面加工石器は西側のアシュリアン石器群のハンドアックスとは異質なものと見て、東側世界への波及の可能性はなくなる見解に落ち着くことになる。ところが、東アジアの両面加工の大型石器群にはモード1石器群の伝統が認められながら、その一方で、（註5）でも見たように礫塊や礫片から剥離されたと判断される大型剥片を素材に用いたハンドアックスやクリーヴァーが少数ながら存在しており、これまで述べてきたようなアシュリアンをその代表とするモード2石器群構造の特徴が確実に認められるので、このことを重要視したい。すなわち礫・礫片から素材としての大形剥片を確保して、大型両面加工石器を製作するモード2の石器製作構造の出現、言い換えると、大形剥片素材の利用と言う新しい製作技術の採用・受け入れは極めて大きな出来事であることは先述した通りであり、東アジア世界での礫器を主体とした石器群構造からの直接的な発達は望めなく、アシュリアン石器群の波及に起因するものと予測したい。

モード1からの技術進化の可能性が低いことに関連する見解として「すべてのハンドアックスに共通する一つの事実、この石器はある型式に従って作られたということである。チョッパー石核インダストリーには存在しない、一定の定型化が認められるのである」（ジョン・ワイマー 1989、136p）。このような考え方に対峙するものとして、「古型のハンドアックス、アブヴィユ型と三稜形型とは、それぞれ礫器から技術・形態学的発展を遂げた石器である」（安齋 1983、3p）との見解が論理的であるとしている。すなわち、尖形チョッピングツール→プロトハンドアックス→アブヴィユ型ハンドアックス、さらに断面三角形の礫製ピック状石器→三稜形ハンドアックスの過程でそれぞれハンドアックスが出現したとの考えである。しかしこの論文の註の中では、この発展段階説に異議を唱える研究者も多いとして、M.D. リーキーとJ.D. クラークの見解も合わせて紹介している。

東アジアではアシュリアン石器群伝統の波及による可能性の高い新たなモード2石器群構造を取り込みながらも大勢は、礫や礫片素材のチョッパー・チョッピングツールで象徴される大型重量石器と小型剥片石器を主体としたモード1石器構造の伝統に融合されたのであろう。よって、手ごろの礫・礫片を素材にしたものと、さらに素材に大型剥片を用いた両者の石器群伝統を合わせ持つハンドアックスなど両面加工石器が少数、客体的に組成され、西側世界とは異なる石器構造を東アジア的モード2石器群の一つの特徴として理解したい⁶⁾。

5. アシュリアン石器群の東アジアへの波及

先にも触れたように西アジア・インド亜大陸などのアシュリアンと東アジアの前期・中期旧石器時代の大型両面加工石器との関連の究明は、それぞれの地域における当該期石器群の正確な理解が必要なことは勿論、また、中間地帯の実態解明も不可欠であり、時間軸についての対比も当然必要である。これらのことが十分解明されているわけではないが、結論的には先述したモード2の解釈からアシュリアン前半期石器群伝統の波及の可能性を東アジアー中国・韓国のチョッパー・チョッピングツールと小形剥片石器を主体とする前期・中期旧石器時代に考えたい。

1980年代から西アジアやインド亜大陸のアシュリアン石器群を意欲的に言及している安齋は、この20年ほどの間に韓国を始め東アジア各地で発見されている大型両面加工石器について、アシュリアンとの関連では次のような理解を示している。中国の前期旧石器時代にモードIとモードIIの二つがあり、「モードII石器群は大型石器を組成し、三稜尖頭器と呼ばれる石器はアシュリアンの前期に多いピック状のハンドアックスを連想させる」（安齋 2003、98p）と述べているが、「東アジア型モードII石器群は大型の礫と剥片を素材とする両面加工石器を組成するがその種の石器は比較的数が少なく、またアシュリアンに特徴的な形態的均整のとれたハンドアックス、クリーヴァー、ソフトハンマー打法やルヴァロワ技法などの技術が欠けている。この点を考慮して、アシュリアン石器群には編入しないほうがよいであろう」（同 99p）と両者の関連については消極的である⁷⁾。

それでいて、安齋の先行研究の一部でアシュリアン石器群統一「形態的均整のとれた」・「ソフトハンマー打法

ヤルヴァロワ技法」等でないが東アジアへ波及した可能性を抽出できそうであり、それらを探してみる。

モヴィウスラインではインド以西の地域が「ハンドアックス石器群伝統」として設定され、インド亜大陸の南側地域にはアシュリアン石器群の分布が認められ、西側世界との関連が窺えるのである。その一方で、ガンジス川よりも北側の地域では礫器・小型の剥片石器を持つツアニアン石器群が存在しており、「……、ジャワの化石人骨の人類進化上の系統的 position と年代をどのように観るか、それとの関連性によっては古くからの東の伝統とみなすことも可能である」（安斎 1994、216p）。また、インド亜大陸のアシュリアン石器群は技術形態学的に前期と後期とに分けられ、様相は多様で、西アジアの石器群に類似するものも、中国の石器に似るものもある（安斎 2003）。これらはインド亜大陸において、西からの新たな伝統と東側の伝統の両者の存在が示唆されており、この両者は必ずしも相容れない関係として見るだけでなく、時として友好的な状況も想定でき、前期旧石器時代における東アジア地域とインド亜大陸との石器群伝統の交流も考えられよう。すなわち、ホモ・エレクトゥスが西側から持ち込んだアシュリアン前半期石器群伝統のモード 2 石器群と東アジアのチョッパー・チョッピングツール、小型の剥片石器群伝統のモード 1 がインド亜大陸で出会う。あるいは地域によっては融合して東アジア的モード 2 石器群の萌芽の可能性も存在し、それはそのままアシュリアン石器群の波及が東アジア石器群に及ぶ前哨戦としての様相を呈するとの理解もできよう。このような理解や解釈が少しでも可能であれば、東アジアへのアシュリアンの波及の波はより大きく、速まるであろう。さらには東アジアの百色遺跡群（黄 2003）・丁村遺跡（裴 1980）で発見されている各種の大型両面加工石器や全谷里遺跡（鄭 1984・85、裴 2001）、金坡里遺跡（Bae 1999）などのハンドアックス、クリーヴァーに認められるモード 2 の特徴は、西側世界のハンドアックス石器群伝統とは全く無関係な存在ではないとの傍証になると思われるのである。

アフリカから西アジア、さらにヨーロッパそしてアジアへと拡散したホモ・エレクトゥスが周口店猿人洞で発見されていることは余りにも有名であり、さらにこの北京原人よりも形質人類学的に古相を呈するより年代がさかのぼる藍田原人などが東アジアで発見されていることもよく知られている（佐川 2001）。これらは中部更新世に繰り返し訪れる気候変動などによって、時期を違えて何回もの波が東アジアに押し寄せたためであろう。それらの一波のホモ・エレクトゥスの諸集団と西側のモード 2 石器群の波及が連鎖する可能性は考えられないのであろうか。すなわち、東アジアで客体的に存在するハンドアックス石器群はアシュリアン前半期石器群伝統がホモ・エレクトゥスによってもたらされることによって、はじめて東アジアでモード 2 石器が誕生したと考える方が自然のように思える。ただ、東アジアにもたらされたであろうアシュリアン石器群構造が当初のままの保障はなく、波及の途中での様々なファクターによって石器組成の欠落や石器製作技術の変容などもあり得よう。

そのような波及が仮定されるなら、時期についての具体的な候補として、東アジアの前期・中期旧石器時代と西側世界との関連を積極的に言及している黄自身の発掘調査がある。華南地方の広西チワン自治区にある百色盆地遺跡群で「73～80 万年前（フィッシュトラック法）の地層から、アフリカやヨーロッパのアシュール文化のハンドアックスに対比できる両面加工石器が見つかっています」（黄 1999、7p）。この年代についてのクロスチェックは手続き上当然必要であるが、西アジアのアシュリアンの早い時期に整合する値のように思える。さらにモード 2 のアシュリアン石器群の東アジアへの波及については複数回の波を考えなければならないであろうが、その一つとして、アフリカ・西アジアからの本格的なヨーロッパへの移動・進出による「最初のヨーロッパ社会（50 万～30 万年前）」（C. ギャンブル 2001）および西アジアの後期アシュリアンの始まりが 50～40 万年前頃（西秋 1997）を勘案すると、東アジアへは 50 万年前の前後に到着していたとの推測も可能である⁸⁾。また、インド亜大陸西側へはアシュリアンの前期、遅くとも中期に到着している（安斎 1983）を考慮するとそれらに近い時期の波及も考えられることになる。このような東アジアへの波及がアシュリアンの前半期に想定されたとしても、それらの年代が東アジアで出土しているハンドアックスなどの両面加工石器にそのまま当てはめることは出来ないのは言うまでもなく、波及およびその後の東アジア世界における地域的な多様な環境の違いやその適応に基づく石器群構造などによって石器群伝統の表れ方は異なり、存続期間についても同様に複雑な状況が予想されよう。

アシュリアン前半期の石器伝統が関わって成立したであろう東アジアの大型両面加工石器の製作構造であったが、大形剥片を素材にした本来の伝統・技術は石英・珪質岩のような節理が多く入る硬い石質や産出状況がフリント

と異なることなどに起因して十分発揮できず、目的とする大形剥片を効率的に確保できなかったのであろう。このことも、東アジアの大形両面加工石器の中で、素材剥片と製品との対応関係が強いクリーヴァーが少ないことに関係していると思われる。その結果、東アジアでの両面加工石器は大形剥片素材の確保を補うものとして、節理等で大きな平坦面が形成されている自然界に存在する礫片や礫塊を選択・利用するそれ以前のモード1の伝統的な石器構造に傾倒したアジア的モード2石器群構造が形成される。

アシュリアン石器群伝統が東アジアで定着・発達しなかった要因の一つとして石材を上げたが、安斎（1983）・加藤（2000）らによって紹介されている環境変化で解釈する渡辺仁の機能的再適応の考え方、すなわち、礫器に伴ってハンドアックスが認められると言う状況について、ハンドアックス文化は森林に入ると再適応を起こして、ハンドアックスが脱落して、古い原始的な礫器類を中心とする文化に逆戻りする現象が見えると言うのである。この現象は礫器・小型剥片石器を主体にした石器群に客体的にハンドアックス石器群が認められる東アジアにおけるアシュリアン石器群の在り方を解釈する上で興味深い見解である。これらに関連して、新石器時代以前の東南アジアの礫器について、「重量があり、かつ下端部に刃部を有する刃器は、機能的におそらく新石器時代の石斧（手斧）に相当するものと考えられる。木や竹を伐り倒し、道具を作り出すときにおいて最も役にたった道具のはずで、獲物の解体にも使えたはずである」（西村 2005、184p）との見解がある。

一方、ハンドアックス石器群の機能について、「大型で先の尖ったハンドアックスの中には土掘り具だった可能性が考えられるものもある。しかし実験してみると……、土掘り作業では棒状のものよりはるかに非能率的だった。また、しょっちゅう土を掘っていたら、石器に独特の摩耗痕が残されるはずだがそれらが検出された例はない」（ジョン・ワイマー 1989、138p）との記載も注目される。また、ハンドアックス石器群の用途については草原適応の代表的な石器として狩猟を主な生業とする生活（藤本 1994）や「狩猟具に向かないことはわかるが、何に使ったのか明らかでない」（安斎 2003、93p）などの意見もみられ、その機能・用途は定かでない。

6. 中国・韓半島の前期・中期旧石器時代とアシュリアン石器群

中国の旧石器時代研究を精力的に推し進めている加藤はアシュリアン石器群伝統の波及について、どのような理解を示しているのだろうか。「中国北部最古の旧石器文化にも面的剥離による大形石器の製作技術が存在する。しかし、それはアシュール文化のそれとは異なり、……影響を認めるにはいたっていないと判断できよう」。その理由として、東アジアの両面調整石器は器体が分厚く、形状が大きく異なることを上げ、また他の要素として、「調整剥片剥離技術なども中国の旧石器文化には基本的に欠落しており、その差はきわめて大きい」と。さらに、中国北部の「旧石器文化の製作技術には、もともと、両面調整石器やなた状石器、面的剥離による大形ツール製作技術などアシュール文化にもみられる技術が内包されていたと考えられる」（加藤 2000、113・114p）と共通する技術要素の存在は認めているが、アシュリアンとは無関係に東アジアー中国で独自に発達したとの見解である。

両面調整石器ーハンドアックスーの側面の分厚さについては先述したように、ラタムネ遺跡のアシュリアン資料の限られた観察でも、側面観が厚みのある尖頭形や三稜形のものが見られることを十分窺えたのである。実際、調査者のクラークも、ラタムネ遺跡のハンドアックスは幅と厚みの比率で側面が分厚いものが多いことを特徴として指摘している（クラーク 1967）。先の加藤の指摘は後期アシュリアンのハンドアックス石器群との対比では、軟質ハンマーによる調整剥片剥離技術の大きな差異も含めて妥当であるが、それ以前のものではアジアの大形両面加工石器の形状・調整と共通している要素が認められるように思える。

加藤による一連の中国の旧石器時代研究ではⅠ・Ⅱ期が前期旧石器時代で、それぞれがクラークのモード1・2にほぼ相当するようである⁹⁾。Ⅱ期石器群の技術的特徴を4点にまとめている内容で、「①比較的定形性の高い剥片を剥離する数種の剥片剥離技術をもつ、④小形ツールにも舟形石器、周縁調整石器、削器など、定形的な器種が増加する」の2点はモード3に限りなく近いもののように思える。それに対して「②大形ツール製作の過程で作出された剥片を小形ツールの素材とする点、③大形ツールが比較的発達し、面的な剥片剥離技術が多用された両刃礫器、片刃礫器、鶴嘴状石器、なた状石器、両面調整石器、球状石器など多くの器種が存在すること」（加藤 2003、125p）の二つはモード2の特徴であり、東アジアのモード1からの直接的な発達と見るよりも、むしろ西側のアシュリアン石器群伝統

の波及を介在させた方が理解しやすいであろう。

モヴィウスラインでも少し触れた、東アジアの前期旧石器時代におけるアシュール文化の波及を一貫して説いている黄は、中期旧石器時代の「丁村インダストリーも……ユーラシア西方の後期アシュール文化の特徴を確実にもっているのです」、さらに周口店 15 地点では「……クリーバー、小型円盤形石核、小型ハンドアックスなどに後期アシュール文化の要素を部分的にもっています」（黄 1999、8p）¹⁰⁾。このような黄らによって出されている見解に対して、加藤は K. シックが両面加工技術はアシュール文化では地域的・時間的に連続しているのに対し、東アジアではその状況が認められないことを決定的な違いとして黄らの意見を否定している、とシックの論文の一部を引用している。加藤自身はそのシックの立論の根拠を認めていないが、この見解に「大型石器の」、あるいは「大型剥片素材の」の言葉を前に添えて、両面加工技術の存在は東アジアでは地域的・時間的に連続していないと言い換えれば、必ずしも外的を外れてないように思える。ただ、これはシックのようにアシュール文化との関連を否定する要素としてではなく、むしろその伝統の波及およびその後における東アジアのモード 2 石器群の地域的・時間的な適応の様相を示唆するものとしての理解するのである。このことは先述した石器群自体に認められる東アジア的モード 2 石器群の特徴に対して、遺跡の地域的・時間的な在り方をもう一方の特徴として把握することで、「東アジア的モード 2 石器群」の理解がより明瞭になる¹¹⁾。

中国・韓国における旧石器時代遺跡・石器群の編年究明に取り組んでいるメンバーの代表者である松藤は、東アジアの華南では「礫器のほかハンドアックス（握槌）、クリヴァー（握斧）、ピック（鶴嘴状石器）、石球を伴う遺跡も知られている。こうした石器群は「華南礫石器文化」伝統と呼ばれ……」さらに、「熱帯～亜熱帯森林環境下で樹木の伐採、根茎類の掘り出しなど植物性資源の開発に特化した道具であったみられる」（松藤 2007、108p）と述べている。また、韓半島の礫器文化には礫器に伴ってハンドアックス、クリヴァー、石球など華中・華南の礫石器と類似点が多いと指摘し、具体的な資料として元當里遺跡出土のハンドアックスを掲載している。しかしながら、ハンドアックス、クリヴァーなど出自やアシュール文化との関連については触れてない。元當里遺跡の調査者である崔茂藏はアシュール文化との類似や年代的にもほぼ同じころと波及を示唆している（崔 1997）。佐藤も「まだ全くの仮説段階であるが、これら東アジア型ハンドアックス石器群は、前期アシュール文化の影響を強く遺存した石器群ではないかと考えている」（佐藤 2008、印刷中）。筆者もこれまで述べてきたようにアシュール文化前半期石器群の伝統が東アジアへ波及した可能性は極めて高いとの見通しを持っている。

最後に韓半島の前期・中期旧石器時代におけるアシュール文化石器群波及の可能性について簡単にしておく。

1978 年、アシュール文化石器群に類似した両面加工石器が発見されたことに端を発した韓国全谷里遺跡では、その翌年から表面採集や発掘など多方面にわたる調査が続けられている¹²⁾。全谷里遺跡の調査に早くから関係している鄭永和は、全谷里遺跡調査報告の結語で「前期旧石器時代のアシュール両面核石器文化を代表するきわめて重要な遺跡であると結論づけられる。……朝鮮半島における最も確実な前期旧石器時代遺跡として基準遺跡となることは勿論のこと、ひいては東北アジアを代表するアシュール両面核石器文化を保有している……」。また、モヴィウスの「二大分布圏の理論が将来修正される可能性は言うまでもない」（鄭 1985、150p）と、東アジアへの波及には積極的である。また、金元龍と共に全谷里遺跡の調査に古くから参加している裴基同の最近のアシュール文化に関連する文献で、漢灘江・臨津江流域地域の遺跡では「形態的には前期に属する石器インダストリーがいくつかの地点で発見され、その石器中には典型的なアシュール文化型のハンドアックスが含まれていることから世界的に非常に注目される地域である」。しかも西ヨーロッパの「アシュール文化型石器インダストリー」と大きく異なるところがなく、「明確にアシュール文化型の特徴を備えていることは間違いない」と述べている。しかし、それらの西側からの波及について具体的な言及は見られず、「いつどのように進化したのか、その時間幅がどれくらいかについては未だ明らかでない」（裴 2006、29・40p・2007）と結んでいる。

7. まとめ

100 万年前以降、気候の寒冷化が促進され、氷期と間氷期のコントラストがますます明確になるという（C. ギャンブル 2001）。この気候の変化によって、ホモ・エレクトゥスがアフリカから西アジアへ出たと考えられるようであり、

先述したように前期あるいは中期アシュリアンのハンドアックス石器群を携えたホモ・エレクトゥスの一団が、インド亜大陸の西部にまで確実にたどり着いている。しかし、その移動はそこで終わったわけではなく、さらに南・東南アジアや東アジアへと歩み続けていることを当該地における化石人骨の発見が示している。そのルートについては定かでないが¹³⁾、アシュリアン石器群伝統の東アジアへの波及はルート途中における各地域の自然環境やその適応形態によって石器構造が変容したことも推測されるであろうし、また、東アジアの各地に到着した時点での状況は一様でなかったと想像される。しかしながら、ホモ・エレクトゥスの東進に伴ってアシュリアン石器群伝統が東アジア諸地域へ波及した可能性は高いと考えたのである¹⁴⁾。

その結果、モード2のハンドアックス石器群の形態的・技術的伝統が、それ以前にすでに展開していたチョッパー・チョッピングツール、小型の剥片石器伝統などを主体にした石器群に加味され、礫・礫片と大型剥片の両者を素材にしたハンドアックスなどの両面加工石器が組成に加わり、また、少数ながら剥片素材のクリーヴァーを伴うケースも存在するモード2石器群構造が東アジアにおいて出現したという見解である。

それでいて、環境適応と言う基本的な要因や波及が行われた時点での多様な状況と共に、東アジアの重量石器の主要石材であった珪岩・石英脈岩類には大形剥片を素材にして平坦な大きな剥離面で体部が構成される大型両面加工の石器製作構造は適さなかったようである¹⁵⁾。これらのことは、アフリカ・ヨーロッパなどの後期アシュリアンで見られるような均整のとれた薄手のハンドアックスが東アジアの前期旧石器時代を通じて発達しなかったことや、大型両面加工石器が客体的な存在でしかなかったこと、さらに東アジアにおけるルヴァロワ技法やムステリアン伝統など中期旧石器時代のモード3の調整石核技法の欠如などと、無関係と思われえないのである。結局、東アジアにおいてハンドアックス石器群伝統の両面加工石器は、モード1以来の礫器類などの大型重量石器と小型剥片を主体にした石器群の中に融合してしまい、アシュリアンの伝統は百色盆地などの華南地域や黄河中流域、長江流域、それに韓半島の漢灘江・臨津江流域などで飛び地的な状況で辛うじて保たれたのであろう¹⁶⁾。

このように東アジアでのハンドアックス石器群は散在的・局地的に認められる傾向が読み取れ、チョッパー・チョッピングツール石器群伝統に客体的な存在として組成される様相は、まさに東アジア的モード2石器群の特徴とされよう。すなわち、東アジアにおけるアシュリアン前半期の石器群伝統は形態的・技術的に親和性が認められる先端が尖り気味に加工された大型両面加工石器である大尖状器・尖頭状礫器・鶴嘴状石器、なた状石器などに融合し、あるいは影響を与えるなど石器の製作技術や形態を変えながら特化し地域化したと考えられるので、東アジアにおける大型両面加工石器の在り方やその消長も地域によって異なる状況が見られるのであろう。この東アジア的モード2石器群と西側世界で発展したモード2石器群の差異は、基本的には藤本が力説するような「草原と森林」(藤本 1994、2001) という東西の大きな環境生態の差異に起因するのであろうが、さらに東アジア地域内での中部更新世や上部更新世前半における気候変動や多様な環境¹⁷⁾ に適応した行動戦略が石器群自体や遺跡の地域的・時間的の在り方の差異として発現されたと考えておきたい。

謝辞

シリアのユーフラテス河中流域ビシュリ山系の調査参加ならびにラタムネ遺跡の資料見学等の機会を与えて頂いた国土舘大学大沼克彦、東京大学佐藤宏之、それに文献の入手などでお世話になった東京大学安斎正人の諸氏には日ごろから啓発されることが多く感謝している。特に今回は、大沼氏には休み中の旧石器担当者に根気よく交渉を重ねて頂いた結果、何とかラタムネ遺跡石器群の資料見学が可能になり、その石器群の写真撮影では佐藤氏の手を煩わせた。また、この拙論では安斎氏の先行研究に負うところが大きい。銘記してお三方に改めて心からお礼を申し上げたい。

註

(1) アシュリアンの内容の記述で「後期アシュリアン石器群の多様性」(安斎 1994、206p)、あるいは「定着と発展—後期アシュリアン」(西秋 1997、26p) などの見出しが付けられていることから、アシュリアン前半期(前期・中期)と後期との違いが理解できる。

- (2) ラタムネ遺跡および出土石器群に関しては(安斎 1983・1994)、(西秋 1997)などの論文・著書に見ることができ、また、ラタムネ遺跡に先行する前期アシュールリアンのウベイディヤ遺跡(イスラエル)についても触れられている。
- (3) ハンドアックスのこの製作実験については安斎(2003)によっても紹介されており、モデルは後期アシュールリアンおよび中期旧石器時代に入るアシュールリアン伝統のムステリアン型である。ラタムネ遺跡のハンドアックス製作技法とはハンマーを含め精度が異なるので、製作工程における剥片・チップの数量はそのまま比較することはできないであろうが、参考材料としてみることができよう。
- (4) ハンドアックスを作るホモ・エレクトゥスの認知の問題に関連して、ワインやミズンなどの研究者を上げ、その例として「ハンドアックスを作ることをホモ・エレクトゥスが「決めた」のではなく、ハンドアックスを作るかどうかを左右するのは、手近にある石材の塊の大きさや形や割れ方の特性などの石材環境に左右されることが理解されている。」(安斎 2003、94p)との文脈は、西側世界とは異なる東アジアにおける大型両面加工石器群製作の在り方を理解する上で有効のように思える。
- (5) 佐川(1992)は中国の大型重量石器である礮器の分類を行っており、チョッパー、チョッピングツールと並列してピック・ハンドアックス(ピック・ハンドアックス)を設け、尖頭部の作り出しで二大別し、さらに素材による細分では「自然礮か剥片であり、前者が多い」。さらに、並列して分類項目を立てているクリーヴァーについても素材は同様としている。ピック・ハンドアックス、クリーヴァーの素材に比率的には少ないが剥片を用いたものが在ることを分類細別で採用している。剥片が素材に用いられていることからかモード2を、しかしながら、自然礮が卓越することからアジア的モード2を考えることができよう。
- (6) 安斎(2003)は東アジアのモード2は西側のそれと異なるとして「東アジア型モードII」を設けている。拙稿では次節でのべるように内容の一部が異なることから「東アジア的モード2」として、一応区別している。(下線は筆者による)
- (7) 後半の行については、後期アシュールリアン石器群との対比が上げられているようで、前期・中期のそれとではどうであろうか。先の引用に続いている「東アジアにおいては、モードI、モードII、アシュリアンを区分する指標に対する共通認識が形成されておらず、また、それらの間の違いがいかなる要因—生物学的、文化的、認識的・環境的・石器製作上の規範的、あるいは技術的—によるのかも、今後の研究課題として残されている」(安斎 2003、99p.)を傾聴したい。
- (8) 後期アシュールリアン型ハンドアックスの出現については30万年前(藤本 1944)、あるいは20～30万年前(藤本 2001)があり、この年代によれば、後期アシュールリアンの発達した石器製作伝統を持たないホモ・エレクトゥスが東アジア地域へ拡散した一波が30万年前を少し遡る頃も考えることができよう。
- (9) 旧石器時代をI～V期に区分しており、I期(早期)については約45万年前を境にしてI a期とI b期に細分し、前者の定型的な石器として「なた状石器、鶴嘴状石器」を上げ、後者では定型的な石器として「小形両面調整石器」が出現・定着する。約25万年前からのII期(前期)では「小型ツールの製作技術と大型ツール製作技術が分離・並立する構造の石器製作技術をもち、大形ツールに、なた状石器、鶴嘴状石器、両面調整石器など定型的な器種が存在……」(加藤 2001、98・100p)、そして、約10万年前に開始されるIII期にはそれらが衰退する。これによると、アシュールリアン石器群の波及の一つを45万年前に想定でき、I b期からII期にかけて大形ツールの製作技術伝統が発達したと考えられ、10万年前頃には消えてしまうことになる。これらの年代は東アジアにおけるアシュールリアン石器群伝統の波及・発達・終焉の時期を具体的に知る手がかりにされよう。
- (10) 「華北の大型重量石器の伝統も黄のようにハンドアックスを示準としてみるよりは、三稜大型尖頭器と大型剥片製敲打器を特徴として、西侯度→藍田→匭河→丁村と続く「匭河→丁村系」とみる賈蘭坡の系統観に分があらう」(安斎 1994、251p)と、アシュールリアンのハンドアックス石器群を組み込んだ黄の前期・中期旧石器時代観を否定している。安斎が指摘している三稜大型尖頭器と大型剥片製敲打器であるが、丁村遺跡の大型剥片素材の片面あるいは両面加工の石器にはハンドアックス、クリーヴァー、ピックと認定するのに相応しい石器が認められ、

また石球状石器も出土している（裴 1980）。一方、匠河遺跡の石器群については、報告書の英文要旨、掲載写真とその輪郭を図示した資料による限り、丁村のそれらとは大きく異なっているように思える。それに匠河遺跡の chopping-tool の素材に剥片製の存在を考えていることからすると Heavy triangular point が剥片素材との判断にはわかに信じがたい（賈・他 1962）。実見していない資料であるが、礫片素材であろう。これらに対して、丁村遺跡の大型両面加工石器には技術的・形態的にアシュリアン石器群伝統の可能性の高いものが認められ、さらに石器群のセットが揃っていると見なされることも重視し、「匠河→丁村系」の系統にアシュリアン石器群伝統を介在させて理解したい。

- (11) この「東アジア的モード2」の特徴に、裴基同の「韓半島と中国を包括する東アジア地域ではルヴァロワ技法が顕著でなく、小形石器が増加する。多くの地域では前期旧石器時代の原始的な石器製作伝統が持続しており、これはハンドアックス伝統が目立って発達していないことと関係があるようにみえる。言い換えれば、長くて薄い剥片を剥離する剥離法が開発されていないため、ハンドアックスが形態上の進化を見せず、古い時期の石器製作伝統がそのまま持続しているようにみえるのである」（裴 2001、7p）との指摘も付け加えることができよう。
- (12) 全谷里遺跡はこれまで多くの発掘調査が行われ、幾つもの報告がある。その一つである嶺南大学校博物館の中間報告によると（鄭 1984b）、5地点の表面採集および3地点の発掘調査によって、Biface 42点、Clever 15点、Pick 7点、Polyhedral stone 137点のアシュリアン石器群のセットと見なされる石器が、チョッパー、チョッピングツール、スクレイパーなどと一緒に発見されている。石器の形態的・技術的な特徴による器種認定では、中間的な、あるいは不確定なものなどが存在し、研究者による異なる見解も当然予想されるが、それらを差し引いても当遺跡での発見数およびセットは、やはりアシュリアン石器群の波及を強く示唆しているものとして理解できる。ただ、これらの大型両面加工石器が東アジアのチョッパー・チョッピングツール石器群伝統のモード1から直接出現するとは考え難く、また、これらの石器が前期・中期アシュリアンと年代的にどのように符合するかについては今後検討されなければならない事は言うまでもない。ここではアシュリアン石器群伝統の波及の可能性についての判断材料として、当遺跡で発見された大型両面加工石器の数とセットを重要視しておきたい。なお、全谷里遺跡の石器群の年代について、約30万年前（裴 2001）、35～30万年前（松藤他 2007）が考えられており、これらの年代は東アジアにおけるアシュリアン石器群伝統の波及が認められる一つの時期として受け止めることができよう。
- (13) 佐川（2001）は原人のアジアへの拡散ルートとその回数は単純でない」と指摘した上で、原人の東アジアへの移動ルートについて、石器セットの変化・欠落の問題は東南アジアからの北上では説明出来ないとして、中央アジア経由で東アジアに移住した可能性を予測している。すなわち中国華北と韓国ではハンドアックス・クリーヴァー・球形石器のセットが揃って存在するが、湖北省ではクリーヴァーを、南ではさらに球形石器も欠くと。アシュリアン石器群との関連性については特に触れていないが、基本的なセットの在り方を問題視しているので波及を考えているのであろう。現に「東アジア旧石器時代の大型重量石器を考える」（佐川 2008）で、中国・韓国のチョッパー、ハンドアックス、ピック、クリーヴァー、多面体・球形石器について、その年代や組成などの問題に言及している。その中でこれらの大型重量石器の東アジアでの存在に関連して「……このような現象がアフリカからユーラシアまで各地で偶然発生したとは思えないのである。この問題は学術的に検討する価値は十分にある」（同 169p.）と述べている。
- (14) アシュリアン石器群伝統の波及の可能性を言及している段階で、波及時での状況を視野に入れることは本論から飛躍することになりそうであるが、西アジアやインド亜大陸西部で認められたアシュリアン石器群伝統に限りなく近い状況での波及もあれば、それと逆に西側での石器製作伝統が欠落してその一部のみがもたらされることも考えられ、その中間的な状況も存在したであろう。
- (15) 「珪岩、溶岩、細粒の火成岩ではかなり加工が難しい。それにもかかわらず、アフリカの珪岩製のハンドアックスは、ヨーロッパのフリント製のハンドアックスの出来栄えに決してひけをとらない」（ジョン・ワイマー 1989、141p.）との例がある。また、インドに所在する後期（末期）アシュリアンのビーンベトカ岩陰（III F-23）では93点のハンドアックスと215点のクリーヴァーなどの大半が剥片素材で、その石材は遺跡の近辺

には無い紫あるいは暗灰色の珩岩が選択的に使われ、5336点の剥片石器類とほぼ同数の剥片は、岩陰の周辺に多く存在する黄色の珩岩が利用されている（安斎 1994）。これらは珩岩がハンドアックス石器群の素材として使われ、器種による珩岩の選択性が認められ、良質なものは大形の両面加工石器の製作が可能で、そうでないものでは困難との解釈が良いのであろうか。東アジアの大型重量石器の主要素材の一つである珩岩の多くは質が悪いということなのか。それに、（註4）の石材環境とはどのように連鎖するのも今後の研究課題となろう。（下線は筆者による）

- (16) これらの分布について、「予断は許されないが、東アジア型ハンドアックス石器群（大型礫器も共存）は、モヴィウス・ライン東側にあたる中国南部から朝鮮半島にかけて分布し、その外側では主として大型礫器から構成される石器群が存在しているらしい」（佐藤 2008、印刷中）との見通しを示している。
- (17) 地域的な環境の多様性を示すものとして、「花粉分析によれば、東シナ海北部の大陸棚と沿岸地区に前期更新世以来サバンナが繰り返し出現したことが明らかになっている」（黄 1998、304p）。この古環境の復元に従えば、アフリカなどでアシュリアンが展開した自然環境に近いものがこの地域に想定されることになり、ハンドアックス石器群についての別の視点も考えられることになろう。

主要引用・参考文献

- 安斎正人 1983 「アシュール系石器群のアジアにおける展開」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』Vol.3 1-43p.
- 安斎正人 1994 「アジア大陸の文化の発現」『理論考古学—モノからコトへ—』193-252p. 柏書房
- 安斎正人 2003 「石器から見た人の行動的進化」『考古学』I 78-128p.
- 安斎正人 2007 「西アジアの旧石器時代に関する覚書」『セム系部族社会の形成』平成17年度研究報告 12-22p.
- 加藤真二 2000 『中国北部の旧石器文化』同成社
- 絹川一徳 2001 「朝鮮半島」特集 前期旧石器文化の諸問題『季刊考古学』第74号 45-48p.
- 佐藤宏之 2003 「中期旧石器時代の地平」『博望』第4号 9-22p.
- 佐藤宏之 2004 「ハラム・モビウスと東洋的停滞」『法政史学』61 17-31p.
- 佐藤宏之 2008 「東アジアの後期旧石器時代の形成」『異貌』26号（印刷中）
- 佐川正敏 1992 「中国旧石器時代の礫器」『大分県丹生遺跡群の研究』389-406p.
- 佐川正敏 2001 「中国」特集 前期旧石器文化の諸問題『季刊考古学』第74号 41-44p.
- 佐川正敏 2008 「東アジア旧石器時代の大型重量石器を考える」『芹沢長介先生追悼 考古・民族・歴史学論叢』芹沢長介先生追悼論文集刊行会 167-187p. 六一書房
- 西秋良宏 1997 「三大陸人類大回廊—旧石器時代—」17-46p.『世界の考古学』西アジアの考古学⑤ 同成社
- 西村昌也 2005 「熱帯アジア地域の狩猟採集民の生業像—時間軸と区間軸の変異—」『食糧獲得社会の考古学』現代の考古学2 168—192p. 朝倉書店
- 藤本強 1994 『東は東、西は西—文化の考古学—』平凡社
- 藤本強 2001 「旧世界の前期旧石器文化をめぐって」特集 前期旧石器文化の諸問題『季刊考古学』第74号 14-19p.
- 松藤和人 2007 「東アジア旧石器時代の文化圏—中国・朝鮮半島を中心に—」『文化領域と文化伝播 アジア歴史地理』1 102-115p. 朝倉書店
- 松藤和人・麻柄一志・中川和哉・津村宏臣・黄昭姫 2007 「レス—古土壌編年による東アジア旧石器編年の再構築」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』予稿集 77-99p.
- 黄慰文 1992 「中国華南地方の初期人類の残した礫器文化」『大分県丹生遺跡群の研究』407-415p.
- 黄慰文 1998 「中国前期旧石器文化研究の新展開」『旧石器時代の考古学』297-306p. シンポジウム『日本の考古学』1 学生社
- 黄慰文・佐川正敏 1999 「原人たちからのメッセージ—中国前期・中期旧石器研究の新成果—」『日本考古学』第8号 1-10p.

- 黄慰善 主編 2003 『百色旧石器』 广西壮族自治区博物館 編
- 賈蘭坡・他 1962 『匭河 - 山西西南部旧石器時代初期文化遺址』 中国科学院古脊椎動物古人類研究所 科学出版社
- 裴文中 主編 1980 『山西省襄汾県丁村旧石器時代遺跡発掘報告』 中国科学院古脊椎動物研究所 第二号
- 房迎三 2007 「江蘇省金壇和尚墩旧石器遺跡の地層と年代」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』 予稿集 68-76p.
- 李超榮 2007 「中国湖北省丹江流域の旧石器文化」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』 予稿集 129-135p.
- 王社江・他 2007 「中国南洛河溪谷における旧石器考古学研究的進展」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』 予稿集 134-139p.
- 金正倍 2005 『韓国の旧石器文化』 六一書房
- 崔茂藏 1997 『漣川元當里舊石器時代遺跡 発掘報告書』 學術叢書 3冊 建国大学校博物館
- 鄭永和・大竹弘之訳 1984・85 「韓国全谷里遺蹟（上）（下）」『旧石器考古学』 28・30 91-134p. 135-154p.
- 鄭永和 1984b 『全谷里発掘中間報告』 學術調査報告第 5冊 嶺南大学校博物館
- 裴基同 1999 「朝鮮半島における旧石器時代考古学の最近の発展」『旧石器時代の考古学』 314-319p. シンポジウム『日本の考古学』 1 学生社
- 裴基同・他 2001 『全谷旧石器遺蹟 2000-2001 試掘調査報告書』 漢陽大学校文化財研究所
- 裴基同・黄昭姫訳 2001 「韓半島の前・中期旧石器時代」『旧石器考古学』 62 1-10p.
- 裴基同・池田公德 2006 「漢灘江・臨津江流域の旧石器遺跡と石器インダストリー」『旧石器考古学』 68 29-42p.
- 裴基同 2007 「全谷里旧石器文化研究の成果と展望」『東アジアにおける古環境変遷と旧石器編年』 予稿集 7-12p.
- C. ギャンブル・田村隆訳 2001 「最初のヨーロッパ社会(50～30万年前)」103-150p. 『ヨーロッパの旧石器社会』 同成社
- ジョン・ワイマー、河合信和訳 1989 『世界旧石器時代概説』 雄山閣
- Clark, J.D. 1967 The Middle Acheulian Occupation Site at Latamne, Northern Syria (first paper). *Quaternaria* IX 1-68.
- Clark, J.D. 1968 The Middle Acheulian Occupation Site at Latamne, Northern Syria (second paper). Further Excavations (1965) : General Results, Definition and Interpretation *Quaternaria* X 1-60.
- Movius, Jr., H.L. 1948 The Lower Paleolithic Cultures of Southern and Eastern. *Transactions of the American Philosophical Society* volume 38 part 4
- Kidong Bae 1999 The Kumpari Paleolithic Site Report of Excavations in 1989 ~ 1992, National Research Institute of Cultural Properties

計画研究「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」

平成 19 年度の研究報告

西秋良宏（研究代表者・東京大学総合研究博物館・教授）

1. 研究組織

研究代表者 西秋良宏・東京大学総合研究博物館・教授
研究協力者 須藤寛史・岡山オリエンタ美術館・学芸員
門脇誠二・カナダ人文社会研究評議会・ポスドク研究員
下釜和也・東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程
木内智康・東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程
久米正吾・早稲田大学大学院文学研究科・博士課程
海外共同研究者 Marjan Mashkour フランス自然史博物館・研究員
Marie Le Miere フランス地中海東部研究所・研究員
Lionnel Gourichon フランス研究担当省・ポスドク研究員

2. 研究の目的と概要

本特定領域研究ではユーフラテス河中流域、ビシュリ山系におけるセム系部族社会出現の経緯やその展開の様相を明らかにすることを大きな目的の一つとしている。粘土板文書の情報によれば、セム系集団は遅くとも青銅器時代には遊牧民として広漠たる乾燥地であるビシュリ山系に展開していたとされている。本計画研究は、当地への食料生産民進出プロセスを多面的に明らかにし、その後展開したセム系集団が形成された素地を探ることを目的とする。

ビシュリ山系のような乾燥地は、灌漑農耕や家畜放牧など一層の技術発展や物資調達のための社会戦略の進展なくして開発不可能である。本研究では、そこでの実地研究によって、初期進出民たちの出自、進出の経緯、年代、生業、社会戦略など乾燥地帯開発の実態を考古学的につきとめる。焦点となるのは、新石器時代に進出した初期食料生産民が青銅器時代以降に記録に現れるセム系集団のルーツとなったかどうかである。また、類似地域との比較研究を通じて、彼らの社会や適応技術、集団関係の特質を明らかにすることもめざす。

2007 年度の研究は、2005 年度以降実施している上記の研究を継続・発展させたものである。フィールドワークによる新資料の入手、ビシュリ山系の諸事情を相対化して理解するための他地域との比較研究、の二つを実施した。

3. 成果の概要

(1) ビシュリ山系野外調査

野外調査は二種類おこなった。一つは、ユーフラテス河中流域にあるガーネム・アル＝アリ遺跡の発掘調査である。この遺跡は青銅器時代の拠点集落であり、セム系集団の集落と目されている。2007 年 8—9 月、および 11—12 月にかけて本特定領域総括班が主宰した発掘調査に、代表者の西秋および研究協力者（木内智康）が参加し、遺物、遺構にかかわる新資料を入手した。当遺跡が灌漑農耕を営む定住集落であることが示唆された。いわば乾燥地進出民の集団形成が完成した頃の姿について調べたことになる。そのデータは、同種の文化・社会様態、生業形式が当地に於いてどこまでさかのぼるか、また内陸に展開した集団との関係を考察する上での比較データとなる。

一方、同年 8 月ならびに 2008 年 3 月に、同遺跡周辺の遺跡分布調査をおこなった（Nishiaki 2008）。これには、西秋のほか研究協力者二名（門脇誠二、久米正吾）が参加した。8 月の調査では内陸部にあたるビシュリ山北麓を中心に調べた。その結果、いくつかの先土器新石器時代末期の遺跡を発見できた。採集した石器を分析した結果、原石原産地に所在する原石採取遺跡、それを繰り返し持ち込み加工使用した遺跡、さらには、完成した石器を携行して逗留した遺跡など、いくつかのタイプに分類できることがわかった。どれも農具を全く含まない遺跡であること、また、長期居住の痕跡を示さないことなどから、遊牧民の遺跡であるとの見通しが得られた。また、石器群は全ていわゆる

ドゥアラ型 PPNB であり、ビシュリ山系以南にみられる南方系のジュラン・ネオリシックは認められなかった。すなわち、ビシュリ山系北縁に進出したのはユーフラテス中流域の集団であり、南方系集団は進出していなかった可能性を示唆することができた。

また、3月の踏査ではガーネム・アル＝アリ遺跡周辺のユーフラテス河畔にある遺跡について調査した。そこでは旧石器時代以降、青銅器時代まで様々な時期に由来する遺跡が多数見つかった。ただし、確実に銅石器時代と考えられる遺跡は見あたらなかった。すなわち、初期食料生産民である新石器時代の集団が銅石器時代をへて青銅器時代集団へと発展したことを示す痕跡は得られなかった。この点は、セム系集団の出現過程に関する重要な知見であるため、今後さらに調査を深め検討していく所存である。

(2) 比較研究

青銅器時代社会の集団関係を探るために、当該期の石器群について検討した。比較材料としたのは、シリア東北部のアブ・フジェイラ遺跡出土標本である (Nishiaki, in press)。本特定領域が発掘中であるガーネム・アル＝アリ遺跡と同時期の農耕村落遺跡であり、かつてドイツ・シリア発掘隊が調査した標本を分析する機会を得た。ここでは、アナトリア山系産の石材を用いた石器が豊富に利用されていたことが明らかになった。これらの石器は、同時期の遊牧民遺跡ではほとんど見つからないものであるから、農耕民と遊牧民とは異なる社会ネットワークを形成していたことが示唆された。この点は、今後、ガーネム・アル＝アリ遺跡出土品も調査して確認したい。

また、昨年度に引き続き、東北シリア、ハブール平原にある新石器時代の農耕村落遺跡、テル・セクル・アル・アヘイマルを対象として北メソポタミア地域への新石器文化波及プロセスについても調べた (Nishiaki 2007a, b など)。当地はビシュリ山系ほどではないが天水農耕がかるうじて営めるに過ぎない乾燥地である。ここでも遺跡が増加する時期には牧畜の導入が本格的に開始されたこと、それに応じて儀礼活動を含む社会様態が急激に変化したことが示唆された。ビシュリ地域での遺跡踏査結果に照らして、さらに比較を進めていきたい。

もう一つの比較研究項目は、食料生産経済萌芽期にあたるナトゥーフ文化の研究である。シリア北西部にあるデデリエ洞窟の発掘標本を材料にして、経済や文化戦略の年代の変遷を調べた (Nishiaki et al. 2008 口頭発表)。14000年から13000年前頃の所産であることが判明した一方、13000年前頃のいわゆるヤングドリアスの寒冷・乾燥化期に居住様態がシリア地方一帯で激変したことも示唆された。乾燥環境への適応のあり方という点でビシュリ山系への進出を考察する際にも比較対照データとなると考えられる。

4. 2007年度の成果 (研究代表者のみ)

(1) 出版物

Nishiaki, Y. (2007a) "A unique Neolithic female figurine from Tell Seker al-Aheimar, Northeast Syria". *Paleorient* 33 (2) : 117-125.

Nishiaki, Y. (2007b) "Patterns in exploitation and use of flint at the Neolithic settlement of Tell Seker al-Aheimar, northeast Syria". In: *Chert Availability and Prehistoric Exploitation in the Near East*, edited by C. Delage, pp. 87-103. Oxford: John and Erica Hedges.

Nishiaki, Y. (2008) "Prehistoric survey at the northern edge of Jebel Bishri, Raqqa". *Al-Rafidan* 29: 151-152.

Nishiaki, Y. (in press) "Notes on the third millennium blades from Tell Abu Hujeira". In: *Trois Campagnes de Fouilles Syriennes à Tell Abu Hujeira, Hasseke (1988-1990) : Cinquieme et Sixieme Parties*, edited by Antoine Suleiman and Philippe Quenet, pp. 31-35. Documents d'Archéologie Syrienne. Damascus: Directorate-General of Antiquities and Museums.

Nishiaki, Y., H. Nakata, M. Yoneda, O. Kondo, S. Muhesen and T. Akazawa (2007) "Chronological changes of the Late Levantine Mousterian industries at the Dederiyeh Cave, Syria" *Anthropological Science* 115 (3) : 245.

西秋良宏 (2007a) 「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」『セム系部族社会の形成：第3回シンポジウム平成17-18年度の研究成果』大沼克彦編：7-12。

西秋良宏 (2007b) 「テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡から見た北メソポタミア新石器時代の編年」『日本西アジア

- ア考古学会 10 周年記念連続シンポジウム：西アジア考古学の編年』：92-95、日本西アジア考古学会。
- 西秋良宏(2008a)「北メソポタミア初期農耕村落の起源 - シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第 8 次発掘調査」『古代オリエント世界を掘る - 第 15 回西アジア発掘調査報告会』：47-51。
- 西秋良宏(2008b)「縄文時代開始期と同じ頃の西アジア - 旧石器時代から新石器時代への移行」『縄文時代の始まり』小林謙一編：20-39、六一書房。
- 西秋良宏(2008c)「西アジア部族社会とビシュリ山系 - 第 4 回公開シンポジウムの記録」『セム系部族社会の研究 Newsletter』10：1-4。
- 西秋良宏(編)(2007)『遺丘と女神 - メソポタミア原始農村の黎明』東京大学出版会。
- 西秋良宏・仲田大人・近藤修・米田穰・S. ムヘイセン・赤澤威(2007)「シリア、デデリエ洞窟のムステリアン石器群」『日本旧石器学会第 5 回大会発表要旨』：12-13。
- 西秋良宏・須藤寛史・久米正吾・下釜和也・木内智康(2007)「シリア東北部、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡の調査」『日本西アジア考古学会第 12 回総会・大会要旨集』：51、日本西アジア考古学会。
- 西秋良宏・仲田大人・米田穰・近藤修・丹野研一・ヨーセフ・カンジョ・スルタン・ムヘイセン・赤澤威(2008)「現生人類の起源を探る - シリア、デデリエ洞窟の 2003-2007 年度調査」『古代オリエント世界を掘る - 第 15 回西アジア発掘調査報告会』：32-38。

(2) 口頭発表

- Nishiaki, Y., S. Muhesen, and T. Akazawa "The Late Epi-Palaeolithic assemblages from Dederiyeh cave, Northwest Syria". The Sixth International Workshops on the PPN Chipped Lithic Industries of the Near East, Manchester University, March 3-5, 2008.
- 西秋良宏「遺丘と女神」公開講演会、東京大学総合研究博物館、2007 年 6 月 2 日。
- 西秋良宏・仲田大人・近藤修・米田穰・S. ムヘイセン・赤澤威「シリア、デデリエ洞窟のムステリアン石器群」『日本旧石器学会第 5 回大会』日本旧石器学会。東京大学文学部、2007 年 6 月 23-24 日。
- 西秋良宏「遺丘と女神」特別講演会、岡山市立オリエント美術館、2007 年 9 月 15 日。
- 西秋良宏・仲田大人・近藤修・米田穰・S. ムヘイセン・赤澤威「シリア、デデリエ洞窟にみられる後期ムステリアン石器群の年代的变化」『日本人類学会第 61 回大会』日本人類学会。日本歯科大学新潟校、2007 年 10 月 6-8 日。
- 西秋良宏「中近東の新石器化 - 文化的側面 La néolithisation au Proche et au Moyen-orient: aspects culturels」『日仏交流 150 周年記念・講演と討論・日仏共同研究プロジェクト Chorus - 日仏間の学術文化交流の現在：家畜化の起源』日仏会館、2008 年 3 月 13 日。
- 西秋良宏・仲田大人・近藤修・米田穰・丹野研一・Y. カンジョ・S. ムヘイセン・赤澤威「現生人類の起源を探る - シリア、デデリエ洞窟の 2003-2007 年度調査」西アジア考古学会。池袋サンシャインシティ、2008 年 3 月 15-16 日。
- 西秋良宏「北メソポタミア初期農耕村落の起源 - シリア、テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡第 8 次発掘調査」西アジア考古学会。池袋サンシャインシティ、2008 年 3 月 15-16 日。
- 西秋良宏「9000 年前のムラ - テル・セクル・アル・アヘイマル遺跡と巨大女性土偶」『在シリア日本大使館講演会』ダマスカス、2008 年 3 月 23 日。

計画研究「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」

平成 19 年度の研究報告

藤井純夫（研究代表者・金沢大学文学部教授）

1. はじめに

セム系遊牧部族の形成過程を、その墓制面から追跡すること。これが、本研究班の課題である。そのため、1) シリア北東部ビシュリ山系における青銅器時代ケルン墓の新規分布・発掘調査、2) ヨルダン南東部ジャフル盆地における新石器時代～青銅器時代ケルン墓の継続発掘調査および既存データの整理・分析、3) アラビア半島各地における青銅器時代墳墓の新規踏査、以上3件の調査を計画・推進してきた（藤井 2005, 2006a, 2006b, 2006c, 2007a）。このうち1) と2) は北西セム語集団の、3) は主に南セム語集団の形成過程を追跡するための作業である。本研究班が力点を置いているのは1) であるが、シリアでの調査許可取得が遅れたため、やむなく2) と3) を先行実施してきた。転機となったのは、昨年度末に実施した予備踏査である（藤井 2007b, Ohnuma and al-Shbib 2008a）。これ以降、ようやく1) に力点が移ってきた。

これを受けて、本年度は2回の現地調査を実施した。第1回目は、ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の分布調査である。この分布調査では、数件のケルン墓群を確認した。第2回目は、上記分布調査によって確認されたヘダージュ1ケルン墓群の試掘調査である。この調査によって、同地域ケルン墓群の構造および年代に関して、一定の見通しが得られた。本稿は、これら一連の調査の概要報告である。

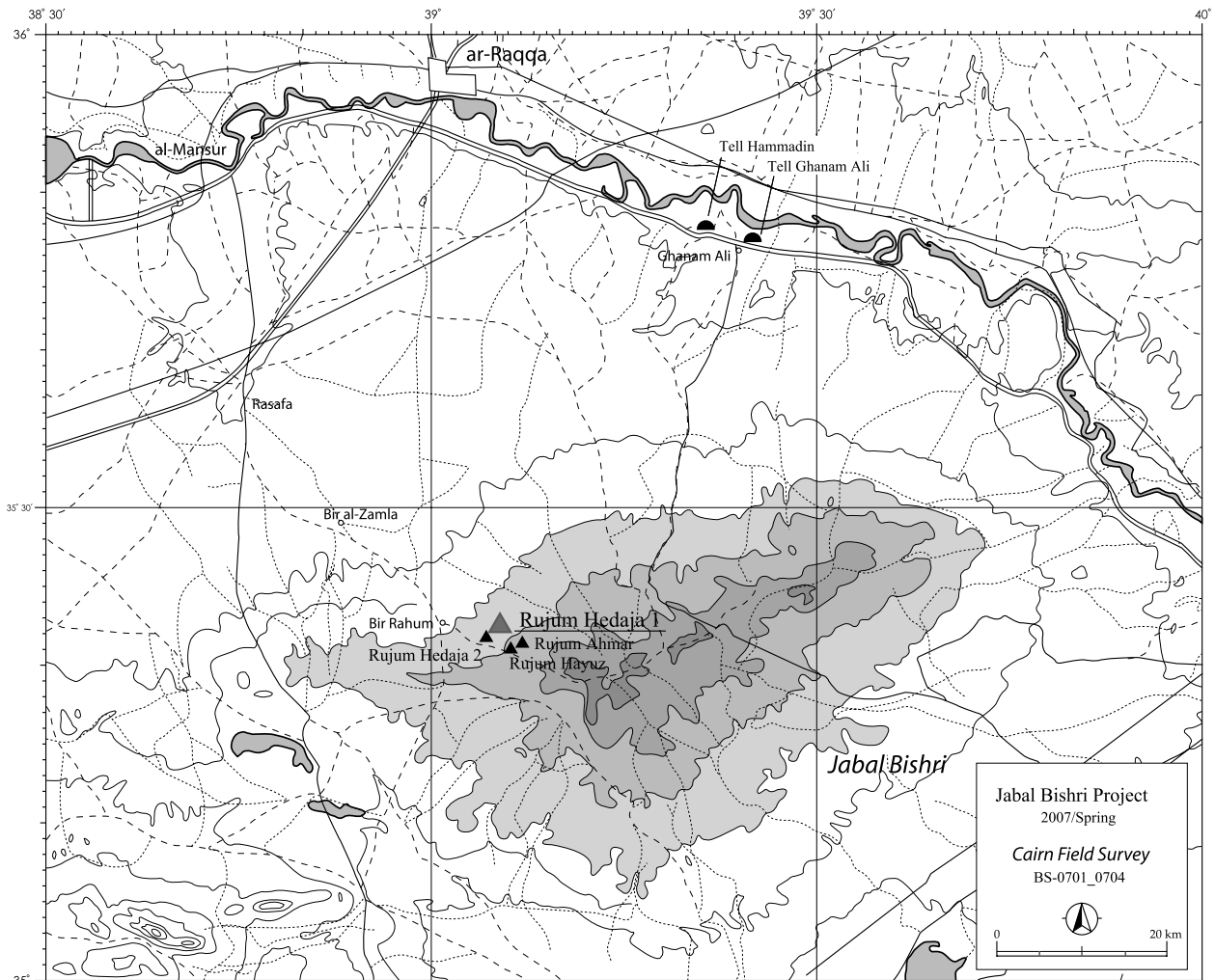


図1 ビシュリ山系北麓のケルン墓群

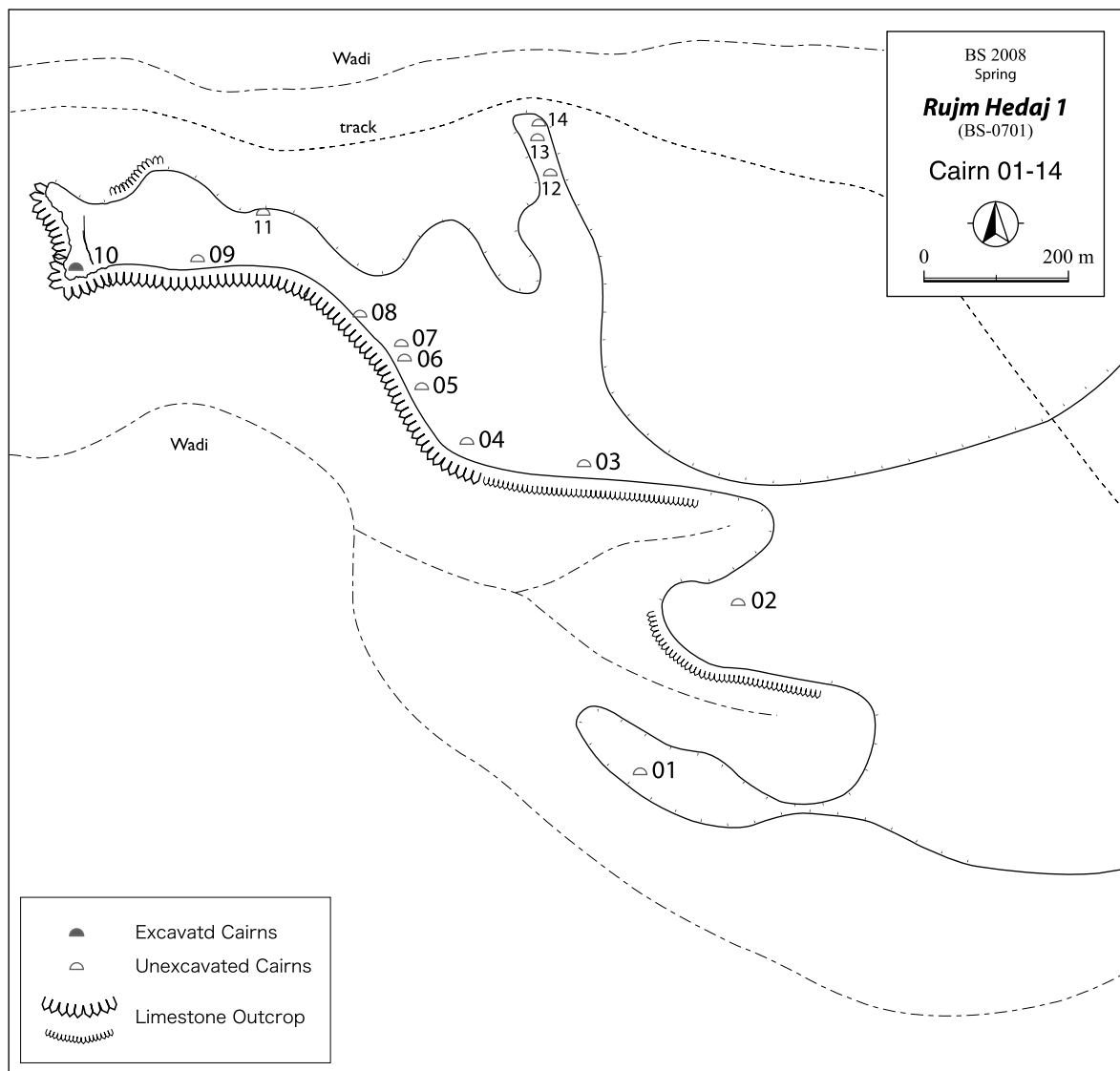


図2 ルジュム＝ヘダージェ 1 ケルン墓群 (概略図)

2. ビシュリ山系北麓青銅器時代ケルン墓群の分布調査

2007年の晩春、5月18日～6月1日に実施した(藤井・足立 2007, Fujii 2008a)。この調査には、筆者のほか、足立拓郎(研究分担者、中近東文化センター附属博物館研究員)、鈴木香枝(研究協力者、金沢大学文学部学生)の2名が参加した。調査の目的は、1) ビシュリ山系北麓における青銅器時代ケルン墓群の分布確認、2) 試掘対象遺跡の選定、の二つであった。

ケルン墓群の広がり予想以上であったため、分布範囲の確認作業はまだ完了していない。ビシュリ山系北麓には数十件のケルン墓群があり、それぞれが数件～十数件のケルン墓を含む。よって、全体としては数百件のケルン墓がある。短期の踏査でこれらすべてをカバーすることは、とうてい不可能であった。ただし、ビイル・ラフブ村(Bir Rahub)の周辺に位置する4件のケルン墓群(ルジュム＝ヘダージェ 1、同2、ルジュム＝アフマル、ルジュム＝ハイユーズ)については綿密な踏査を実施し、地形概略図の作成、個々のケルン墓の計測・記述などを行った(図1)。

試掘対象の遺跡も、この4件に絞って検討した。選定の基準は、1) ケルン墓の型式変遷を辿ることが可能な大規模ケルン墓群であること、2) 個々のケルン墓の保存状態がよいこと、3) 地方道からのアクセスがよいこと、の3点である。検討の結果、ヘダージェ 1 ケルン墓群(Rujum Hedaja 1 Cairn Field)が最も有望と判断された。

3. ヘダージェ 1 号ケルン墓群の試掘調査

上記分布調査の結果を受け、2008年2月28日～3月25日の約3週間にわたって実施した(藤井・足立 2008、



図3 10号ケルン墓の全景（南東から）

Fujii 2008b)。調査参加者は、前回に同じ。調査の目的は、この地域のケルン墓の構造とその年代・性格を明らかにすることであった。

ヘダージェ1ケルン墓群は、ビシュリ山系北麓の寒村、ビイル・ラフーム村（Bir Rahum）の東約5kmにあるテーブル状石灰岩台地の上に位置している。台地南縁に沿って10基、北縁に沿って4基、計14基の大小ケルン墓から成る（図2）。今回の調査では、遺跡西端に位置する10号ケルン墓（RHD-1/BC-10）を発掘した。墳丘の形態や表採土器片の内容などから、前回の分布調査で前期青銅器時代と予測した大型のケルン墓である。墳丘中心部を通る南北線を設定し、その東側を半裁発掘した。ただし、墳丘の主体部は、断面図を作成した後に全掘した。

10号ケルン墓の構造

調査の結果、10号ケルン墓は、1) 墳丘中央に位置する墓室＝シスト（cist）、2) これを取り囲む内側周壁（inner enclosure）、3) 外側周壁（outer enclosure）、4) これらを覆う石灰岩のマウンド（cobble mound）、以上4つの要素によって構成されていることが判明した（図3、4）。また、遺跡層位の点では、第2層（ややしまりのある赤褐色シルト質土壌）の上面に構築されていることが分かった。

墳丘主体部であるシスト（北北西／南南東方向の長軸約6.5m×東北東／西南西方向の短軸約5m×比高約1.2mの不定形プラン）は、厚さ0.1～0.2mの砂利混じり層（地行層）の上に築かれていた。建材は20-50cm大の未加工石灰岩で、モルタルや詰め石は使用されていない。シスト壁面は1列×5-6段の積み石から成り、現在1.0mの高さが残存している。石積みは主に長手積み、ただし最上段の部分は小口積みであった。シスト内には東方向にやや回転した十字形の石棺状石組み（高さ最大約50cm）があり、外壁との隙間には多量の石灰岩礫が詰められていた。十字型の石組みを先に構築し、その後で、シスト外壁と詰め石部分を、同時に少しずつ立ち上げていったものと思われる。残念ながらシスト中央部分は盗掘されていたが、詰め石の上部（石棺上部とも同じレベル）から貝製ビーズ2点（図5: 2, 3）が出土した。なお、石棺内部には計5カ所の人骨集中箇所が認められ、その周囲から大理石製の有孔装身具（図5: 4）が出土した。

内側周壁（同12m×10m×0.8m）は、不定形プランのシストをほぼ相似形で取り囲んでいた。建材には小型

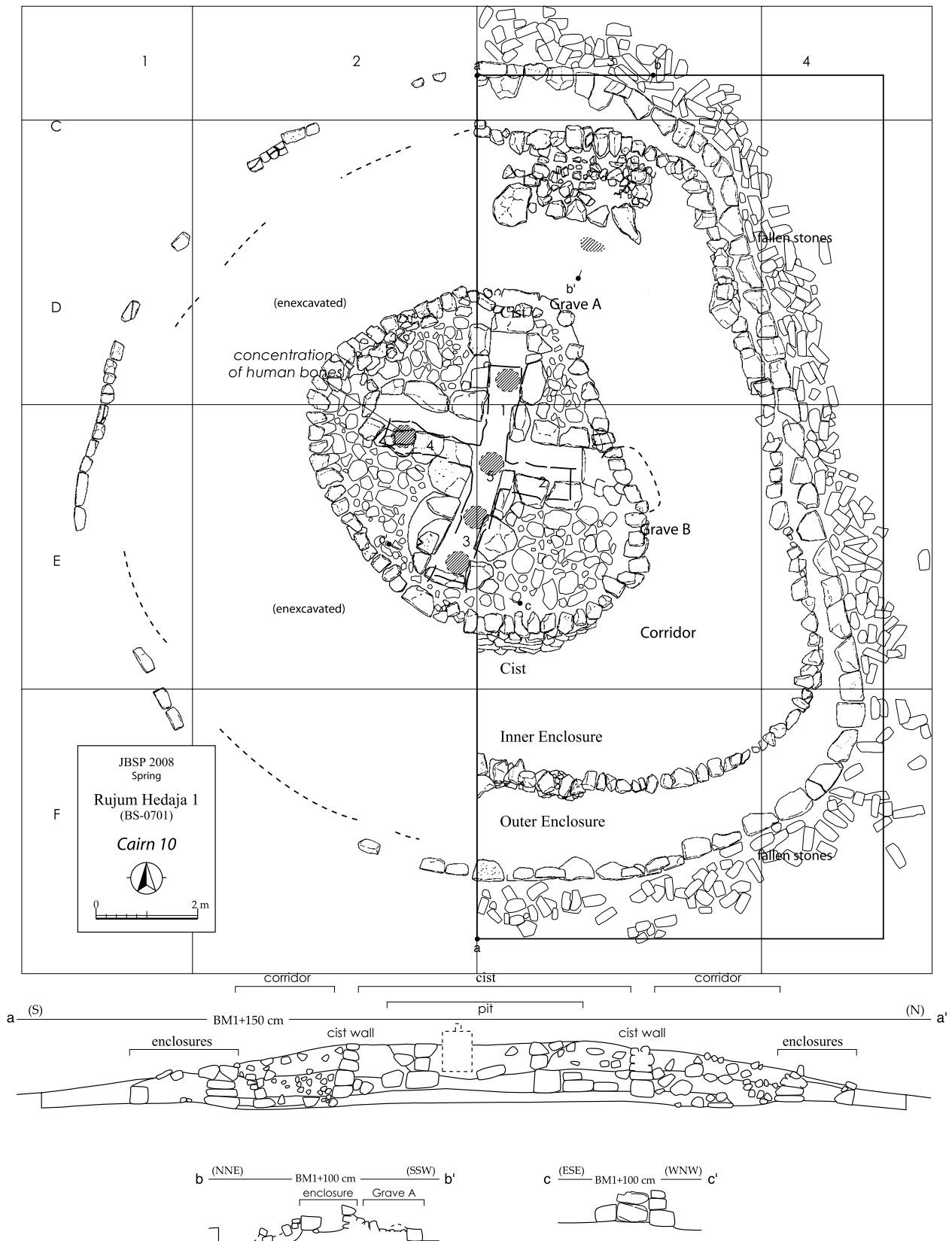


図4 10号ケルン墓の平面図・断層図

かつ不定形の未加工石灰岩が基礎段から一貫して用いられており、1列×3-5段の粗雑な壁面を形成していた。入り口は検出されなかったが、回廊の中央および北端で、2基の小型ケルン墓（陪葬墓？）が確認された。2基とも人骨を出土した。墓Bの石敷き面からは、青銅製の腕輪も出土した（図5:1）。

外側周壁（同 14.5 m × 13 m × 0.5 m）は、内側周壁の壁面高の高い部分では約 1m 離れて、低い部分ではほぼ

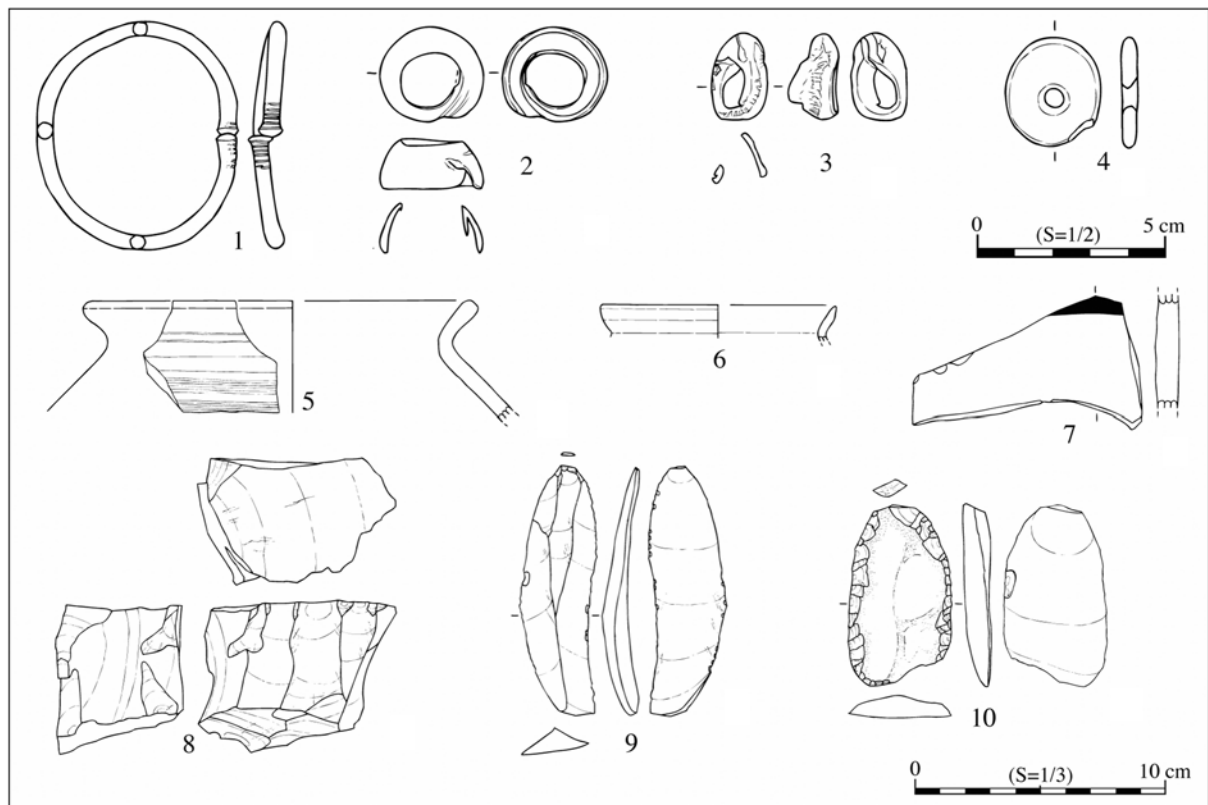


図5 10号ケルン墓の出土遺物

接するように構築されていた。内側周壁とは対照的に、基礎段には大型の石灰岩切石（最大約70cm長）が用いられ、その上にはブロック状に加工された良質石灰岩（幅約30～50cm×高さ約10-13cm×奥行き約15-18cm）が2-3段分、長手積みに積まれていた。この切石には、動物文や綾杉状の幾何学文がしばしば刻まれていた。従って、外側周壁はケルン墓裾野の外表面として丹念に造られたものと考えられる。内側周壁同様、入り口は確認されなかった。

マウンド（外側周壁と同サイズ×シストと同比高）は、20-30cm大の未加工石灰岩とシルト質土壌から成り、その表面はやや大きめの石灰岩で被覆されていた。回廊の一部（特に南からの卓越風の風下にあって保証流が生ずる箇所）に、風成層と思われるシルト質土壌の堆積が認められた。よって、主体部と内側周壁を先に構築してしばらく放置し、埋葬後に外側回廊とマウンドを同時に造り足したと考えられる。おそらくは、生前に被葬者自身が大部分を構築、没後に後継者が埋葬と追加工事を行ったのであろう。

なお、ケルン墓周辺の小型付帯遺構についても、部分的に調査した。その結果、付帯遺構の多くが10号ケルン墓とほぼ同時期であることが判明した。また、その性格についても、1号付帯遺構（Feature 1）は墓域を区画する擬似壁面、5号・6号付帯遺構（Feature 5, 6）は10号ケルン墓構築時の仮住居ないしは作業場、であるとの判断材料が得られた。

出土遺物とその年代

シスト部分が盗掘されていたため、出土したのは数十点の小型遺物だけである。ここでは、10号ケルン墓の年代決定に関わる遺物についてのみ述べる。

まず、土器について。10号ケルン墓出土の土器は、A群（バフ系色の精製土器）、B群（暗赤褐色のスリップがかけられた粗製土器）、C群（その他）、の三群に分かれる。注目すべきは、頸部が「く」の字状に鋭く屈曲したA群の壺形土器である（図5:5）。類例は、L.クーパーの土器編年で言う6期（前2100～前1900年頃）に見られる（Cooper 2006: Fig.1.9.f）。なお、A群には、クーパー編年の5期（前2300～前2100年頃）に特徴的なゴブレット（Cooper 2006: Fig.1.7.f）に類するものも含まれていた（図5:6）。これらのことから、10号ケルン墓出土のバフ系精製土器は、前期青銅器時代末から中期青銅器時代初頭にかけての時期に比定できるであろう。

次に注目されるのが、陪葬墓Bの石敷床から出土した青銅製腕輪である（図5:1）。その特徴は、端部の膨らみと

その直下に施された複数の刻み目模様であるが、これと同型式の事例はまだ確認できていない。しかし、同様の刻み目模様を持つ（ただし膨らみのない）青銅製腕輪は、テル・ブラック (Tell Brak) のアッカド時代末期の層（3千年紀末）に類例がある (Mallowan 1947: Plate XXXV)。このほか、回廊床面から出土したフリント製の石刃やスクレイパーも、重要である（図5: 9, 10）。こうした定型的石器の出土は、10号ケルン墓の年代が前期青銅器時代から大きくは降らないことを示唆している。隣接の5号遺構（層位的に見て10号ケルン墓とほぼ同時期）からも、A群土器片（図5: 7）に加えて、フリント石核（図5: 8）やスクレイパー（図5: 10）などが共伴した。

以上述べたことから、10号ケルン墓の年代は青銅器時代にほぼ特定できるであろう。現状ではそれ以上絞り込むのは難しいが、バフ系精製土器と青銅製腕輪に限って言うと、前期青銅器時代末から中期青銅器時代初頭にかけての年代、すなわち紀元前2000年前後の可能性が高いと思われる。遺構形式および遺物内容から見て、これ以上古くなることはまずないであろう。逆に新しくなるとしてもその修正幅は小さく、中期青銅器時代の範囲内に収まるものと思われる。従って、3千年紀末から2千年紀前半までの年代幅を見込んでおけば、当面十分であろう。

4. おわりに

ビシュリ山系における紀元前2000年前後の遊牧民の墓 ---- ヘダージェ1ケルン墓群は、メソポタミア粘土板文書の言う「マルトゥ/アムッ」の墓である可能性が出てきた。事実、その周囲には類似のケルン墓数百基が密集し、この地域が青銅器時代大型遊牧集団の一大聖地・墓域であったことを示唆している。問題は、年代決定の証拠がまだ不足していることである。この点を、平成20年度の調査で補いたい。5月にヘダージェ1ケルン墓群の追加調査、11月にヘダージェ2ケルン墓群の新規発掘調査、明けて3月にワディ・ラフーム1ケルン墓群の新規発掘調査、をそれぞれ予定している。

引用・参考文献

- 藤井純夫 2005 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』I: 6.
- 藤井純夫 2006a 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『Newsletter セム系部族社会の形成』2: 5-7.
- 藤井純夫 2006b 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『セム系部族社会の形成 平成17年度研究報告』37-43.
- 藤井純夫 2006c 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『セム系部族社会の形成 第2回シンポジウム「研究の現状と課題」』14-17.
- 藤井純夫 2007a 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『セム系部族社会の形成 平成18年度研究報告』30-34.
- 藤井純夫 2007b 「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」『セム系部族社会の形成 第3回シンポジウム「平成17-18年度の研究成果」』3-16.
- 藤井純夫・足立拓朗 2007 「2007年度ビシュリ山系北麓ケルン墓サーベイ」『Newsletter セム系部族社会の形成』7: 1-5.
- 藤井純夫・足立拓朗 2008 「ビシュリ山系北麓ケルン墓群の年代と考古学的意義」『日本西アジア考古学会第13回総会・大会発表要旨集』53-58.
- Cooprer, L. 2006 Early Urbanism on the Syrian Euphrates. New York and London: Routledge.
- Fujii, S. 2008a The General Survey of Pre-Islamic Burial Cairns in the Northern Flank of Jabal Bishri. In: Ohnuma, K. and A. Al-Khabur (eds.) Archaeological Research in the Bishri Region: Report of the Second Working Season. Al-Rafidan 29: 136-138.
- Fujii, S. 2008b A Brief Sounding at Rujum Hedaja 1. Working Report submitted to the Department of Antiquities of Syria.
- Mallowan, M.E.L. 1947 Excavations at Brak and Chagar Bazar. Iraq 9: 1-259.
- Ohnuma, K. and S. Al Shbib. 2008 Archaeological Survey in the Bishri Region South of Raqqa – Report of the First Working Season. In: Al-Maqdissi, M. and K. Ohnuma (eds) Preliminary Reports of the Syria-Japan Archaeological Joint Research in the Region of Ar-Raqqa, Syria, 2007. Al-Rafidan 29: 119-133.

計画研究「西アジアにおける都市化過程の研究」

平成 19 年度の研究報告

常木 晃（筑波大学人文社会科学研究所・教授）

研究代表者：常木 晃（筑波大学人文社会科学研究所・教授）

研究分担者：三宅 裕（筑波大学人文社会科学研究所・准教授）

山田重郎（筑波大学人文社会科学研究所・教授）

池田 潤（筑波大学人文社会科学研究所・准教授）

石田恵子（古代オリエント博物館研究部・部長）

1. 研究の目的

現在、都市の起源として欧米の学界で広く認められているのは、紀元前 3,500 年ごろのメソポタミア・ウルク期の巨大な集落遺跡群である。この都市の出現は人間社会のあり方を根本的に変え、これ以降人類の歴史は都市を中心に回っていくことになる。現在でも都市は政治・経済・文化の発信基地となっており、世界の中心は都市にあるといっても過言ではない。それではなぜ都市が歴史に登場してきたのだろうか。この人類史の一大画期をめぐってこれまでも様々な仮説が提示され議論されてきた。環境変化や資源の偏在、戦争、交易など様々な要因が取り上げられてきたが、いまだ十分な解答が得られていないのが現状である。

私たちは、その大きな原因は、西アジアにおける都市の発生を農耕社会の発展という視点からしか捉えてこなかったことにあるのではないかと考えている。現代のアラブ社会を見ても、二律背反的な世界が実は 1 つの社会を形成し、歴史を動かしていることが分かる。都市と砂漠という、全く異なる環境に生きる都市民と遊牧民が、様々な部族社会的ネットワークで結びつき、互いに離反集合を繰り返しながら統合的な社会を形成しているのである。本研究ではこのような視点を重んじながら、都市形成に当たって遊牧社会に代表される部族社会が大きな役割を果たしたことを、考古学的、歴史学的、言語学的な資料を抽出することによって明らかにしていくことを目的としている。

2. 研究の方法

考古学分野では、シリアのイドリブ地域およびジャバル・ビシュリ地域で現地調査を行っている。この 2 つの地域を取り上げるのは、地中海性森林帯を背景に都市的集落が早くから成立する前者と、草原砂漠帯で遊牧民の原郷とも目されてきた後者というように、自然環境や歴史的文化的状況が対照的なあり方を示すからである。しかしそれにもかかわらず両地域の歴史発展の背景に、部族社会の影を色濃く看取することができる。

イドリブ地域では研究代表者が継続してきた先史時代の都市的集落であるテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査と出土遺物の整理研究を活用して、集落構造や出土遺物の中で部族性を表示すると思われる考古学的資料の抽出を目指している。また上記調査用の宿舎のあるアイナータ村を主なフィールドに、現代の村の形成プロセスを民族誌的に追跡することにより、部族的な紐帯と集落形成のかかわり、墓地の形成過程などを追究している。ジャバル・ビシュリ地域では、ユーフラテス河の氾濫原に営まれていた都市的集落遺跡と近くの墓地遺跡、そして山系内に営まれていた遊牧民キャンプサイト相互の関連性を追跡することにより、部族社会が都市的集落の形成、展開に果たした役割の抽出を目指している。またここでも調査地であるガーネム・アリ村を主なフィールドに、現代の村の形成プロセス、墓地の形成を民族誌的に追跡している。

歴史学、言語学分野では、セム系部族社会に関わる歴史的文献、セム語に関わる文献を収集し、その解題を進めるとともに、都市社会の形成過程にセム系部族社会がどのように関わってきたのかについての考察を進めている。特に文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系および西アジア各地との関わりについて整理し、都市的集落の出現、発展期である紀元前 3000 年紀から 2000 年紀にかけての部族社会に関わる歴史的、言語的事項の抽出に努めて

いる。

3. 2007年度の成果

考古学分野では、イドリブ地域とジャバル・ビシュリ地域で現地調査を実施した。イドリブ地域のテル・エル・ケルク遺跡の発掘調査では、2006年度までに巨大な新石器時代集落の中に認められる住居様式にいくつかの相違が認められること、特に個人や家族を表象していると見られる印章・印影システムの中に2つの大きな人間集団の存在が看取できること、などが明らかにされた。2007年度の調査では土器新石器時代半ばの紀元前6500年ごろの墓地が発見された。これは、集落内の空き地に造営された40基以上の墓からなり、現代まで連なる概念の墓地のさきがけとして、歴史上非常に重要な意味を持っている。ここから出土した各人骨の大臼歯と長骨の一部を日本に持ち帰ってDNAおよびアイソトープ分析を進めてきたが、その目的のひとつが、人間集団の抽出である。こうした科学分析の結果、食性（当時の人々が淡水性の魚類を主な蛋白源としていたこと、コムギやマメ類を多く摂取していたこと、また男女で肉類などの摂取量に大きな差がないことなど）や外内婚のあり方（15歳までに形成されるストロンチウムのアイソトープの分析では、狭いルージュ盆地内を主な通婚圏としていたと考えられること）などを示す貴重なデータが得られている。ただし、DNAを抽出、増幅できた人骨はきわめて限定的なため、細かい人間集団の違いなどを把握するには至っていない。

ジャバル・ビシュリ地域については、2007年11月～12月にかけて実施された領域全体の現地調査に、本計画研究班から研究代表者と研究協力者の2名が参加した。その成果に関しては総括班の報告に譲るが、私たちの関心は特に、先史時代から青銅器時代にかけてのユーフラテス河沿いとビシュリ側台地上の遺跡の相互関係にある。また、現代のガーナム・アリ村の民族誌についての調査を行い、同村の成り立ちなど歴史についての基本情報および、同村が9つのアイーラ（大家族）から形成されていて、村全体の共同墓地とそれぞれのアイーラが持つ個別の墓地が存在していること、それぞれのアイーラの空間的な位置関係などについての情報を得た（後述）。

歴史学分野では、昨年から引き続きセム系部族社会に関わる多くの歴史文献を収集するとともに、その解題を研究分担者の山田重郎が進めている。特に文献に現れるセム系言語集団の系譜とビシュリ山系との関わりについての基本的事項を網羅的に整理する作業が進行している。また本特定領域の計画研究「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」班（研究代表者・沼本宏俊）に協力して、ハブール川流域に所在するテル・タバム遺跡出土の粘土板文書の解読を進めている。本特定領域と特に関連の深い事項は、同粘土板文書の中に現れるアムル人名の抽出であり、このような作業が進行することで、紀元前2千年紀のビシュリ山系からハブール川にかけての地域の遊牧民の動向を把握する重要な資料になると思われる。

言語学分野では、研究分担者である池田潤が、セム語に関連する文献資料を収集し解題を進めており、山田重郎のおこなっている歴史学分野の研究と総合していわゆる「セム語族」の原郷探さが進行中である。なお、本計画研究の歴史学分野と言語学分野を担当している山田、池田の2名の研究分担者は、平成19年度に本特定領域の計画研究「シムール文字文明」の成立と展開（研究代表者・前川和也）と計画研究「パレスチナにおける都市の発達と「セム」系民族の展開」（研究代表者・月本昭夫）と連携し、共同研究を実施した。

4. 2007年度の業績（本研究に関連するもの）

Tsuneki, A. and Hydar, J. 2007年6月 A Decade of Excavations at Tell el-Kerkh, Department of Archaeology, University of Tsukuba, 26pp.

Tsuneki, A. 2007年6月 Development of the clay sealing system in the Neolithic period in West Asia、セム系部族社会の形成平成18年度研究報告 pp.36-43.

常木 晃 2008年3月 「新石器時代の巨大集落—シリア、テル・エル・ケルク遺跡の2007年度調査—」『考古学が語る古代オリエント2007』pp.39—46.

常木 晃 2008年2月 「ガーナム・アリ村の歴史」西アジア部族社会とビシュリ山系 於：サンシャインシティ・コンファレンスルーム（口頭発表）.

- 三宅 裕 2008年3月 「トルコ考古学この10年」 『西アジア考古学』9、3-9頁。
- Miyake, Y. 2007年5月 2005 Yili Diyarbakir Ili, Salat Camii Yani Kazisi. 28. Kazi Sonuclari Toplantisi 2. Cilt, 283-294, T.C. Kultur ve Turizm Bakanligi, Kultur Varliklari ve Muzeler Genel Mudurlugu, Ankara.
- Miyake, Y. 2007年10月 Salat Cami Yani: Dicle Havzasi'nda Canak Comlekli Neolitik Doneme Ait Yeni Bir Yerlesme. Anadolu'da Uygarligin Dogusu ve Avrupa'ya Yayilimi: Turkiye'de Neolitik Donem, Yeni Kazilar, Yeni Bulgular. 37-46. Arkeoloji ve Sanat Yayinlari, Istanbul.
- 山田重郎 2007年10月 「アッシュルバニパルの図書館」 『中近東文化センター附属三笠宮記念図書館 News Letter』4号：2-3頁。
- Yamada, S. 2008年3月 “Preliminary Report on the Old Babylonian Texts from the Excavation of Tell Taban in the 2005 and 2006 Seasons: The Middle Euphrates and Habur Areas in the Post-Hammurabi Period,” *AI-Rāfidān* 29 (2008), pp. 47-62.
- 山田重郎・柴田大輔 2008年3月 「2007年シリア、テル・タバノ出土楔形文字文書」 『平成19年度 考古学が語る古代オリエント — 第15回西アジア発掘調査報告会報告集』, 西アジア考古学会, 16-19頁。
- 池田 潤 2007年 「カナン発信のアマルナ書簡の位置情報について」 『一般言語学論叢』第10号 (2007), pp. 93-116.
- Ikeda, J. 2007年6月 Semitic Urheimat: A Linguistic Survey セム系部族社会の形成平成18年度研究報告 pp.45 — 51.
- 池田 潤・森 若葉 2008年3月 「古代オリエント言語研究の動向:第53回国際アッシリア学会報告」 『オリエント』50(2), pp. 275-285.
- Ikeda, J. 2007年7月 Diglossia in Emar, 53e Rencontre Assyriologique Internationale, Moscow-St. Petersburg, 23-28 July 2007 (口頭発表).
- Ikeda, J. 2007年10月 Early Japanese and Early Akkadian Writing Systems: A Contrastive Survey of "Kunogenesis", International Symposium on the Origins of Early Writing Systems, 5-7 October 2007, Peking (口頭発表).

5. 平成19年度研究成果の一部

ガーネム・アル・アリ村の歴史 (常木 晃)

1) ガーネム・アル・アリ村は、ラッカ市より約50km下流のユーフラテス川沿い (現在の本流より約3km南)、ラッカ—ディ・エッ・ゾールのハイウェイ沿いに位置する、近年に入植された典型的な村落である。ここでは、この村落を視점에部族や人間集団について考えてみたい。はじめに、同村の基本的な事項を整理する。

- ・ガーネム・アル・アリ村の行政区分： アル・ラッカ県 (Mohafaza ar-Raqqa)、サブハ郡 (Nahia Sabha)、ガーネム・アル・アリ村。

- ・村名の由来： 同村より約50km下流にあるハラビヤ・ザラビヤ (Halabiyeh Zalabiyeh) に2世紀ほど前に居住していた Ghanem al-Ali という人物名に由来しているとされる。現在の村民たちは、全て、自分たちがガーネム・アル・アリの子孫であると信じている。

- ・現在の村の成立： ガーネム・アル・アリの子孫はまず現在の村に近いユーフラテス河沿いに入村したが、洪水のために1946年～1947年にかけて、現在の村に村落ごと移動してきた。

- ・人口：約10000人、世帯数は約700世帯。

- ・主な生業：農業と牧畜。主要農作物は、綿花・コムギ・サトウダイコン・野菜。農地は村全体で約8000donoms (c.800ha)。飼育されているヒツジの数は約4万頭。

2) EB期の集落と墓地

ガーネム・アル・アリ村の歴史は、少なくともEB期までさかのぼる。今のところこの時期のはっきりしている集落は、もちろん村の北東に位置するテル・ガーネム・アル・アリであるが、これに対応する墓地が、村の東端にある Wadi Daba 沿いからその南側の丘陵上に認められる。そこは、テルの位置する最低位段丘から最も近い丘陵部 (Tell

Shabout) にあたる。これらの多くは縦坑墓であり、数千基に上るとされる。縦坑墓群は丘陵上で南に2～3kmほど断続的に続いており、南端がドイツ隊の調査した Abu Hamed となる。テルの EB 期土器とほぼ同じ EB III～EB IV A と思われる土器を表採することができるが、Wadi Daba 沿いでは Euphrates Banded Ware が表採でき、Tell Shabout では Plain Simple Ware が主に表採できるなど、地点によってやや様相が異なっている。これらが時期的な違いを示しているのか、人間集団や社会的な差異を示しているかなどの解明は、これからの課題である。

3) ガーネム・アル・アリ村の現代史 (概要)

上述したように、Ghanem al-Ali という名の男が 200 年ほど前に Halabiyeh Zalabiyeh にいたようだ。その男の家族は農地の問題から、Halabiyeh Zalabiyeh を出ることを決意した。彼の 5 人の息子が、Halabiyeh Zalabiyeh を出て、紆余曲折の末に、現在の Ghanem al-Ali 村にほど近いユーフラテス河のほとりに定住した。この 5 人の息子にはそれぞれ子供がおり、主な息子は 9 名であった。

これらの息子たちの子孫は、60 年ほど前におこった洪水のために、ユーフラテス河のほとりにあった村を捨て、1946 年～1947 年にかけて、丘陵近くに現在のガーネム・アル・アリ村をつくった。

彼らのうち、Mohsen の息子である al-Qoran 一族は 40 年ほど前に離村したが、他の 8 人の息子一族は、村に住み続けて、ガーネム・アル・アリ村の有力氏族となった。Ghanem al-Ali の甥に当たる Al-Subeat の一族が村に合流し、全部で 9 の氏族が村に居住するようになった (al-Qoran 一族の離村との前後関係は不明)。

村民の全ては、Qabila は bu-Shaba'an, Ashira は al-Subeat であり、この 9 氏族は民族学で言うクランというよりもリネージに近いと思われる。そうだとすると、大家族、ないし拡大家族と呼ぶべきであろう。これらの 9 氏族の区分は、ガーネム・アル・アリ村の日常生活にも影響を与えている。例えば、居住地区など。しかし婚姻などに差異はない。最もはっきりとした区分は、共同墓地 (テルを使用) 以外の氏族墓に表れている。現代のガーネム・アル・アリ村が造られてから村人は全てテルに葬られていたが、1990 年代より氏族別の墓地が造られるようになり、現在テルを含めて 5 つの墓地がある。これらの墓地は、それぞれの氏族の系譜が意識されたものとなっている。逆に言えば、墓地というエティックな資料から、氏族というイーミックな概念に迫れる可能性が生じるわけである。

計画研究「シュメール文字文明」の成立と展開

平成 19 年度の研究報告

前川和也（国士舘大学 21 世紀アジア学部・教授）

北イラクからシリア・ハブル川上流地域、さらにユーフラテス中流域地方に、南部メソポタミアからいつ頃粘土板記録システムが導入されたのだろうか。

現在のところシリア諸都市にかんして知りうる最古の粘土板テキスト群は、前 3 千年紀中葉〈おそらく前 25 世紀後半〉に位置づけられる（エブラ、テル・レイラン、マリ）。とりわけエブラ王宮文書庫跡で発見された大量の粘土板群は、その文字体や書法において、ほぼ同時代の南部メソポタミア都市遺跡ファラ〈古代名シュルツパク〉やアブ・サラビク〈古代名ケシュ?〉で採用されている原則とまったくかわらない。それだけではなく、南部メソポタミアで見出せるのと同じ「語彙リスト」や文学テキストも、エブラで大量に発見されている。

エブラでの粘土板文字使用の開始は、はるか早くにさかのぼるにちがいない。そしてそれが、南部メソポタミアから導入されたことも、うたがいをいれない。エブラ文書が発見されたさい、シカゴ大学のゲルプは、「キシュ文明」を想定して、エブラ文書とファラ、アブ・サラビク文書との連関を説明した。彼は粘土板記録システムの西方（および北方）への伝播は、キシュを介在したと考えたのである。彼のあとひとつの用語「キシュ伝説」Kish Tradition をまつまでもなく、ゲルプは、いわゆる「シュメール王朝表」がいうキシュ第一王朝、すなわち王権が天より最初にもたらされたというキシュの存在を重視したのであった。どんなにおそくともキシュに 3 千年紀初頭には強大な王権が成立していたことはうたがいがなく、この時期（メソポタミア編年という初期王朝期 I 期）にキシュ王権がシュメール文明の諸制度、とりわけ粘土板記録システムを西方、北方へ伝えたことは、おおいにありうることである。

さて、あらたに粘土板記録システムを採用した都市では、書記が養成されなければならない。このためにこそシュメール「語彙リスト」lexical list が必要だったのである。「語彙リスト」とは、基本的に同一カテゴリーに属するシュメール語彙をすくなくとも数十重並べた粘土板文書を指す。ウルク・エアンナ IVa 層時代、すなわちウルク期最末期のウルクにおいて最初に文字記録システムが創出されたのであるが、ほぼ同時に語彙リストも成立していたことはまちがいない。次のジェムデト・ナスル期（エアンナ III 層時代）には、記録システムは、すくなくともキシュを含む地域（のちのアカド地方）やディヤラ河流域地方にまで普及していた。そしてそれは、各地で書記生徒が語彙リストを手本としながら、文字習得教育をうけていたことを意味する。

数百枚の粘土板文書が発見されるような遺構をもつ都市では、かならず書記生たちのための語彙リストも南部メソポタミアから輸入されていたにちがいない。ジェムデト・ナスル期の行政文書が大量出土したジェムデト・ナスル（キシュ近郊）や初期王朝書記 III 期時代の文書群が発見されたテル・ベイダル（テル・ブラク西方）では、まだ語彙リストは一枚も発見されていないが、南部メソポタミアのそれと同一の語彙リストが大量に出土してよいのである。いっぽうテル・ベイダルとほぼ同時期のテル・ブラクでは語彙リスト（官職名リスト）断片が発見されている（メソポタミア南部編年という初期王朝期 III 期頃）。だから、テル・ブラクで大量の行政文書がちかいう将来に発見されても、当然なのである。

古代メソポタミアで行政記録システムが語彙リストとともに普及したという事実は、飛鳥時代、奈良時代のわが国における漢字習得の証拠と比べてみることができる。当時写字生たちは、近畿だけでなく、とおく東北でも、九州でも中国古典から抜粋された漢文章を、木簡（行政文書！）を作成するさいの手本として習得していたことは、いまやよく知られるようになった。

メソポタミア語彙リストのなかでもっともはやく成立し、しかも、もっとも大量に、もっともおおくの遺跡から出土しているのは、官職リスト（われわれはこれを E(arly) D(ynastic) Lu A とよんでいる）である。メソポタミアでは公的な行政組織の日常的な運営のために文字記録システムが生まれたのであるから、官職リスト ED Lu A がもっともよく普及したのは当然のことであろう。けれども同時に、ウルク起源の官職リスト ED Lu A とはべつに、他の官職リスト（ED Lu B、C、D、E）も発見されていることを忘れてはならない。ここで ED Lu A を第一次官職リスト、

ED Lu B、C、D、E を第二次官職リストとよぼう。現在のところ、第二次官職リストのうち最初の3リストは、初期王朝時代のものとしてはファラで発見されているだけである。いっぽう ED Lu E はアブ・サラビクおよびエブラから出土している。ED Lu D はウル第3王朝時代のニップルでも発見されているが、はるかに普及範囲が広いのは ED Lu E であり、アッカド時代のキシュ、ガスル（のちのヌジ）、さらにウル・ケシュ（テル・モザン）で断片が発見されている。

おそらく第二次官職リストの起源は、初期王朝期 III 期よりふるくはさかのぼらないであろう。そしてそれらは、南部ではなく中部あるいは北部バビロニア地方で成立したようにみえる。ED Lu B、C、D はファラで、E はキシュで生まれたのではなかろうか。

あとひとつ、興味あるリストが存在している。それは職名の前にそれぞれひとつの人名が書き添えられているリストであって (Names and Professions List)、初期王朝期のものとしてはアブ・サラビクとエブラで発見されている。

第一次官職リストと、第二次官職リストおよび「人名・官職リスト」とのちがいははっきりしている。なによりもまず、前者にみえる官職名のおおぐが後者では発見できないのである。また第一次リスト内の官職のなかには、すでに前3千年紀中葉には廃れてしまったとおもわれるものも含まれている。第一次官職リストの習得だけでは、複雑化しつつあった行政組織を文字表現するにはもはや不十分であった、だからあらたに第二次官職リストが成立したにちがいない。また人名が職名とともにあらわれるという点で「人名・官職リスト」は現実の行政文書の記録システムにたいへんにちかい。書かれている人名と職名の組み合わせが、現実の記録にみえるそれとそっくり同じというケースさえ発見できるのである。これは偶然とおもえない。現実の行政文書をモデルとしてこれが作成されているとしかおもえないのである。

第二次官職リストのなかでも ED Lu B、C、D と ED Lu E ではおおきなちがいがあがる。まず前者は、いずれもさほど長くない。現存のリストでは、それぞれ100行にはるかにたらないのにたいして、後者は220行を超える。また後者は、初期王朝期にはエブラまで、アッカド帝国時代にはるか北方にまで普及していた（ガスル、ウル・ケシュ）。だから ED Lu E はキシュで成立したのかもしれない。

第一次官職リストと第二次リストとのちがいは、限定詞 LU2 が第二次リストにかぎって頻出するという事実である。LU2 は本来「人」を意味するが、バビロニアやアッシリア人書記はこれを限定詞として官職名の前に付加する傾向がある。時代がさがるにつれて、この傾向はますます進む。いっぽうで、前3千年紀の南部メソポタミアの行政文書では、官職名が LU2 を含むケースはほとんど存在しない。もちろん第一次官職リスト ED Lu A では、そのようなケースは皆無である。これにたいして、ED Lu B では LU2 があらわれる比率は全語彙の 17% (11/63)、ED Lu C で 35% (24/76)、ED Lu D では 48% (13/27)、そして ED Lu E では 27% (61/224) にのぼる。これは、第二次官職リストが、シュメール語にあまり習熟していない書記、すなわちアッカド人書記によってはじめて書かれたことを意味しているのではないか。

ただし、この場合は、もっと複雑である。のちの時代にかかれたコピーのおかげで、この「官職・人名リスト」にはもともと「コロフォン」があり、これが「キシュの王たるザババ神」への「讃歌」として成立したことがわかる。だからこのリストはキシュで生まれた可能性がある。そのように想定すれば、これがアッカド帝国各地で発見される理由も、よく説明できる。(Lu Lu E や「官職・人名リスト」が他の第二次官職リストなどのようにファラなどで成立したのではないことは、前2テキストで「船」/ma/ を示すために MA2 サインが用いられるのにたいして、ED Lu C がファラ文書に特有な MAX (= SI) を採用していることから示唆される。) ただ「官職・人名リスト」での限定詞 LU2 の使用頻度は 11% 程度 (11/ca.133) であって、おなじくキシュ起源のようにみえる ED Lu E よりも頻度ははるかに低い。これは「官職・人名リスト」が現実の行政記録をもとにして生まれていて、いっぽう ED Lu E が書記の思考のなかで生まれたことに由来するのであろうか。

官職リストいがいにも、おそくとも初期王朝期 III 頃には、各種の「2次的」語彙リスト、すなわち前4千年紀末のウルクに起源をもたない語彙リスト（典型的には神名リスト）が、ファラなどで成立していた。また第1次リストであっても、のちにかなり内容的に拡大されたものもある（たとえば都市リスト）。この時期までに、われわれのいう「シュメール文字文明」が、メソポタミア南部、北部、シリア・ユーフラテス中流域、さらにイラン・スシアナ地域に確立していたのである。

計画研究「環境地質学、環境化学、¹⁴C年代測定にもとづく ユーフラテス河中流域の環境変遷史」

平成19年度の研究報告

星野光雄（名古屋大学大学院環境学研究科・教授）

1. 研究組織

研究代表者 星野光雄・名古屋大学大学院環境学研究科・教授
研究分担者 田中 剛・名古屋大学大学院環境学研究科・教授
中村俊夫・名古屋大学年代測定総合研究センター・教授
吉田英一・名古屋大学博物館・准教授
東田和弘・名古屋大学博物館・助教
連携研究者 齊藤 毅・名城大学理工学部・准教授
桂田祐介・名古屋大学学生相談総合センター・研究員

2. 研究目的

シリア東部、ユーフラテス河中流域ビシュリ山系における自然環境の変遷を、環境地質学、環境化学ならびに¹⁴C年代測定にもとづいて解明する。具体的には、(1) 地質・地形・土壌・植生を対象とした野外調査を行い、ビシュリ山系一帯の自然環境の実態を把握する。(2) 遺跡発掘調査に参加し、遺跡発掘トレンチの地質断面等から過去の自然環境を解読する。(3) 岩石・鉱物・土壌・堆積物・遺物試料を地質学的、化学的、¹⁴C年代学的方法で分析し、自然環境変遷に関する実証的データを取得する。の3方向から研究を推進する。これらの成果を総合的に検討して、地質時代から先史時代、「セム」系部族社会の形成を経て現在に至るビシュリ山系の自然環境変遷史を構築する。

3. 平成19年度の研究成果

① 現地調査

(1) 平成19年8月20日～9月11日 シリア・・・ビシュリ山系、ヨルダン・・・ジャフル盆地（星野）

昨年度末（平成19年3月）、当計画班として最初のビシュリ山系現地調査（星野・田中・中村）が実施され、その際に2箇所の共同発掘候補遺跡、テル・ガーネム・アリとテル・ハマディーンの立地環境およびその周辺の地形・地質・植生・水環境等の概要を把握した。平成19年8月に実施した当班2回目の現地調査では、考古学班によって発掘が進められているテル・ガーネム・アリを構成する堆積物の層序と試料採集に重点を置いた。発掘トレンチの断面で観察する限りでは、細かな角礫混じりの砂層とシルト層が卓越し、不規則な成層構造を示して連続性が不良である。まだ深く掘り進んでいないためでもあるが、テルの基盤を成すと考えられる河川堆積物は発見されなかった。テルの麓付近をハンマーで削って断面を作成した結果、砂層が観察された。しかし、これは基盤の河川堆積物ではなく、日干し煉瓦が風化したものであることが後で判明した。

9月からはヨルダンに移動し、藤井班が進めているジャフル盆地、ワディ・アブ・トレイハ遺跡の発掘調査に参加した。地質調査により、遺跡の基盤は古第三紀の堆積岩（チャート、フリント、石灰岩）と新第三紀の玄武岩から構成されていること、遺跡からは様々な種類の岩石片、鉱物片、顔料が出土することを確認した。藤井教授が世界最古の灌漑ダムと考えている遺構の石材のほとんどは、石灰岩であることがわかった。

(2) 平成19年11月4日～11月25日 シリア・・・ビシュリ山系（星野・中村・吉田・東田・齊藤・桂田）

代表者・分担者・連携研究者全員による当班3回目の現地調査を実施した。前半はテル・ガーネム・アリとテル・ハマディーン周辺の河岸段丘の調査および段丘堆積物の試料採集に専念した。地形図の判読と現地調査によって、以

下の重要な知見を得た。1) 河岸段丘は、数mの比高差からなる5段の段丘面(I~V)からなる。2) 2つの遺跡は段丘面V(最低位段丘)に立地する。3) 段丘面を構成する堆積物は主として砂層と礫層からなり、泥質な堆積物は少ない。4) 堆積物には斜交葉理・層理などの堆積構造や下層への削りこみが認められる。また、地層の側方への連続性が悪く、これらの特徴から河川成の堆積物と考えられる。5) 堆積物は炭酸塩鉱物によってかなり固結していることがあり、また、石膏の結晶が大量に析出していることもある。これらは乾燥地域の堆積物の特徴と考えられる。6) 最低位段丘を構成する堆積物中に炭化物層を発見した。ここから得られる年代は、遺跡の始まりを規定することになる。

調査の後半は、ビシュリ台地を構成する第三紀基盤岩類と第四紀玄武岩類の地質精査および試料採集に集中した。第三紀基盤岩類は主に石膏層から構成され、しばしば凝灰岩層を挟む。石膏は結晶質粗粒で、しばしば単層厚10~20cmで成層する。凝灰岩は一般によく成層し、層準によっては小型有孔虫や二枚貝の化石を多産する。これらの特徴を含めた地質層序を確立した。第四紀玄武岩類は、旧期のハラビア・ザラビア火山と、新期のメンハ・シャルキ火山およびメンハ・カルビ火山を構成している。ハラビア・ザラビア火山はパホエホエ型溶岩を主とし、溶岩台地を形成する。火山碎屑物をほとんど含まない。メンハ・シャルキ火山とメンハ・カルビ火山はそれぞれが単成火山であり、アア型溶岩、パホエホエ型溶岩、凝灰集塊岩、岩さい集塊岩からなる。これらの玄武岩類は河川堆積物を不整合で被覆し、また、段丘堆積物中に凝灰岩層が挟まれている観察事実から、第四紀における段丘形成作用と火山活動との前後関係の解明が重要な課題のひとつである。

ほかに、ビシュリ山地奥部の古第三系に発達するアスファルト鉱床、同じくビール・スパイの見事なフリント岩層を観察し、それらの成因について現地討論を行った。

(3) 平成20年3月21日~3月31日 シリア・・・ビシュリ山系(齊藤・東田)

当班4回目の現地調査の主目的は、テル・ガーネム・アリの基盤をなす河川堆積物の地層を見出すことと、河岸段丘堆積層の横方向の連続性を確認すること、および堆積物試料の採集であった。基盤の河川堆積物は、遺跡南東麓の工事現場でたまたま出現した地層断面で発見された。それは明確な河川性の礫層であり、標高はおよそ228mである。礫層直上の堆積物中には炭化物が含まれており、これらの堆積物・炭化物を採集した。炭化物の¹⁴C年代が求まれば、それは当遺跡における人間活動の始まりの年代を示すものと考えられる。

河岸段丘に関しては、堆積層の横方向の連続性を追跡する過程で、段丘の成因は堆積性であるとのこれまでのスキームに加えて、浸食段丘の可能性も浮上してきた。すなわち、堆積性段丘であるならば、レベルの異なる段丘の地質境界は、基本的には不連続となるべきである。ところが、今回の調査で、レベルの異なる段丘の地質境界が連続すると解釈できる観察結果が得られた。これは浸食段丘を示唆するものである。さらに、高位段丘面の一部を扇状地堆積物が覆っている可能性も指摘され、今後の調査に向けてのいくつかの課題が提起された。

② 室内実験

平成19年度は、新第三紀~第四紀におけるビシュリ山系の地質構造発達史と地形発達史の概要を把握することに重点を置き、現地調査で取得した地質学的データの評価と地質柱状図の作成、衛星画像による地質ユニット判読、岩石・鉱物・堆積物試料の記載、年代測定などを行った。地質学的データの評価は齊藤と東田が担当し、それぞれ新第三系および第四系の地質柱状図を作成した。衛星画像の解析は桂田が担当し、石膏層や玄武岩体などの特徴的な岩層の判読が十分可能であることを確認した。岩石・鉱物・堆積物の記載は星野と吉田が担当し、それぞれの岩層、地層の特徴を抽出した。年代測定は中村と田中が担当した。テル・ハマディーンの堆積物中に産出する炭化物の¹⁴C年代がおよそ4.0 Ka B.P.、新期玄武岩溶岩のK-Ar年代が1.38 ± 0.08 Ma B.P.、旧期玄武岩溶岩のK-Ar年代が2.60 ± 0.08 Ma B.P.および2.72 ± 0.09 Ma B.P.と、大変興味深い年代値が得られた。上記以外にも、化学分析、花粉分析などの室内実験が並行して進められているが、具体的なデータにもとづいて議論する段階には至っていない。

③ 会議・シンポジウム等

4回の領域研究代表者会議(研究発表会を兼ねる)と1回の公開シンポジウムに出席し、調査打ち合わせ、研究発表、研究討論を行った。また、5回の班会議を開催し、調査打ち合わせ、調査結果の報告、研究討論を行った。

4. 「セム系部族社会の形成」研究にどう寄与するか

ビシュリ山系を含むアラビア半島北部の自然環境は、地質時代以来、地殻変動や地球規模での気候変動など様々な要因に支配されて変化を繰り返してきた。とくに、完新世中期以降の乾燥化傾向は、人間社会に少なからぬ影響を与えたことは疑いない。本研究は、ビシュリ山系における環境変遷史の構築と併せて、自然と人間との関わりを通時的に明らかにすることで、「セム系部族社会の形成」研究に大きく寄与できる。

5. 平成19年度の研究成果公表状況（本研究課題に関係するもののみ）

【著書・論文等】

星野光雄・田中 剛・中村俊夫, 2007, 「2007年3月ビシュリ山系現地調査」. 『セム系部族社会の形成』 Newsletter, No. 6, 24-28.

桂田祐介, 2007, 「ビシュリ山地北部およびユーフラテス河中流域周辺の地質環境：ASTER画像による地質判読と2007年度現地調査の速報」. 『セム系部族社会の形成』 Newsletter, No. 8, 1-4.

中村俊夫, 2007, 「西アジア先史遊牧民遺跡から発掘された考古資料の放射性炭素年代測定」. 『金沢大学ヨルダン調査団2006年度研究発表資料集』, 399-410.

星野光雄, 2007, 「ワディ・アブ・トレイハ遺跡およびカア・アブ・トレイハ西遺跡産堆積物の地質学的特徴」. 『金沢大学ヨルダン調査団2006年度研究発表資料集』, 411-424.

Hoshino, M., Tanaka, T., Nakamura, T., Yoshida, H., Saito, T., Tsukada, K. and Katsurada, Y., 2008, Geological and geographical field survey in the fourth working season. *AL-RĀFIDĀN*, 29, 171-176.

Nakamura, T. and Minami, M., 2008, Radiocarbon dating of charcoal remains excavated from TB75. *Tang-i Bolaghi: The Iran-Japan Archaeological Project for the Sivand Dam Salvage Area*. (in press)

Katsurada, Y., Hoshino, M., Yamamoto, K., Yoshida, H. and Sugitani, K., 2007, Gully head retreat of Awach-Kano gullies, Nyanza Province, Kenya: Field measurement and pixel-based upslope catchment assessment. *African Study Monographs*, 28(3), 125-141.

Aoki, Y., Hoshino, M. and Matsubara, T., 2007, Silica and testate amoebae in a soil under pine-oak forest. *Geoderma*, 142, 29-35.

【学会発表等】

星野光雄, 2007. 5, 「シリア・ビシュリ山系現地調査」. 『名古屋地学会第58回総会』, 名古屋大学情報科学研究科.

桂田祐介, 2007. 9, 「ASTER画像を用いて判読するシリア東部ビシュリ山地北部の遺跡とその周辺の地質環境」. 『日本地質学会第114年学術大会』, 北海道大学.

星野光雄・東田和弘・齊藤 毅・中村俊夫, 2007. 12, 「ビシュリ山系調査研究の自然史的意義」. 『「セム系部族社会の形成」第3回研究発表会』, 東京大学総合研究博物館.

齊藤 毅, 2008. 2, 「ガーネム・アリ周辺に発達する河岸段丘と微地形」. 『「セム系部族社会の形成」第4回公開シンポジウム』, 東京サンシャインシティ.

計画研究「西アジア先史時代から都市文明社会への生業基盤の 変化に関する動物・植物考古学的研究」

平成 19 年度の研究報告

本郷一美（総合研究大学院大学先導科学研究科・准教授）

研究代表者：本郷一美（総合研究大学院大学）

研究分担者：丹野研一（総合地球環境学研究所）

那須浩郎（総合研究大学院大学）

茂原信生（奈良文化財研究所・国立科学博物館）

研究協力者：赤司千恵（早稲田大学大学院）

姉崎智子（群馬県立自然史博物館）

Lubna Omar（京都大学大学院）

<研究の目的>

本研究班は動物考古学と考古民族植物学の手法を用い、西アジアの先史時代社会から古代都市文明社会への移行過程における生業基盤の変化を明らかにすることを目的に、研究を進めている。都市の生業基盤確立の背景には食料生産技術の発達、すなわち生産の集約化と分業化があったと考えられることから、以下の点に注目し、研究を進めている。

*セム系部族社会の成立の前提として利用可能な動・植物資源にはどのようなものがあったか。新石器時代における偶蹄類の家畜化と植物の栽培化の過程を探る。

*各時代に動・植物資源の利用にどのような変化が生じたか。牧畜技術の発達、特に乳製品利用技術の発達と遊牧の開始の時期など。

*都市の出現の背景（古代都市国家の成立基盤）。都市の人口を支えるための生産性の高い作物品種は、いつ成立したか。都市経済の中での動植物生産品の取引の重要性など。

<研究の方法>

動物遺存体

遺跡から出土した動物骨資料（図2）の種同定、サイズの計測、死亡年齢の推定を行う。

考古民族植物学

遺跡からサンプリングした土からフローテーション法（図3）を用いて炭化種子を選別、種同定を行うとともに、一部の遺跡では花粉分析を併用する。

<2007年度の調査の結果>

2007年度は以下の遺跡において資料を収集した（図1）

トルコ

サラット・ジャーミ・ヤヌ（土器新石器時代）

チャヨヌ（PPNA～土器新石器時代）

シリア

デデリエ（ナトゥーフ期）

セクル・アル・アヘイマル（PPNB, 土器新石器時代）

テル・エル・ケルク（PPNB, 土器新石器時代）

図1 2007年度に資料収集を行った遺跡（下線）

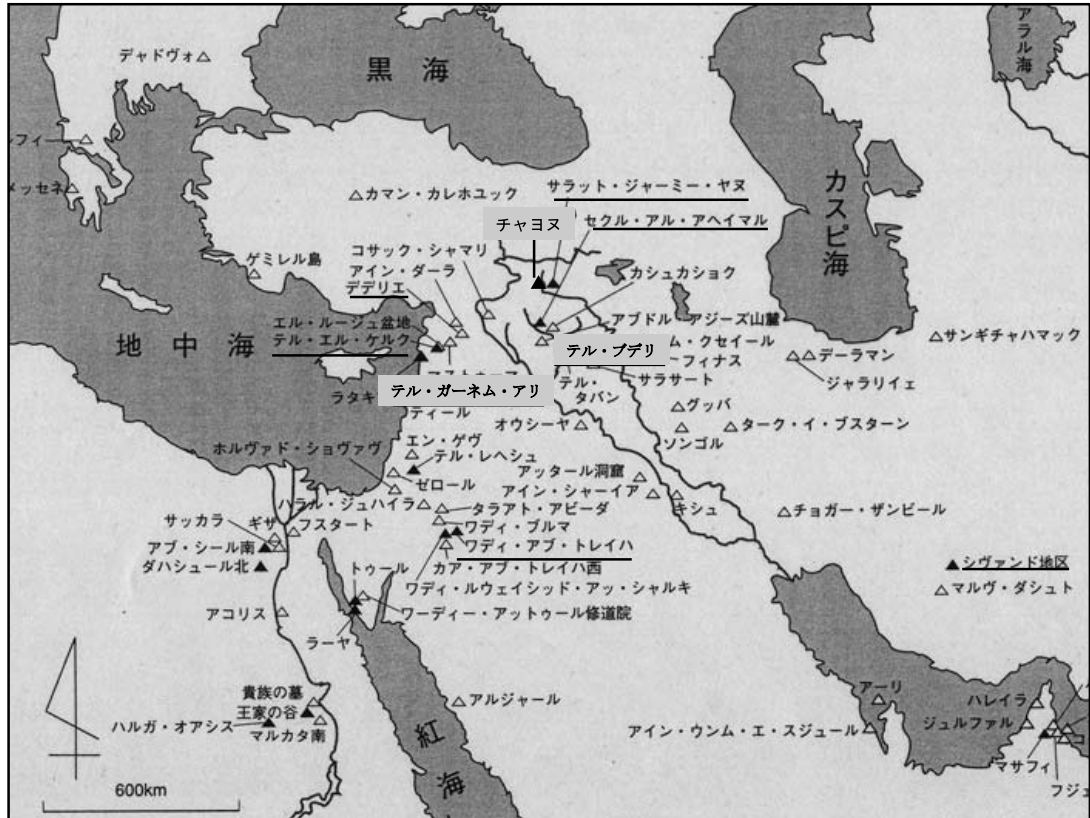


図2 動物骨資料のサンプリング

テル・ガーネム・アル・アリ（前期青銅器時代）

テル・ブデリ（前期青銅器時代）

ヨルダン

ワディ・アブ・トレイハ（PPNB）

イラン

タンギ・ボラギ（終末期旧石器時代、前新石器時代）



図3 採集土からのフローテーション

ヨルダン南部のワディ・アブ・トレイハ（Wadi Abu Tulayha）遺跡においては、本郷、オマル、那須が動物遺存体と植物遺存体の分析を行った。PPNB 後期に移牧が行われるようになった可能性が示唆された。この遺跡から出土する動物骨の大部分は中型（家畜ヒツジ・ヤギ程度のサイズ）または小型（キツネ、野ウサギ程度のサイズ）の哺乳

図4 ワディ・アブ・トレイハ出土炭化種子の同定結果（那須による）

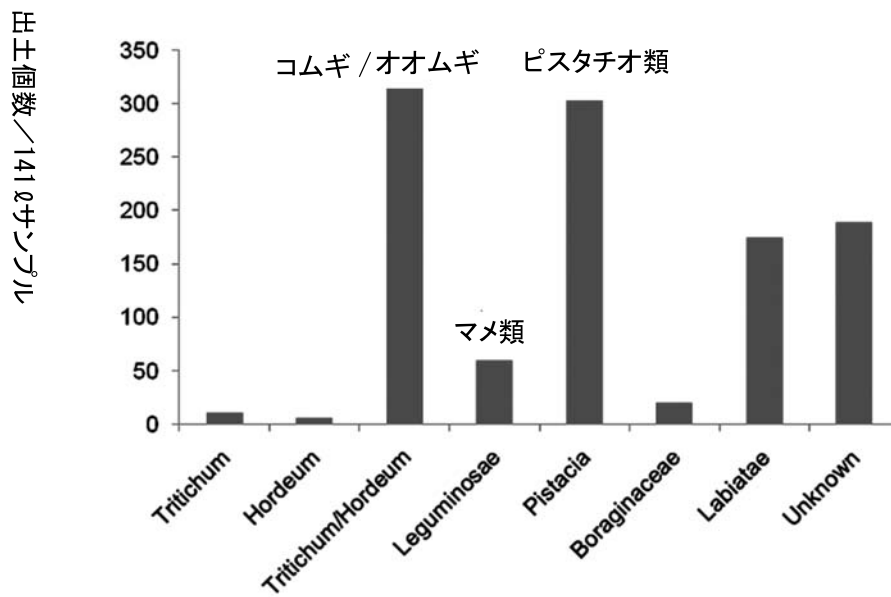
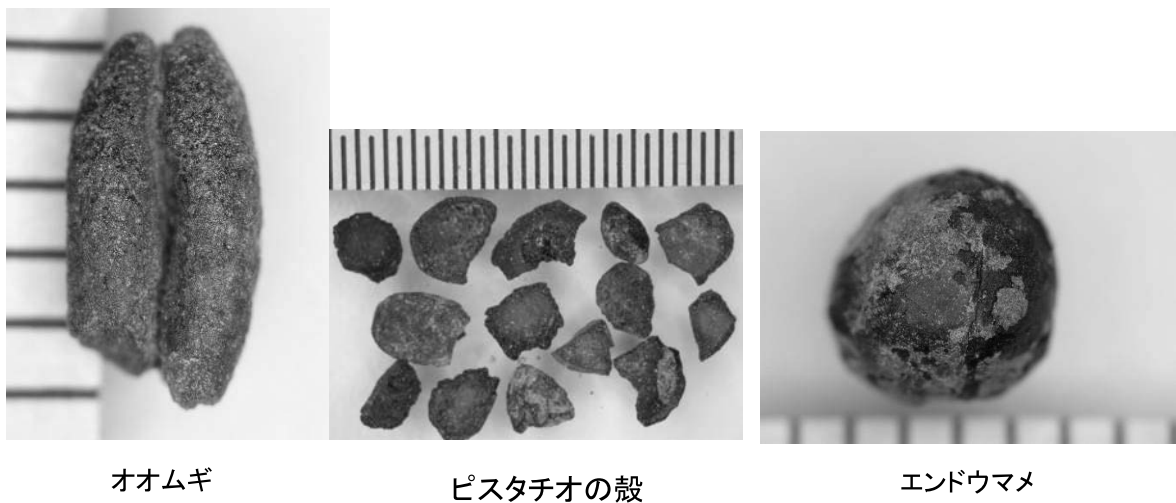


図5 ワディ・アブ・トレイハ出土炭化種子



類で、大型哺乳類（ウシ程度のサイズ）の骨はまれである。大部分を野生動物が占め、なかでもガゼルと野ウサギの骨が多く、この2種で同定された破片数の約70%を占める。このほか多種多様な小動物（ネズミなどの齧歯類、モグラなどの食虫類、カメ・トカゲなどは虫類、カエル）と鳥類（ヒバリ、ハト、ウズラなどの仲間の草原性の種）が利用されている。出土した動物種の構成からは、現在よりは植生が豊かであったものの、乾燥した草原地帯が遺跡周辺に広がっていたことが推定できる。この遺跡は季節的なガゼルの狩猟拠点であったと考えられる。一方、ごくわずかだが家畜と思われるヒツジおよびヤギの骨が出土しており、本村からやってきた人々は動物性食料の大部分をガゼル等の狩猟で得ていたものの、家畜を伴ってこの遺跡に滞在していたことが明らかになった。植物遺存体は、コムギ類やオオムギの種子が多く、エンドウマメなどのマメ類も出土している（図4、5）。おそらくこれらの植物を本村から携えて狩猟拠点を利用したと思われる。それに加えて、野生のピスタチオ類の殻が大量に出土しており（図4、5）、

表 1：テル・ガーネム・アル・アリ遺跡で同定された植物（丹野・赤司による）

遺跡名	ガーネム・アリ
時代	青銅器時代初期(EB)
土サンプル数	10
採取土量(L)	55 (5サンプル分)
主な植物	オオムギ ブドウ ツルナ科Aizoon属 アカザ科Suaeda属 マメ科ゲンゲ属近縁種

遺跡周辺の野生植物も食料として利用していたことが明らかになった。牧畜の発達過程モデルとして、定住集落における偶蹄類の日帰り放牧→家族の一部または全部が家畜とともに別の場所に季節的に移り住む移牧→長期にわたる移動を伴う遊牧、という変化がられ、ワディ・アブ・トレイハ遺跡が季節的な移牧の拠点としても機能していたとすると、定住農耕牧畜民の乾燥地域への進出の過程を明らかにする手がかりとなる。

ビシュリ山系のテル・ガーネム・アル・アリ遺跡周辺では、丹野・赤司による植生調査を実施した。遺跡西方の村の周辺は、ヘリオトロブやタマリスクが見られ、水がたまりやすい地形・地質であることがわかった。村から20-35km離れた地点では、アカザ科、マメ科、キク科などの乾燥に強い灌木類が多く見られるようになる。村から40kmの地点はさらに乾燥しており、イネ科の草本類やアカザ科の灌木が主な植生だった。

テル・ガーネム・アル・アリ遺跡から採取した青銅器時代初期の土壌からは、オオムギ、ブドウの他、ツルナ科、アカザ科、マメ科の種子が検出された（表1）。

< 2008 年度の調査計画 >

2008 年度は、トルコ南東部、シリア北部、ヨルダンの新石器時代遺跡での資料収集を継続するほか、テル・ガーネム・アル・アリ遺跡の発掘により出土する動・植物遺存体の同定・分析に重点をおく。動物遺存体に関しては、同時期のテル・ブデリ遺跡およびテル・モザン遺跡の分析結果と比較検討する計画である。

計画研究「オアシス都市パルミラにおける ビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」

平成 19 年度の研究報告

宮下佐江子（古代オリエント博物館研究部・学芸課長）

I 平成 19 年度研究計画とその成果の概要

1. 研究組織

研究代表者：宮下佐江子（古代オリエント博物館研究部・学芸課長）

研究分担者：津村眞輝子（古代オリエント博物館研究部・研究係長）

西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所文化財部・部長）

勝木言一郎（東京文化財研究所企画情報部情報システム研究室・室長）

2. 研究の目的と概要

本研究班は、セム系部族社会形成以後に成立したオアシス都市パルミラにおいて、セム系部族文化がどのようにその社会のなかに影響を残しているか、パルミラの建築意匠や、墓の出土遺物、周辺遺跡の同時代遺構の出土遺物から明らかにし、当地に紀元後 1 - 3 世紀に展開した文化の諸相を探ることを目的とする。

パルミラは紀元前 1800 年頃のマリ文書に、その古代名「タドモール」として登場しているように、古くから、ビシュリ山系西端の地において、セム系社会を形成してきた。

ところが、これまでのパルミラ研究はマケドニアのアレクサンダー大王の西アジア侵攻以後に移住してきた多数のギリシア人により「パルミラ なつめやしのまち」と呼称された砂漠のオアシス都市の繁栄と地中海世界との関連について言及されてきた。

本研究ではその都市形成の初期の段階から周辺遊牧民との交渉、流入が認められることを解明し、パルミラの社会構造や墓の被葬者集団の差異、都市形成、興隆期に際して、ビシュリ山系の遊牧的文化がいかに関与され、あるいは変容したかを分析する。

3. 平成 19 年度の研究経過

平成 19 年度の研究は上記の研究目的達成のために、下記のように研究を実施した。

- 1 パルミラ遺跡に特徴的なテッセラと呼ばれる粘土製札の再検討をおこなった。
- 2 パルミラ周辺の同時代遺構の出土遺物、特にコインの分析を通して、当時の社会状況の把握をおこなった。
- 3 パルミラの葬制における被葬者集団の社会階層の分析をおこなった。
- 4 パルミラの死後の世界観と浄土信仰との比較研究をおこなった。

4. 平成 20 年度の計画

① 資料収集

平成 19 年度に引き続き、パルミラ、および周辺遺跡に関わる文献収集とデータの蓄積を継続する。

② 現地調査

パルミラ遺跡の塔型墓の調査に参加し、パルミラの社会構成の考察をおこなう。

③ 他研究班との連携

平成 18 年度からおこなわれているシリア・ビシュリ山系調査に参加し、出土遺物の精査をおこなう。

④ 会議・集会

本領域研究の全体会議にそって、研究打ち合わせ会議、および研究会を実施する。また、本領域研究が開催する公開シンポジウム等で、成果報告、意見交換をおこなう。

5. 研究成果の公表状況

① 主な論文等

宮下佐江子 2007「古代オリエント博物館収蔵テッセラについて」『第14回ヘレニズム～イスラーム考古学・研究』ヘレニズム～イスラーム研究会、1-6頁。

宮下佐江子 2008「パルミラの女性彫刻の向き合う動物意匠の装身具について」『古代オリエント博物館紀要』第27巻、11-20頁。

津村眞輝子 2007「シリア、ミシオルフェ出土のローマコインーミシオルフェ出土一括コインから」『第14回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』ヘレニズム～イスラーム研究会、6-10頁。

津村眞輝子 2008「シリア、ミシオルフェ出土のローマ銀貨」『古代オリエント博物館紀要』第27巻、21-30頁。

西藤清秀 2007「パルミラ地下墓の遺体の伴われた羊骨ー特に中手骨に関して」『ラーフィダーン』38巻 83-94頁。

西藤清秀 2008a「パルミラの有力者の墓を掘るーシリア・パルミラ遺跡北墓地129-b号墓、2007の調査」第15回西アジア発掘遺跡報告集、90-96頁。

西藤清秀 2008b「シリア・パルミラの地下墓に見る経済差」『王権と武器と信仰』546-558頁。

② 学会発表等

宮下佐江子 2007年11月10日「古代オリエント博物館収蔵テッセラについて」第14回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会於金沢大学にて研究発表。

宮下佐江子 2008年2月16日「パルミラ出土のテッセラについて」公開シンポジウム「西アジア部族社会とビシュリ山系」於池袋サンシャインシティ・サンシャイン集会室にて研究発表。

津村眞輝子 2007年11月10日「シリア、ミシオルフェ出土のローマコインーミシオルフェ出土一括コインから」第14回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会 金沢大学にて研究発表。

西藤清秀 2008年3月15日「パルミラの有力者の墓を掘るーシリア・パルミラ遺跡北墓地129-b号墓、2007の調査」第15回西アジア発掘遺跡報告会 池袋サンシャインシティ・サンシャイン集会室にて研究発表。

公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」

平成 19 年度の研究報告

高濱 秀（金沢大学文学部・教授）

初期騎馬遊牧民の考古学から見た部族

1. 列をなす古墳群

初期騎馬遊牧民は、クルガン、すなわち古墳を営造した。大型古墳の営造は初期遊牧民文化の一つの特色と考えることができ、黒海沿岸からシベリアまで、この時期の大型古墳が各地に造られている（林 1992）。古墳はしばしば群をなしているが、その古墳群の中には、墓が列を成すものが時折見られる。

目に付いた幾つかの例を挙げておくと、黒海沿岸ではケレルメス古墳群がある（図 1）。これはいうまでもなく、北カフカス、クバン地方に所在するスキタイ文化の最も初期の代表的な古墳群の一つである。L. K. ガラニナの報告によると、30 基ほどの古墳が北西から南東の方向にかけて、列をなして並んでいる（Галанина 1997, Рис.2）。

筆者の実見した新疆ウイグル自治区の新疆県の例でも、古墳がかなり長い列を成して並ぶ例が見られた。

山地アルタイのパジリク古墳群においても、少し離れたところにある 5 号墳を除き、他の古墳は列を成すように築造されている（Руденко 1953, Рис.2）。同じくパジリク文化に属するウランドリク I 古墳群は、パジリク古墳群よりも小型の古墳によって構成されているが、ここでは、400 m 足らずの間に、15 基の古墳が北東から南西方向にかけてほぼ列を成して並んでいる（図 2）（Кубарев 1987, Табл.2）。山地アルタイには、他にも列をなす古墳群が時折見られる（Молодин и др. 2004, Рис.20, 115, 150, 170 и др.）。

初期騎馬遊牧民文化の古墳はすべて列を成すというわけではない。しかし上に挙げたような古墳群は例外的なものではない。古墳の配置は、ある程度その遺跡の地形によって規定されるであろうが、列をなす古墳群のすべて

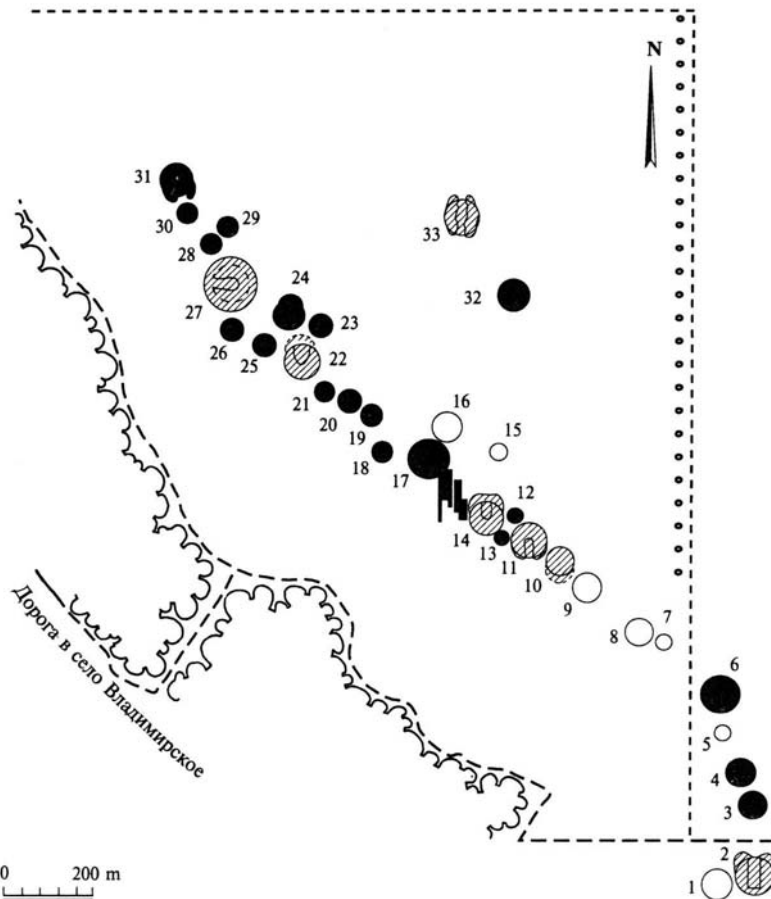


図 1 ケレルメス古墳群

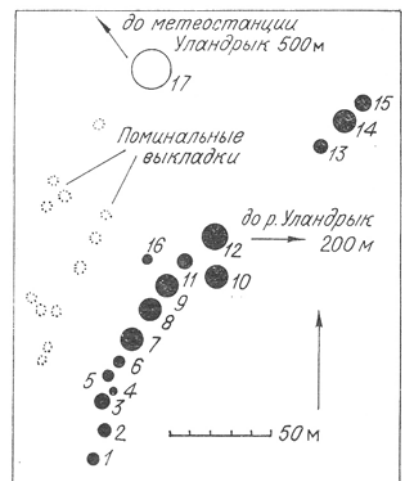


図 2 ウランドリク I 古墳群

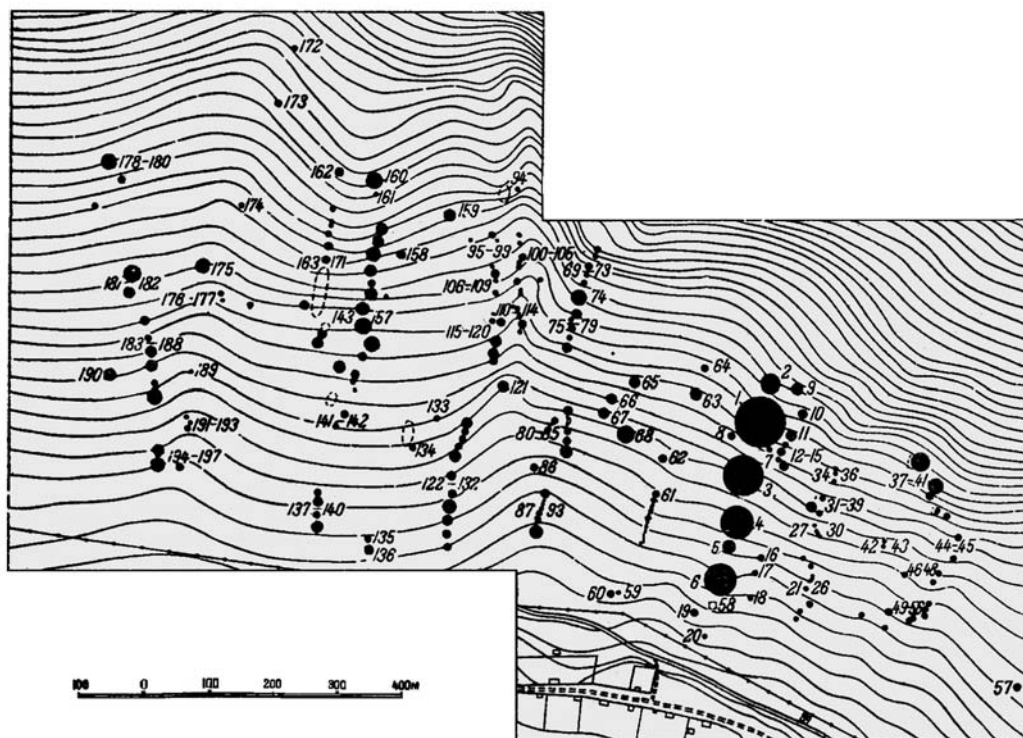


図3 トウエクタ古墳群

が、地形だけの制約によるものと思えない。並べようとするなんらかの意志が働いた例があると考えられるべきであろう。

これら一列になった古墳群は、単にある一つの場所に散在する古墳群よりも、それぞれ互いに何らかの親しい関係にあった人々を葬ったという可能性が、高いといえるであろう。まったく互いに関係のない人々が列をなすように墓を築造することは考えにくいからである。家族あるいは家系、ひいては部族を考えるための手掛かりになりうると思われる。

これらの例の中で特に興味深いのは、アルタイのトウエクタ古墳群の例である。この古墳群は 197 基の古墳からなり、ウルスル川左岸の緩斜面で 110ha に及ぶ広い地域に広がっている (図3) (Руденко 1960, Рис.52)。ここでは多くの古墳が幾つもの南北の列をなして並んでいる。

この古墳群のうち科学的に発掘されたのは、わずかに過ぎず、すべてが初期遊牧民文化の時期に属するかどうかも確実ではない。しかし一応の作業仮説として、南北に並ぶ古墳列の各々が、何らかの緊密な親縁関係にある人々の単位、例えば家族や家系のようなまとまりを示すと仮定することが許されるならば、この古墳群は、幾つもの家族あるいは家系に属する人々がまとまって葬られた墓地ということになるであろう。

なかでも注目されるのが、中央より少し東側に位置する 1～6 号墳の列である。それらの多くは中央アルタイでは最大級の古墳である。比較的小型である 5 号墳を別にする、1 号墳は直径 68m、高さ 4.1m、2 号墳は直径 32m、高さ 2.6m、3 号墳は直径 62m、高さ 5.4m、4 号墳は直径 48m、高さ 3.7m、6 号墳は直径 52m、高さ 4.1m である。トウエクタ古墳群では、この 5 基を除く古墳の大多数は直径が 20m 以下であり、10m 以下のものが多い。20m 以上のものはおそらく 10 基をそれほど越えることはなく、直径約 30m の 68 号墳が最大である。この大古墳の列は、まさしく部族において特別な地位を持つ一家族の存在のようなものを想起させる。

2. モンゴル、オラーン・オーシグ I 遺跡について

我々が調査を行っているオラーン・オーシグ I 遺跡は、モンゴル中西部の北の方、フブスグル・アイマクに所在する。アイマクの中心ムルンから西へ車で 20 分ほどの場所にオラーン・オーシグ (赤い肺) と呼ばれる小さな山があるが、その山の東・南・西方の 10 箇所ほどに、一種の積石塚であるヘレクスル群が分布している (図4)。オラーン・オーシグ I 遺跡は、山の東南に位置しており、そこではヘレクスル群と鹿石群がともに見出される (図5)。全体として、初期騎馬遊牧民文化に先立つ後期青銅器時代の遺跡と考えられる。ヘレクスルは遺跡のほぼ北のほうに 15 基ほどあ

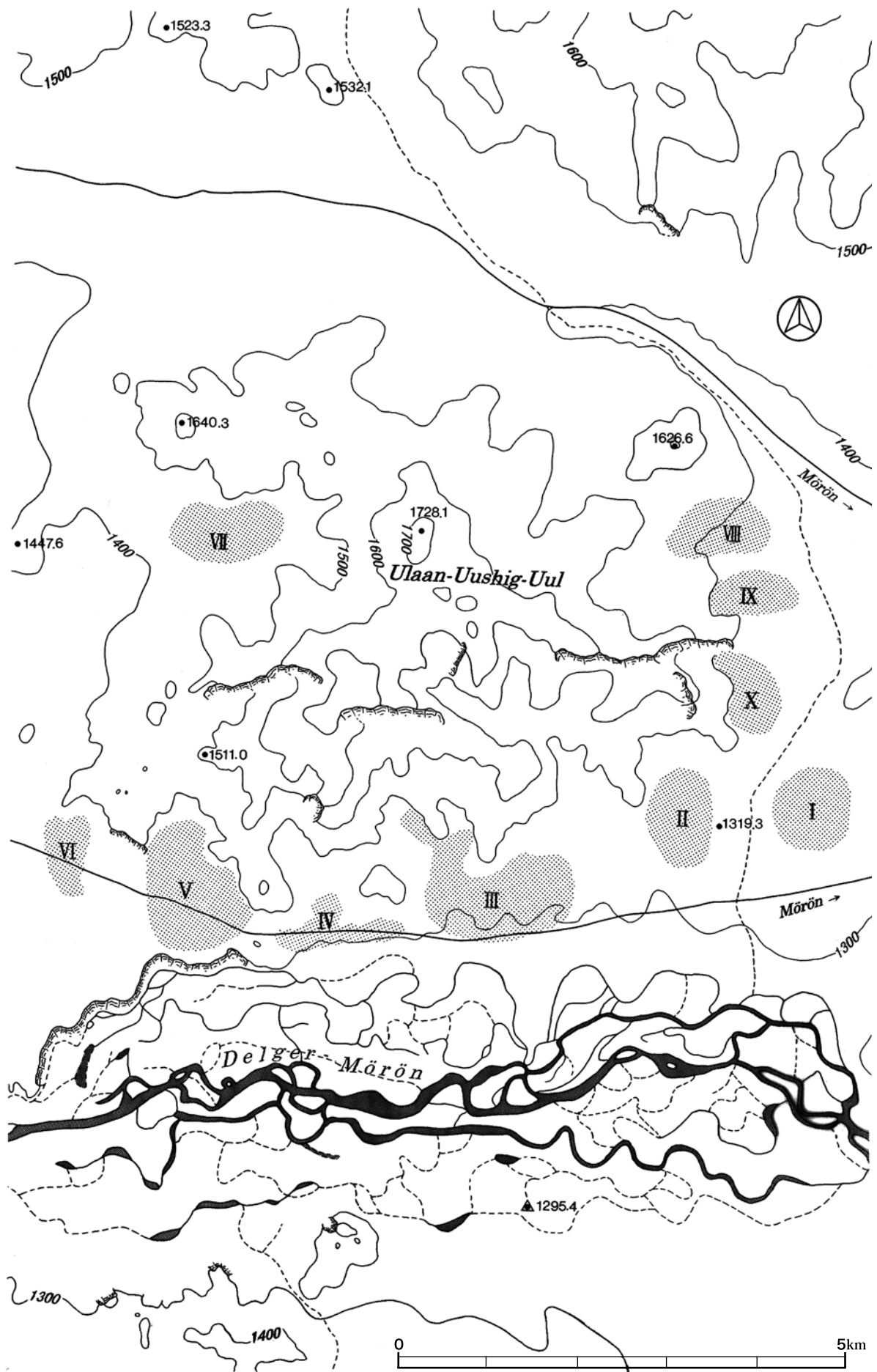


図4 オラーン・オーシグを回る遺跡

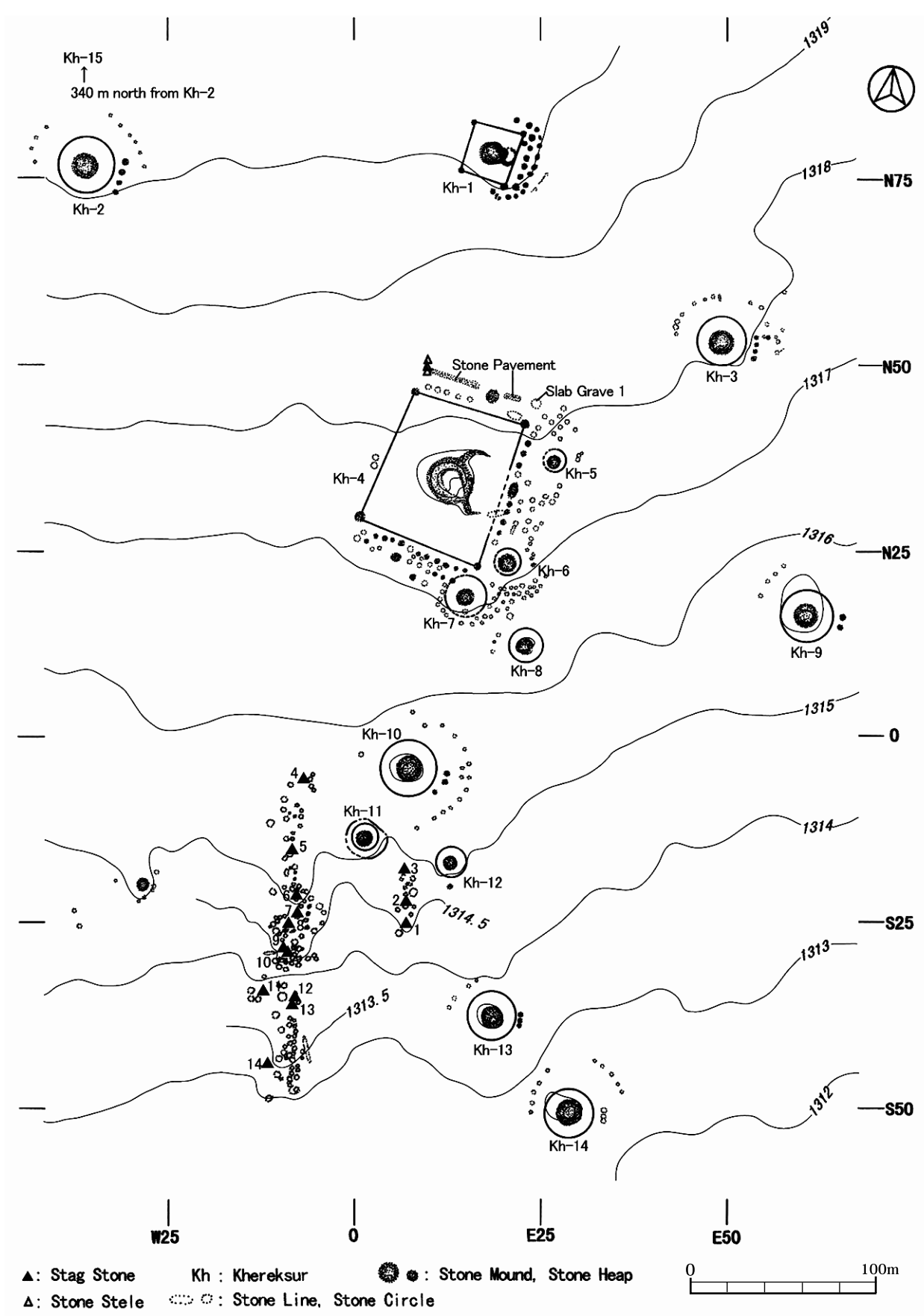


図5 オラーン・オーシグI

り、鹿石は南のほうで、12基と3基の2列に分かれて立っていた。
 一般的にモンゴルのヘレクスルは、中央の積石塚のまわりを方形、あるいは円形に石列が囲み、その外側には主として東側に石を積み上げた石堆がいくつも置かれる。さらにその外側を、数個の石を円形に配置したものが、数多く

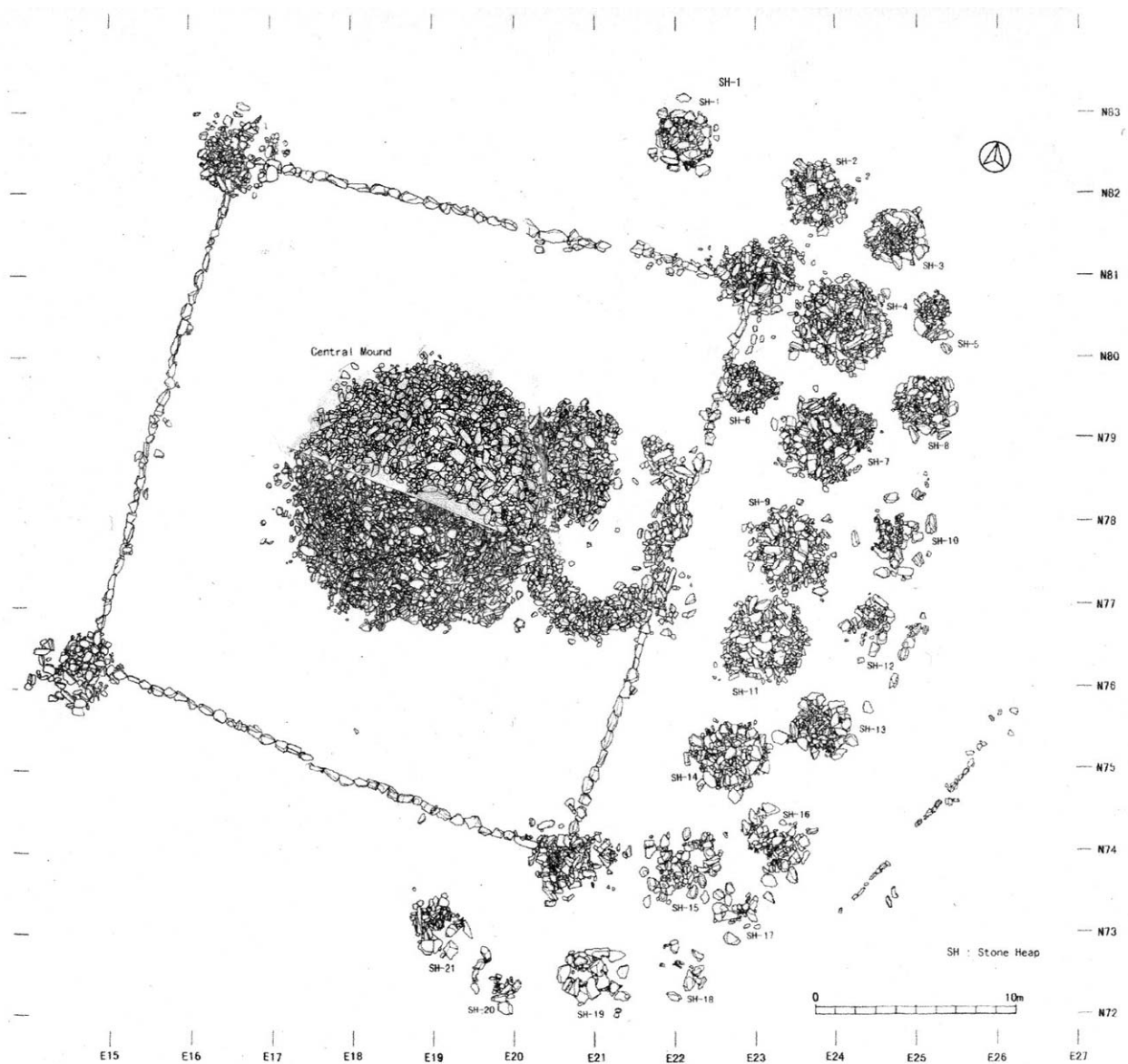


図6 1号ヘレクスル



図7 1号ヘレクスル 10号石堆出土の馬骨

同心円状に取り巻く場合もある。積石塚から周りの石列へブリッジのようなものが渡される場合もあるし、また積石塚から触角のような石列が、多くの場合は東の方角へ出ていることもある。

ここで我々の調査した1号ヘレクスルは、中央の積石塚の直径が12～13mで、方形の石列に囲まれている(図6)。積石塚の東側には触角状の突起が伸びて石列に達している。石列の主に東側に、21基の石堆がある。積石塚の中央には、発掘により石棺が見出された。しかしそのなかには、遺体も副葬品も見出されなかった。次に我々の発掘したのは12号ヘレクスルである。これはこの遺跡で最も小さなヘレクスルであるが、積石塚の

直径が9mで、円形の石列に囲まれている。ここでは積石塚の中央に石棺が検出され、なかから幼児の骨が発見された。これらの発掘により、ヘレクスルは墓であることが明らかになったといってよい。1号ヘレクスルは墓ではあるが、遺体を納めることのなかった象徴的な墓か、あるいは痕跡が残らないまでに小動物などによって荒らされたと解

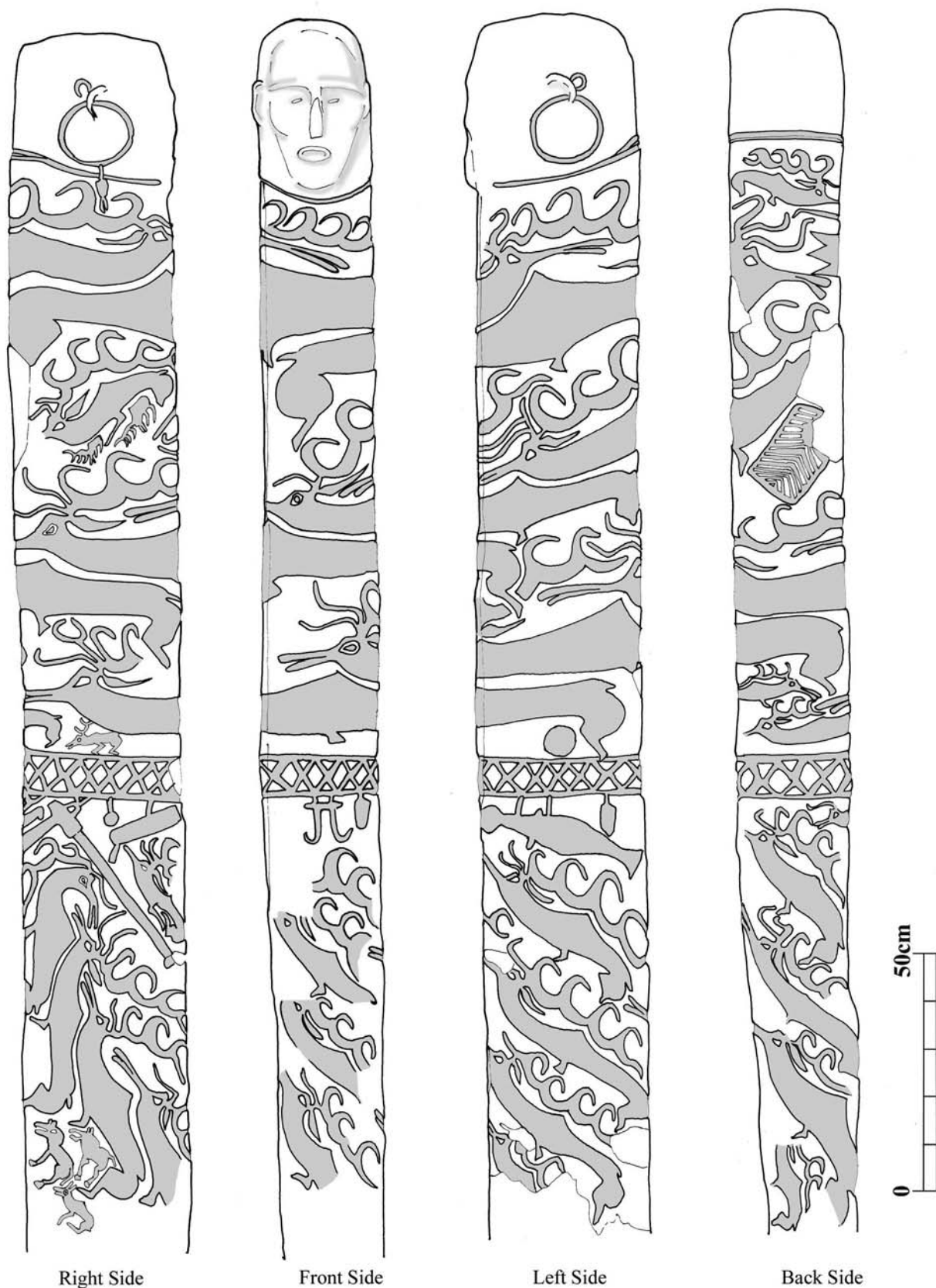


図8 14号鹿石

積することができる。いずれにせよ、ヘレクスルが元来、墓として作られたものであることは、疑えないであろう。

そうすると、このオラーン・オーシグIは、ヘレクスル群からなる墓地であったと考えられる。この場合は、前述の列をなす古墳群ほど、互いの関係が緊密には見えないが、なんらかの親しい関係にある人々を葬った場所と考えることも可能であろう。ただ、オラーン・オーシグIでも、山の斜面にかかるところには、一般的なヘレクスルとは

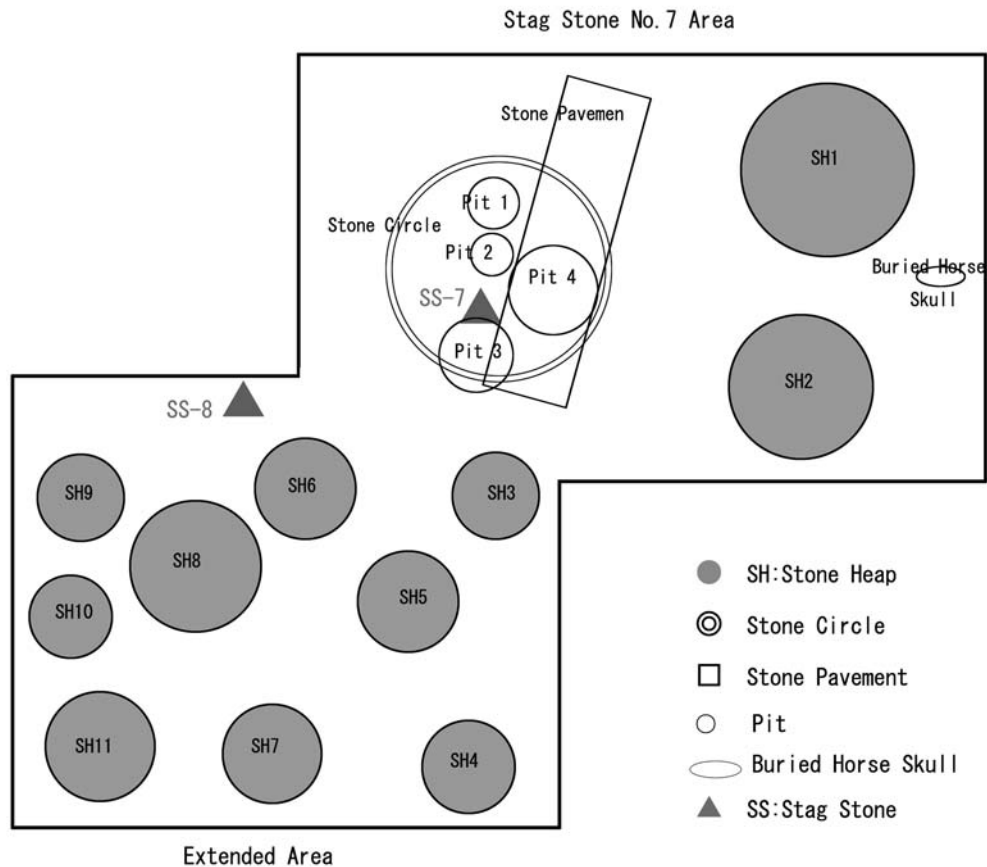


図9 7号鹿石付近概念図



図10 7号鹿石南西拡張区

異なった型式の小型の遺構が数基あり、それらは同時期のものかどうか分からない。またオラーン・オーシグ I には板石墓も 1 基あって、調査されているが、それは時期を異にするものであろう。

オラーン・オーシグ I がもし親縁関係にあった人々の墓地と仮定すると、オラーン・オーシグを取り巻く他のヘレクスル群との関係がどのようなものであったのかが、気になるところである。それらの間には何らかの共通性があったのであろうか。

我々が 1 号ヘレクスルの石堆を発掘したところ、それぞれの下に馬の頭骨・頸骨・蹄が見出された (図 7)。頭骨は鼻面を東に向け、頸骨は頭骨と平行に、北側か南側に置かれ、時には蹄も伴っていた。断面の観察による

と、これらは原地表面の上に置かれるか、あるいは小さな穴を掘って納められたもので、その上に土を掛けてから比較的小型の石を広く敷き、その上に大型の石を円形に配置して、なかにまた幾分小型の石を入れるようにして盛り上げ、石堆を造ったのである。

遺跡の南側には鹿石が列をなして立っている。元来、1 号鹿石～ 3 号鹿石と 4 号鹿石～ 15 号鹿石の 2 列があったが、現在その 1 個 (15 号鹿石) は割れて一部を失い、ムルンの博物館に収蔵されている。鹿石とは高さ 1～3 m くらいの角柱形の石で、鹿の図像が刻まれているところからその名がある (図 8)。元来武器を腰に下げた戦士を表わ

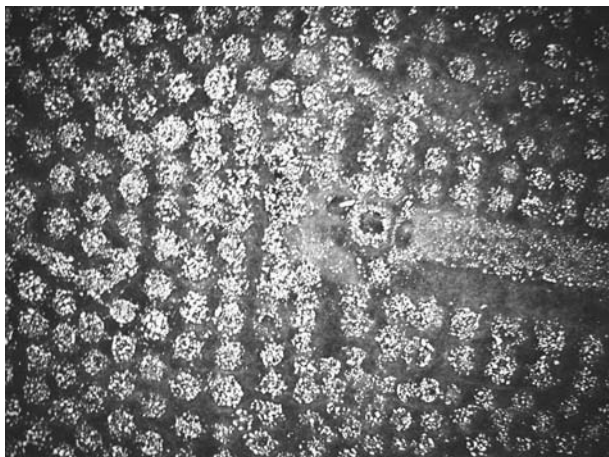


図 11 ジャルガラント遺跡の大石堆群

したものと考えられており、刻まれた武器の表現などから年代も考察されている。

4号鹿石の周りにストーンサークルが見出されたので発掘したところ、ヘレクスルに付属する石堆と同様に、下から馬の頭骨、頸骨、蹄が発見された。馬の鼻面が東を向くことも一致している。またストーンサークルの構造は、内側に小さな石が敷かれるなどヘレクスルの石堆とよく似ている。これにより、ヘレクスルと鹿石はほぼ同じ時期に、同じ人々の作ったものだと考えられる。

7号鹿石の周りでは、発掘の結果、数多くの石堆が密集して発見された。東側の2基は、地上の状態からある程度予測されていたが、南西側において、南北8m×東西9mの区域を発掘したところ、ほとんど一面に石

で覆われた状態が見出された。そこで原位置にないと考えられる石を外すと、9基の石堆が現れたのである(図9、10)。これは7号鹿石の周りのまだ一部に過ぎない。この付近にはさらに多数の石堆があることが推測される。東側の2基と南西側の2基の石堆を発掘したところ、先に述べたヘレクスルの石堆と同様の構造であり、同じように馬の骨が発見された。鹿石はヘレクスルと同じ儀礼をもって祭りをを行うための施設であったと考えられる。

同じモンゴル中西部のハヌイ川の沿岸に近いジャルガラント遺跡では、地上に夥しい数の石堆が密集して構築されており、なかには鹿石も数本発見されている(図11)。また大石堆群から少し離れたところには、鹿石を幾つも再利用して作られた墓がある。まだ元来の形は明らかになっていないとはいえ、ここでも、石堆群と鹿石が何らかの形で結びついていた可能性がある。また近くに大型のヘレクスルも1基ある。オラーン・オーシグIで発見された石堆群は、ジャルガラントよりはずっと小規模なものではあるが、元来は似た性格を持っており、鹿石列を囲むようにして多数構築されていたと思われる。

オラーン・オーシグIにおいては、ヘレクスル群と鹿石列が共に見出されるが、一般的にヘレクスル群すべてに鹿石群が伴うわけではない。たとえばオラーン・オーシグ山の周りには10箇所ほどで、ヘレクスル群が見出されているが、鹿石を伴うのは、今のところ、オラーン・オーシグIだけである。ほかに最近ロシア隊により鹿石群が1箇所で発見されたが、そのすぐ近くにヘレクスル群はなく、また鹿石群の型式も少し異なっているので、年代も異なる可能性がある。

鹿石群はヘレクスル群よりもずっと数が少ないことを考えると、鹿石群はある一定の広い地域の人々によって行われていた祭祀の場、あるいは部族などの祭祀の場と考えることができるのであろう。

文献

- 林 俊雄 1992 「北方ユーラシアの大型円墳」『平井尚志先生古希記念考古学論攷』第Ⅱ集、大阪・郵政考古学会、163-197。
- Галанина, Л. К. 1997 Келермесские курганы. Москва.
- Кубарев, В. Д. 1987 Курганы Уландрыка. Новосибирск.
- Молодин, В. И. и др. 2004 Археологические памятники плоскогорья Укока (Горный Алтай). Новосибирск.
- Руденко, С. И. 1953 Культура населения Горного Алтая в скифское время. Москва-Ленинград.
- 1960 Культура населения Центрального Алтая в скифское время. Москва-Ленинград.

2007年度 ビジュリ山系の総合調査

大沼克彦（国土館大学教授）

研究の組織

研究代表者：大沼克彦（国土館大学イラク古代文化研究所教授）；研究分担者：藤井純夫（金沢大学文学部教授）、西秋良宏（東京大学総合研究博物館教授）、常木晃（筑波大学大学院人文社会科学系研究科教授）、宮下佐江子（古代オリエント博物館研究部研究員）、佐藤宏之（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

研究の目的

本研究領域は、ユーフラテス河中流域ビジュリ山系で融合的連携を通じた総合調査を推進し、同地における定住社会出現の中で部族社会が形成された経緯を解明する。総括班はこの研究目的を達成するため、全体会議、研究発表会、シンポジウム、招聘研究者による専門知識提供を定期的に行い、領域全体の方針の確認と研究班相互の連携を促進した。ニュース・レターと研究成果報告書を定期的な出版し、ホームページを頻りに更新して、国内・外関連研究の成果を積極的に公表してきた。現地調査の許可を獲得した2007年2月以降は4回の調査を統括的に促進した。以下は、総括班が促進してきたシリア現地調査の概要である。

現地調査

第1次現地調査（2007年2月14日～3月15日）：ラッカ市からビジュリ山北縁に至る、マンスーラ、ラサーファ、ガーネム・アル・アリ、ハウジット・シュナン町に囲まれる地域で、1) 遺跡分布調査と2) 地質・環境調査を促進した。第2次現地調査（2007年5月6日～5月30日）：1) ガーネム・アル・アリ遺跡の全体測量と2) ビジュリ砂漠台地におけるケルン墓の調査を促進した。第3次現地調査（2007年8月1日～8月29日）：1) ガーネム・アル・アリ遺跡の第1次発掘調査、2) ガーネム・アル・アリ遺跡とその近接地域の地質・地理調査、3) 旧石器時代遺跡調査、4) ビジュリ山北縁部の先史時代遺跡調査、5) ガーネム・アル・アリ遺跡の動物考古学調査、6) ガーネム・アル・アリ遺跡の植物考古学調査、7) 衛星画像に基づく遺跡分布調査、8) シリア遊牧民関係遺跡の実見踏査を促進した。第4次現地調査（2007年11月8日～12月12日）：1) ビジュリ山系調査地の地質・地理調査、2) ガーネム・アル・アリ遺跡の第2次発掘調査、3) ガーネム・アル・アリ遺跡の植物考古学調査、4) ガーネム・アル・アリ村史の聞き取り調査と同村近接青銅器時代墓群の調査を促進した。

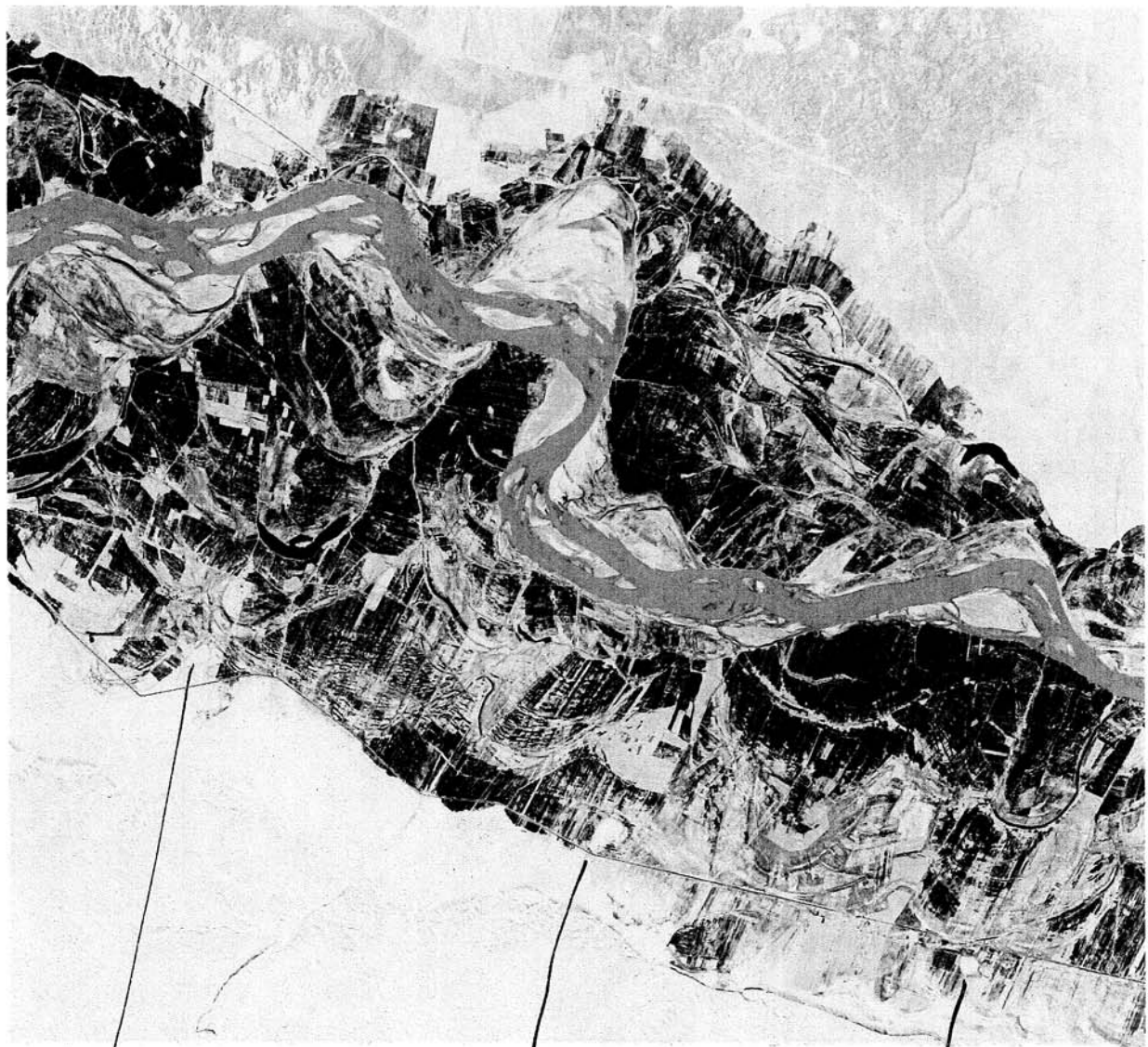
今後の領域推進方策

現地調査の遅れを回復させ、本領域をより効率的に推進するため、今後はより効果的な現地調査を促進する。現在発掘調査をおこなっているガーネムアリ遺跡の周辺には、ユーフラテス河氾濫原の農耕村落遺跡群、氾濫原直近河岸段丘上の墓地遺構群、河岸段丘直上からビジュリ山まで広がる砂漠台地のケルン墓群が分布する。これらの遺跡・遺構群で今後実施する発掘調査と周辺調査により、農耕村落遺跡群、氾濫原直近墓地遺構群、ケルン墓群の3者にまたがる当時の人間集団の動態を探求する。さらに、現在公募中のビジュリ山系遊牧民に関する文化人類学的研究の成果を援用しながら、「部族社会の形成」の空間的、時間的規則性を解き明かし、そのモデルづくりを推進する。また、この公募研究の成果をもって同地の「部族」の実態を解明し、「部族」専門研究者をこれまで以上に頻りに研究発表会に招聘し、より厳密な「部族」の定義づけをおこなっていく。

メソポタミアにおける考古遺跡のデータベース化の研究 2007

松本 健 (国士舘大学教授)

ユーフラテス川氾濫原の変遷



Tell Hammdin,

Tell Ghanam al Ali,

Tell Betha

- ・ 概してユーフラテス川が狭い川幅を縦横無尽に暴れていることがわかる。
- ・ これは 1968 年の地表の衛星画像であることから、この河川の変遷が何時の時期かは不明である。ただ河川の流れの度に堆積した物を層序別にボーリングして年代測定すれば、ある程度がわかるかもしれない。
- ・ Tell Hammadin の西側などは河川によって侵食、切られていることがわかる。もしそうであるならば、遺跡が存在した後に洪水によって侵食されたことになる。
- ・ Ghanem al Ali は激しい洪水で侵食されることはなかったが、遺跡のそばまでひたひたと川の水が押し寄せて来たことを波状の痕跡からわかる。
- ・ Tell Betha では一度崖近くまで洪水が来て、その後に遺跡が造られ、また後、川の水がすぐ近くまで押し寄せていることがわかる。ただ遺跡は激しい侵食をうけることはなかったようである。
- ・ この地域以外でも川の変動が地表からも明瞭であるが、中には川の侵食を止めるため、防波堤のようなものを築いて、耕地を守ろうとしている様子が見られる。また遺跡が川に侵食されて痕跡だけを残しているものも詳細な分析によってやがて確かめられるであろう。
- ・ このように何時押し寄せるかもわからない川の氾濫から耕地や住居を守ることは容易ではないことは明らかであり、ましてや小麦や綿などの栽培を計画的に行うことなど不可能に近かったであろう。
- ・ したがってこの氾濫原に位置する遺跡群は農耕、牧畜だけに頼る生活だけでは小規模な集落にとどまるであろう。もし大規模な集落であるならば、上流、下流、そしてバリーフ川沿いなどとの交易などからの重要な拠点として成立している集落であったであろうことが推測される。
- ・ ただこの氾濫原は遊牧民にとって、格好の放牧地であったに違いない。

ガーネム・アリ周辺に発達する河岸段丘と微地形

齋藤 毅 (名城大学準教授)

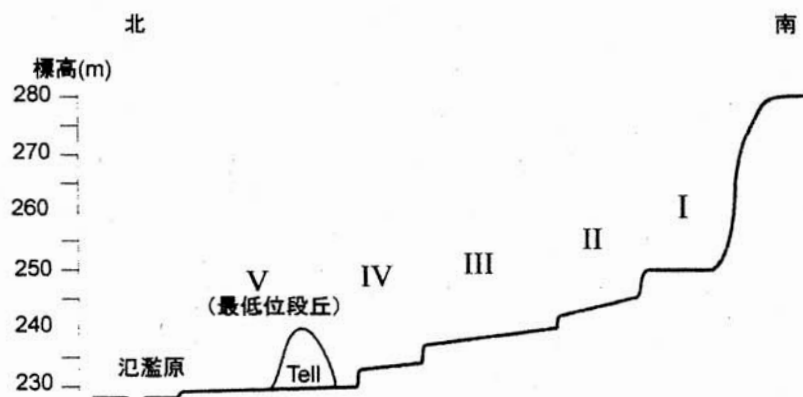
1 / 5,000 の地形図の判読と現地調査によって、調査地域には数メートルの比高差からなる5段の段丘面 (I~V) を認めることができた (第1図)。これらの段丘面は Zor Shammar から Wadi el Kharar にかけての地域に発達している。Tell Hammadin と Tell Ghanem al-Ali は段丘面 V (最低位段丘) に立地している。

それぞれの段丘面の標高は段丘面 I が 250 m, 段丘面 II が 242~245 m, 段丘面 III が 237~240 m, 段丘面 IV が 233~234 m, 段丘面 V が 230 m 前後である。段丘面 V の 1~2 m 下には現在のユーフラテス川の河道と氾濫原が広がっている。

段丘面の最上部を明らかな不整合で覆う河川成堆積物が見られないことから、この地域の段丘を構成している堆積物全体が「段丘堆積物」と考えられる。段丘面を構成する堆積物は主として砂層と礫層からなり、泥質な堆積物は少ない。堆積物には斜交葉理・層理などの堆積構造や下層への削りこみが認められる。また、地層の側方への連続性が悪く、これらの特徴から河川成の堆積物と考えられる。また、砂質~泥質な堆積物にはヨシの根がつくったと思われる生痕化石もみられる。

堆積物は炭酸塩鉱物によってかなり固結していることがある。また、石膏の結晶が大量に析出していることもある。これらは日本の地層では見られない乾燥地域の堆積物の特徴かもしれない。さらに、アスファルトが注入された礫層も見つかった。

Tell Hammadin・Tell Ghanem al-Ali と段丘の関係を考えるにあたっては、それらが立地する最低位段丘が重要である。最低位段丘を構成する堆積物に炭質物の層を発見することができた。この炭の示す年代は Tell Hammadin・Tell Ghanem al-Ali の始まりを規定することになるだろう。また、1 / 5,000 地形図の判読により、最低位段丘面には比高 1m 程度の三日月形や細長い形の微高地が認められた。これらは最低位段丘を形成した時代のユーフラテス川の自然堤防や砂礫堆と考えられる。Tell Hammadin・Tell Ghanem al-Ali はこのような微高地の上に立地しはじめた可能性がある。最低位段丘面にみられる現在の小さな村の形も三日月状や細長い形をしているものがあり、微高地を利用している可能性が高い。



第1図 地形断面模式図 (I~Vは段丘面を示す)

ガーネム・アル・アリ村の歴史

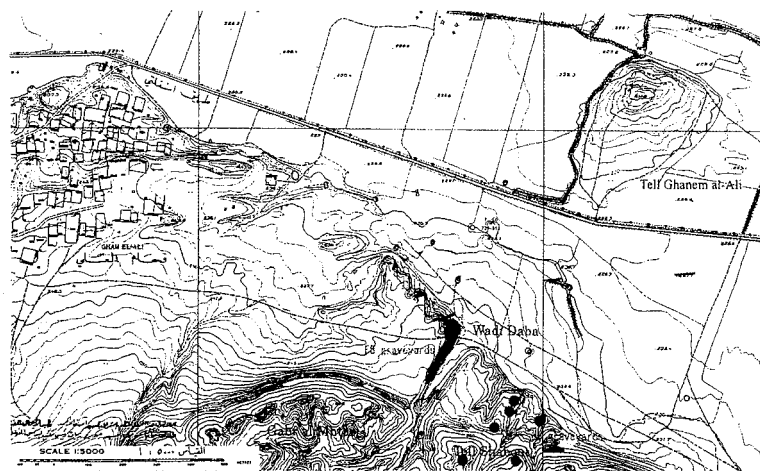
常木 晃 (筑波大学教授)

ガーネム・アル・アリ村は、ラッカ市より約 50km 下流のユーフラテス川沿い (現在の
本流より約 3km 南)、ラッカーディ・エツ・ゾールのハイウェイ沿いに位置する、近年に
入植された典型的な村落である。本発表では、この村落を視点に部族について考えてみた
い。

- ・ ガーネム・アル・アリ村の行政区分 : Mohafaza ar-Raqqa, Nahia Sabha.
- ・ 村名 : 同村より約 50km 下流にあるハラビヤ・ザラビヤ Halabiyeh Zalabiyeh に 2
世紀ほど前に居住していた Ghanem al-Ali という人物名に由来している。現在の村民
たちは、全て、自分たちがガーネム・アル・アリの子孫であると信じている。
- ・ 現在の村ができたのは、わずか 60 年前 (1946 年ないし 1947 年)。
- ・ 現在の人口は約 10000 人、世帯数は約 700 世帯。
- ・ 村民の主な生業は農業と牧畜。主要農作物は、綿花・コムギ・サトウダイコン・野菜。
- ・ 農地は村全体で約 8000donoms (c.800ha)。飼育されているヒツジの数は約 4 万頭。

EB 期の集落と墓地

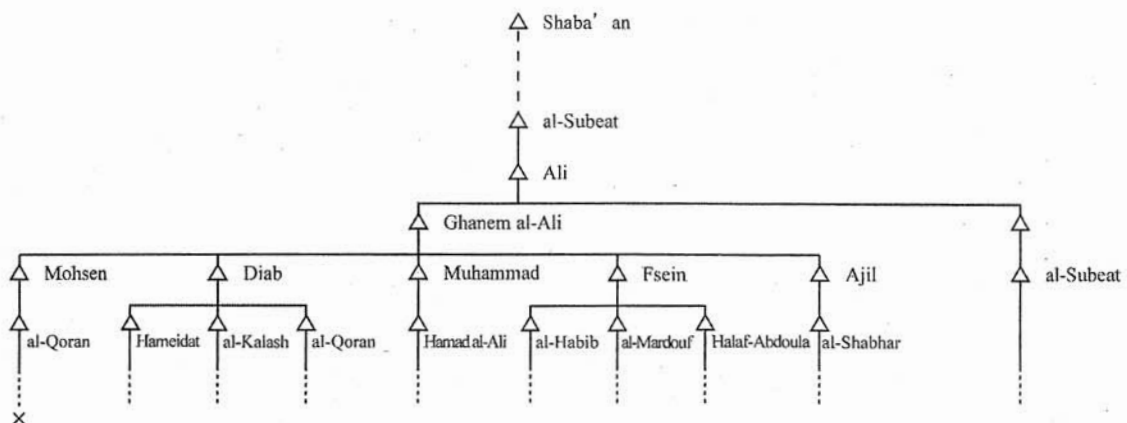
ガーネム・アル・アリ村の歴史は、少なくとも EB 期までさかのぼる。今のところこの時
期のはっきりしている集落は、もちろん村の北東に位置するテル・ガーネム・アル・アリ
であるが、これに対応する墓地が、村の東端にある Wadi Daba 沿いからその南側の丘陵上
に認められる。そこは、テルの位置する最低位段丘から最も近い丘陵部 (Tell Shabout) に
あたる。これらの多くは縦坑墓であり、数千基に上ると思われる。縦坑墓群は丘陵上で南
に 2~3km ほど断続的に続いており、南端がドイツ隊の調査した Abu Hamed となる。テ
ルの EB 期土器とほぼ同じ EBIII~EBIVA と思われる土器を表採することができるが、Wadi
Daba 沿いでは Euphrates Banded Ware が表採でき、Tell Shabout では Plain Simple Ware
が主に表採できるなど、地点によってやや様相が異なっている。これらが時期的な違いを
示しているのか、人間集団や社会的な差異を示しているかなどの解明は、これからである。



Tell Ghanem al-Ali and the EB cemeteries

ガーネム・アル・アリの現代史

- ・ Ghanem al-Ali という名の男が、200 年ほど前に Halabiyeh Zalabiyeh にいた。
- ・ その男の家族が農地の問題から、Halabiyeh Zalabiyeh を出ることを決意した。
- ・ 彼の 5 人の息子が、Halabiyeh Zalabiyeh を出て、紆余曲折の末に、現在の Ghanem al-Ali 村にほど近いユーフラテス河のほとりに定住した。
- ・ この 5 人の息子にはそれぞれ子供がおり、主な息子は下図の 9 名であった。
- ・ これらの息子たちの子孫は、60 年ほど前におこった洪水のために、ユーフラテス河のほとりにあった村を捨て、1946 年（ないし 1947 年）に、丘陵近くに現在のガーネム・アル・アリ村をつくった。
- ・ 彼らのうち、Mohsen の息子である al-Qoran 一族は、40 年ほど前に離村したが、他の 8 人の息子一族は、村に住み続けて、ガーネム・アル・アリ村の有力氏族となった。
- ・ Ghanem al-Ali の甥に当たる Al-Subeat の一族が村に合流し、全部で 9 の氏族が村に居住するようになった（al-Qoran 一族の離村との前後関係は不明）。
- ・ 村民の全ては、Qabila は bu-Shaba'an, Ashira は al-Subeat であり、この 9 氏族は民族学で言うクランと言うよりもリネージに近い。そうだとすると、大家族、ないし拡大家族と呼ぶべきかもしれない。
- ・ これらの 9 氏族の区分は、ガーネム・アル・アリ村の日常生活にも影響を与えている。例えば、居住地区など。しかし婚姻などに差異はない。
- ・ 最もはっきりとした区分は、共同墓地（テルを使用）以外の氏族墓に表れている。現代のガーネム・アル・アリ村が造られてから村人は全てテルに葬られていたが、1990 年代より氏族別の墓地が造られるようになり、現在テルを含めて 5 つの墓地がある。
- ・ これらの墓地は、それぞれの氏族の系譜を意識されたものとなっている。



Ghamem al-Ali 村の氏族の系譜

新石器時代のビシュリ

西秋良宏（東京大学教授）

ビシュリ山系の年間降雨量は200mm 足らずであって、天水農耕を営みうる環境にない。オアシスを除けば遊牧民が展開する砂漠ないしステップである。ユーフラテス河畔の集団が残した粘土板文書などによれば、セム系の遊牧民は遅くとも青銅器時代には出現していたことが指摘されている。その出現事情を調べることは本特定領域研究の主眼の一つであるが、演者の研究班が特に焦点をあてるのは、青銅器時代以前の集団の生活様式、河畔の定住集団との間に形成された社会関係の性質である。すなわち、先史時代の考古遺跡を調査し、その後展開したセム系集団の素地を探ることを目的としている。

周辺地域で蓄積してきたデータ、ならびに2007年に実施した予備調査の所見にもとづき、本日の発表では以下の点を述べる。

(1) 初期食料生産民のビシュリ山系への進出

最も広範な砂漠開発がおこなわれたのは先土器新石器時代末(前7000-6500年頃)である。ビシュリ山系からパルミラ盆地にいたる地域に、同じ石器製作伝統をもつ集団が広く進出した。彼らの遺跡は、資源採取地、単発的な停泊地、繰り返し訪れる停泊地などで構成されている。定住施設をもたないこと、石器に農具が含まれないこと、狩猟具も少ないことなどから遊牧集団であったとみられる。

(2) ビシュリ集団とユーフラテス河畔の集団との関係

新石器時代ビシュリ集団の故地の一つはユーフラテス河畔にあらう。しかし、石器製作技術の違いからみて、間もなく別グループを形成したらしい。一部石器の共有をのぞけば、河畔集団との接触を示す証拠も乏しい。たとえば、ビシュリ山系の特産品であるアスファルトや良質フリントが河畔の定住村落に持ち込まれた形跡は希薄である。このことは、両者が没交渉であったためではなく、河畔遺跡の調査が不十分であることに起因すると考えられる。

(3) 青銅器時代への連続性

新石器時代のビシュリ集団が青銅器時代以降のセム系集団につながったかどうかは不明である。続く銅石器時代前半の遺跡はユーフラテス河畔では知られているが、砂漠地ではきわめて少ないからである。この点は今後の野外調査で確認するとともに、気候変化などによる撤退の可能性もふくめて解釈していく必要がある。

セム系部族社会の生業基盤

本郷一美（総合研究大学院大学準教授）

<研究の目的>

動物考古学と考古植物学の手法を用い、西アジアの先史時代社会から古代都市文明社会への移行過程における生業基盤の変化を明らかにする。

食料生産技術の発達—集約化と分業化

*セム系部族社会の成立の前提として利用可能な動・植物資源

偶蹄類の家畜化と植物の栽培化

*各時代でその利用にどのような変化が生じたか

牧畜技術の発達、特に乳製品利用技術の発達と遊牧の開始

*都市の出現の背景（古代都市国家の成立基盤）

生産性の高い作物品種の成立

動植物生産品の交易

<研究の方法>

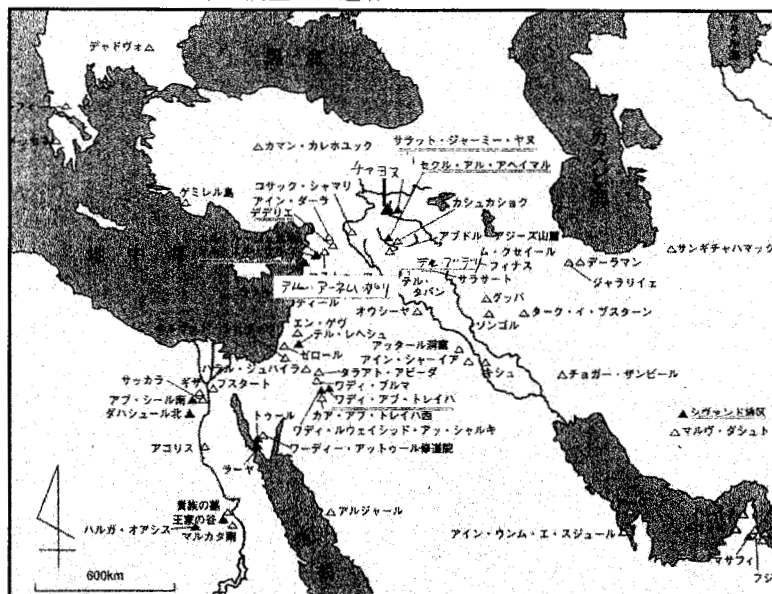
動物考古学

出土動物骨資料の分析（種同定、サイズの計測、死亡年齢の推定）

考古植物学

遺跡からサンプリングした土からフローテーション法を用いて炭化種子を選別、種同定

2005-2007年に調査した遺跡



ユーフラテス河中流域の古代建築遺構

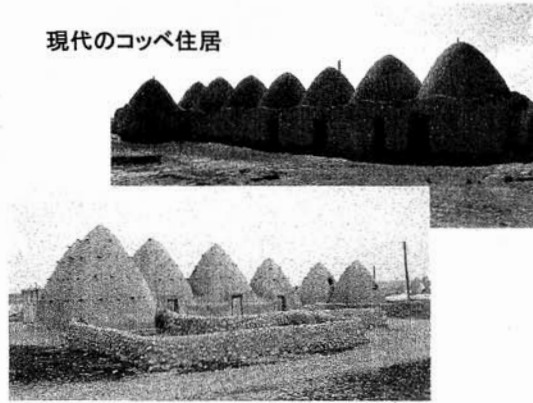
岡田保良 (国士舘大学教授)

ユーフラテス中流域の建築遺構- テル・ガーネム・アル・アリとの関連で-



国士舘大学イラク古代文化研究所 岡田保良

現代のコッペ住居



ガーネム・アル・アリの建築遺構

- Square 1 Area 2 Str. 3 = 石基礎の上に練り土壁 (tuf)
- 同Area 3 Str. 8 = 橙・褐色の日乾煉瓦で正方形の室: 東を除いて石基礎あり
- Square 2 Level 4 or lower には、日乾煉瓦壁と石積みの壁 (幅2.4m)
- Square 5: 練り土壁(tauf)とその下に石積みの壁

13/12/07 Working Report より

「日乾煉瓦」あるいは「土の建築」

日乾煉瓦 mud-brick = アドベ adobe

(日干し煉瓦、天日煉瓦、陽焼き煉瓦)

mudbrick; sun-dried -; unbaked -; unfired -

フランス考古学では

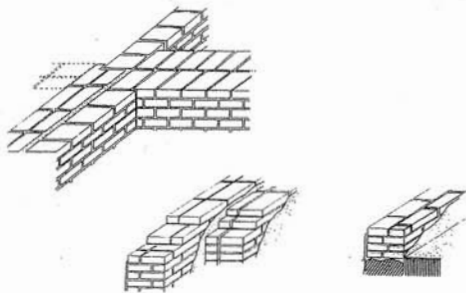
brique crue modelée

- *tub* (型無し成形 clay-bat)

brique crue moulée

- *labina; libn* (型作り)

テル・マストゥーマの煉瓦組積 (1994年の調査から)



結びにかえて

• 建材から:

同じ遺跡、同じ層位にも多様な煉瓦や壁の造りがある。

メソポタミアでは、煉瓦は正方形としたものだが、シリアではそうはいかない。

• ドームについて:

ドームは正方形の上には載るが長方形の上には、ふつう載らない。

ガーネム・アル・アリの遺構は今日のコッペ住宅の源流たりうるか。

パルミラのテッセラについて

宮下佐江子（古代オリエント博物館研究員）

1. テッセラ

ベル神殿聖域、パルシャミン神殿北側の中庭、アゴラからの出土から大量の出土報告のある多くは粘土製の札。

テッセラは廃土や表面の埋土、溝の埋め土から出土したらしいが、それらの多くは道の補修材料として砕かれてまぜものとして用いられた破片であったとされ、図面、写真など何も残っていない

1940年代から50年代にかけて、それらを詳細に検討し、集成した研究がされている。

H.Ingholt, H.Seyrig, J.Starcky による *Recueil des tesseres de Parmyre* (R T P)

Mesnil du Buisson による *Les tesseres et Monnaies de Parmyre*

R T Pには1132種のテッセラが集成

その後のパルシャミン神殿の調査やベル神殿の調査で、R T Pに掲載されていないタイプのテッセラも報告されている。

2. 形状

その殆どが粘土製であるが、稀に青銅製、鉛製、鉄製、ガラス製などで表と裏に文様と文字が型押しされている。大きくても縦横4 cmを越えるものはなく、3 cm前後が最も多く、なかには1 cmにみたないほどのものもある。四角形、円形、楕円形、菱形、三角形、五角形、台形、時には神殿を模したものなど多種多様。

3. 図像

描出された図像：寝椅子に横たわり、墓室内彫刻の饗宴図と同じ構図。上半身のみの正面観の人物や椅子に座っている像もある。これらはいずれも神官を示す、円筒形の帽子を被っている姿であらわされることが多い。

神像は、その神性に関わるアトリビュートとともに描出されている。動物像は駱駝、ライオン、雄羊、牛、グリフォンなど、植物文はロゼッタ、松毬、葡萄樹、さらに壺やひしゃく、天秤などの道具、星や三日月があらわされることもある。

図像とともに、パルミラ文字による人名や神名が刻まれたり、稀に日付が記されることもある。また、図像はなく、文字だけのものもあり、ベル神やバール神、様々な神への祈念文、個人名が記されている。

4. 用途

それらが一過性で、使い捨てられたもの、すなわち神殿での宗教的宴会（信徒の団体、神官団など）や特定多数の市民への食糧（あるいは葡萄酒）配布の引換券であろうと推測されている。記された名前は宴会の主催者であり、配給食料の提供者ではないかと仮定されている。

旧石器時代に“部族”の可能性を探る

佐藤宏之(東京大学教授)

1. 分節社会としての部族社会研究

1) 分節社会=部族社会の特徴

土地の占有(領域化)/(擬制的)血縁組織/共通の言語/習慣・文化の共有/信仰・宗教の共有/自己アイデンティティ/他者との競合

→旧石器時代に確認されるか?

2) 二つの社会階層化論

a. 生産経済発展段階説: 余剰生産の蓄積と再分配をコントロールする支配者・階級の形成、唯物史観・社会進化論 →伝統的学説、新石器段階での出現を想定

・・・M フリード、E サーヴィス等

b. 祭祀統合説: 低経済段階でも集団内・間の競覇的な儀礼交換をコントロールするエリートによる分節化、威信獲得行動 →新しい学説、狩猟採集段階でも出現

・・・B. ヘイデン、M. ゴドリエ等

・生業(生産)から儀礼(社会)の重視へ →旧石器時代における儀礼行動の可能性

2. 旧石器時代における各種の証拠

1) 領域性: 遊動型狩猟採集民による階層的な社会構造

・行動圏・交換網・通婚圏・様式圏

・日本列島の後期旧石器時代後半期の地域石器群の分立

・有舌尖頭器にみる社会慣習としての「石器扱い」の東西差

2) 自己アイデンティティ(儀礼): 個人の差異化、集団的象徴品・物・装置

・南シベリア、マリタ遺跡の墓と副葬品

・南ドイツ、オーリニャシアン期の装飾品

・南アフリカ、ブロンボス洞窟の貝製ビーズ

3. 旧石器時代の“部族”の可能性

旧石器時代には、新石器時代以降の部族社会を準備したある種の分節社会が存在した可能性は大きい

But 1. その社会はいびつで不完全な分節化

2. その分節社会は、新石器(=定住)型部族社会ではない

3. 西アジアだけの資料では判然としない

(本報告書前半部「計画研究『西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係』」- II 旧石器時代に“部族”の起源を探るを参照されたい)

シュメール”語彙リスト”のシリアにおける受容

前川和也 [国士舘大学教授]

I. 共同研究会「シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族、文化、言語」（1月26、27日、京大会館）

I.1. 4計画研究班

「西アジアにおける都市化過程の研究」（研究代表者：常木晃）、「シュメール文字文明」の成立と展開（前川和也）、「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」（沼本宏俊）、「パレスティナにおける都市の発達と「セム」系民族の展開」（月本昭男）

I.2. プログラム

1. 森若葉「バビロニア人からみたシュメール語：最近のシュメール語研究によせて」、2. 田中祐介「名前から見るシュメール人とセム人：初期王朝期末ラガシュの場合」、3. 池田潤「GISを用いた古代シリアの言語地理学」、4. 有賀望「シャマシュのナディートゥム制度成立の経済的背景：社会体制の変容を手がかりに」、5. 川本正知「シリア共和国のキリスト教：シリア語とシリア語使用環境の調査」、6. 辻田明子「abzuにかんする考察：前3千年紀の史料を中心に」、7. 中田一郎「マリ文献にみえる’セム系部族社会’：戦争捕虜の取り扱いをめぐって」、8. 山田重朗「ポスト・ハンムラビ時代のユーフラテス中流とハブル流域における政治的・行政的・文化的様相」、9. 前川和也「前3千年紀シュメール語彙リストのアカド語世界への普及」、10. 大西庸之「HanaとMartu/Amurru」、11. 川崎康司「前2千年紀前半の「大王」号の成立とその特異な変遷」、12. 松島英子「2語併用世界の文字トリック：エヌマ・エリシュの注釈書/マルドゥクの50の名前を例に」、13. 前田徹「Martu：部族制度の確立」

I.3. 楔形文字研究者が「セム系部族社会の形成」、「ビシュリ山系」研究にどこまで寄与できたか

II. シュメール「語彙リスト」のシリアにおける受容

II.1 シュメール「語彙リスト」lexical listとは

Archaic (list) vs. ED (Early Dynastic) (list). E.g. *Archaic Cities* vs. *ED Cities*

「第1次」語彙リスト、「第2次」語彙リスト

II.2 職業名リスト (cuneiform.ucla.edu.dcclt)

ED Lu A

ED Lu B

ED Lu C
ED Lu D
ED Lu E
ED Officials
Names and Professions (= Lu X)

II.3. 「第2次」リスト

ED Lu B, Lu C, Lu D : ファラ (=シュルパク)
ED Lu E : アブ・サラビク (およびキシユ、ガスル、ウルケシュ、エブラ)
Names and Professions : アブ・サラビク (キシユ起原! :キシユ的 colophon の存在)
cf. Gelb: "Kish Tradition" / "Kish Civilization" (Ebla, Mari と Kish, Abu Salabikh)

限定詞、決定詞としての LU₂ の使用頻度。 E.g., lu₂.nar 「歌手」 (ED Lu E 94)

ED Lu A: 0 / 129; ED Officials: 0 / 79

ED Lu B: 11 / 63; ED Lu C: 26 / 74; ED Lu D: 13 / 27; ED Lu E: 61 / 224

ED Names and Professions: 15 / ca. 133

「船」

max(SI): ED Lu C (ファラの特徴)

maz: ED Lu E

II.4. 「語彙リスト」成立におけるエブラの役割 (キシユの役割?)

Ebla Vocabularies (biling., monoling.)

Ebla Sign List (シュメール語を「セム語」風に表記)

1) [[šita]] ŠITA(LAK 503) ti-iš-da-num₂

...

4) [[engar²]] APIN [en-ga]-ru₁₂-um

II.5. 日本古代の文字文化との対比 (木簡と紙)

「教則本」の存在 (どのような辺境でも)、「カナ」文字の成立にかんして木簡が果たした役割

粘土板行政文書がまとまって出土するシリア「都市」遺跡では、かならず「語彙リスト」が存在していたはず (数百枚の行政文書が発見されたテル・ベイダルでは、まちがいなく教則本たる「語彙リスト」が存在していたはず。また、さいきんテル・ブラクで ED Lu A が発見されたのはなにも不思議ではない (文字体から判断して 2500BC 頃という)。しかし Uruk Eanna III 頃、すでに Lu A がテル・ブラクまで到達していたとするのは「ウルク帝国主義」の妄想でしょうか?)

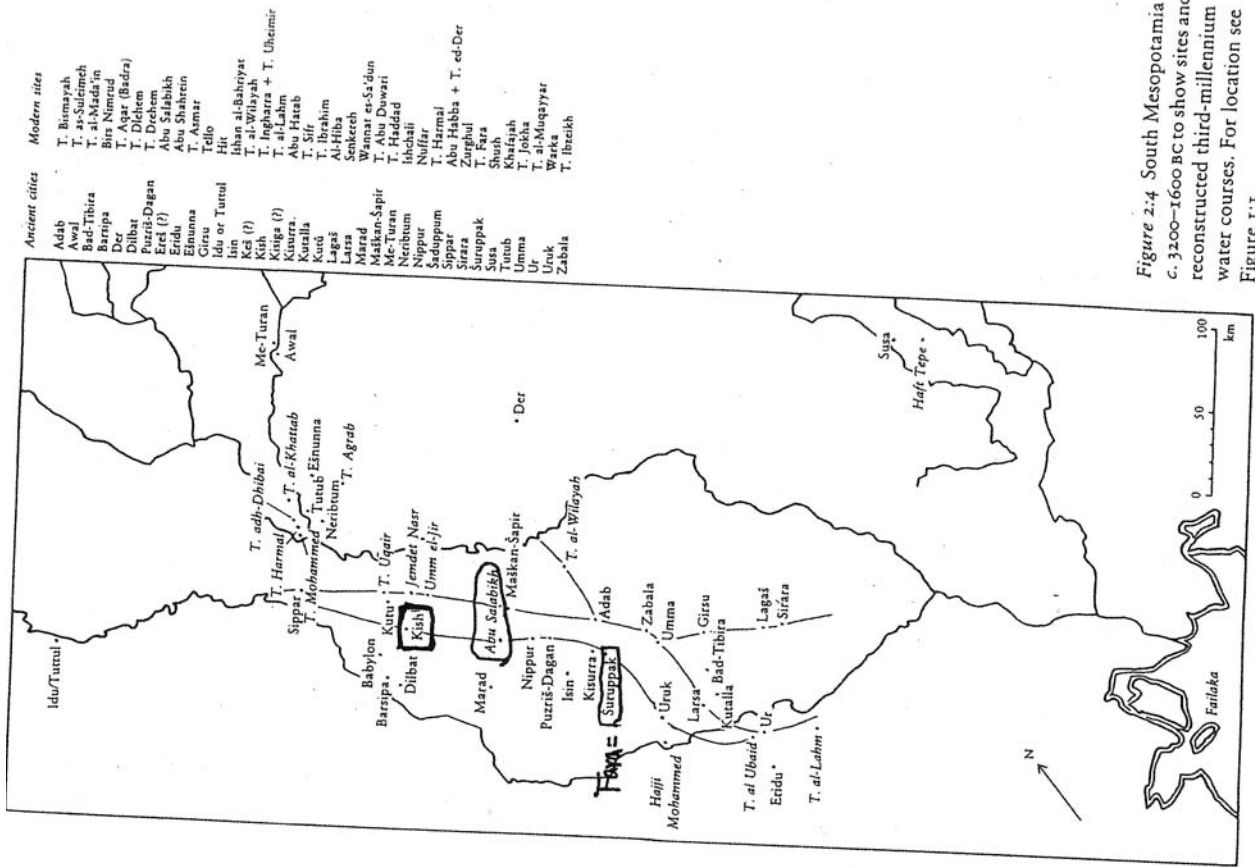


Figure 2.4 South Mesopotamia c. 3200-1600 BC to show sites and reconstructed third-millennium water courses. For location see Figure 1.1

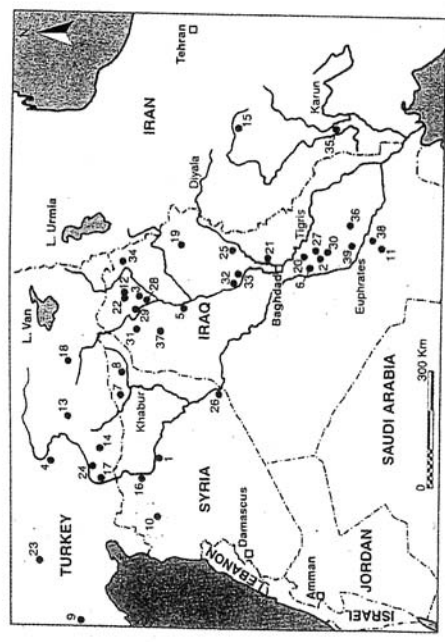
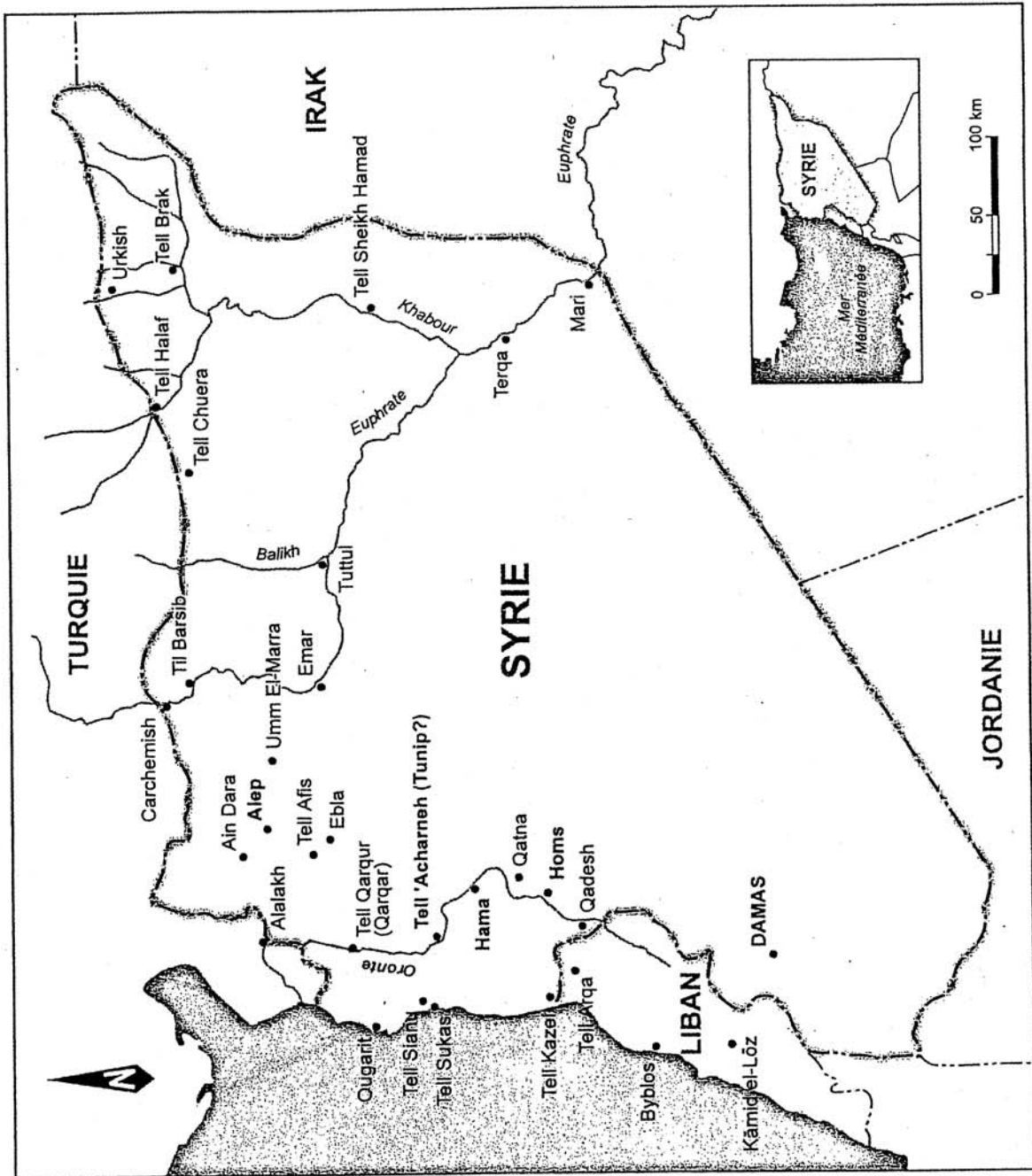


Figure 1.1 Map of Mesopotamia and environs, depicting location of selected sites mentioned in the text

Key to sites:	
1	Abu Hureyra
2	Abu Salabikh
3	Arpachiyah
4	Arsilantepe
5	Aššur
6	Babylon
7	Beydar
8	Beik
9	Çatalhöyük
10	Ebla
11	Eridu
12	Gawra
13	Girihüyük
14	Göbekli Tepe
15	Godin Tepe
16	Habuba Kabira
17	Hacınebi
18	Hallan Çemi
19	Jarmo
20	Jemdet Nasr
21	Khafajah
22	Khorsabad
23	Kültepe-Kaneš
24	Kurban Höyük
25	Madhihur
26	Mari
27	Maškan-šapir
28	Nimrud
29	Nineveh
30	Nippur
31	Qermez Dere
32	Samarra
33	Sawwan
34	Shanidar
35	Susa
36	Telloh
37	Umm Dabaghiyah
38	Ur
39	Uruk-Warka



- Carte de la Syrie montrant la position de Tell 'Acharneh le long de l'Oronte et d'autres sites archéologiques majeurs contemporains.

Lexical Texts and Archival hoards - Development of lists during the Late Uruk Period

Texts from the Late Uruk Period

Period: (site)	Unk IV-III (Unk)	Unk III (Jemdet Nasr)	ED I (U)	ED IIs (Fara)	ED IIs (Aba Sababih)	ED IIs (Ebla)	ED IIs (Girsu, Nippur)	Old Akkadian	Ur III	Old Babylonian
Name:	Total	IV	III	?						
1 Lu ₂ A (homestead)	185	5	158	22	LET 2, 14; 264; 299-301	SF 33-35, 75-76; W 12466	OIP 99, 1-3, 483, 487	ZA 29, 79; OSP 1, 11; YOS 1, 12; MDP 14, 88		SIT 112-113
2 Lu ₂ E (club-stor)										
2 Lu ₂ X (= Nippur and Prof.)										
1 Vessels	91	3	79	9		SF 64	OIP 99, 54+56, 55, 57-60	MAO 5, 35 (Fish) Fara/Kisipin, JCL 26, 39-46		
1 Tribute	56		51	5		SF 12, 13 + TSS 264	OIP 99, 402, 459, 465			SIT 42 + NI 1597
1 Meist	55	1	44	10		SF 8-9	OIP 99, 13-17			
1 Wood	30		28	2						
1 Cattle A	24		20	4						
2 Cattle B										
1 Officinals A	23		22	1						
2 Officinals E										
2 Officinals B										
1 Fish	22		21	1						
1 Cities	17		13	3						
1 Geogr.	12		12							
1 Grain	9		1	8						
1 Birds	6		4	2						
1 Plants	5		5							
1 Pigs	2		2							
1 Vocabulary	11		11							
1 Unidentified	125		125							
1 Good lists										
Ebla Monolingual										
Mathematical										
Ebla Vocabulary (e ₂ , bar kin)										

Figure 24: Major lexical lists of the 3rd millennium. Conspicuously absent in the earliest levels are the lists of gods first clearly attested in the Fara period. These compositions may represent an innovation of Early Dynastic theologists.

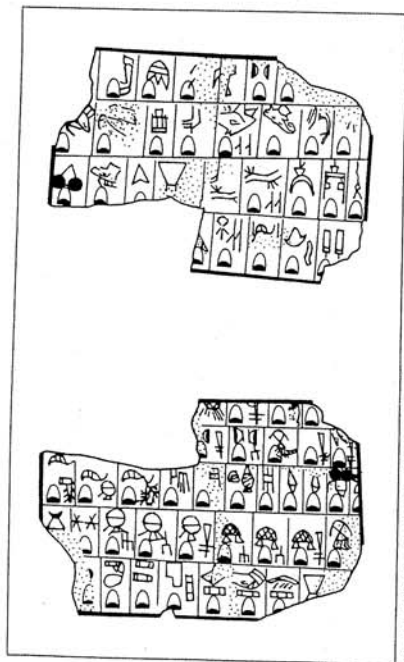


Fig. 1: ED Lu A リスト W 9656.h (Ⅰa; Englund-Nissen 1993:Tafel 23)

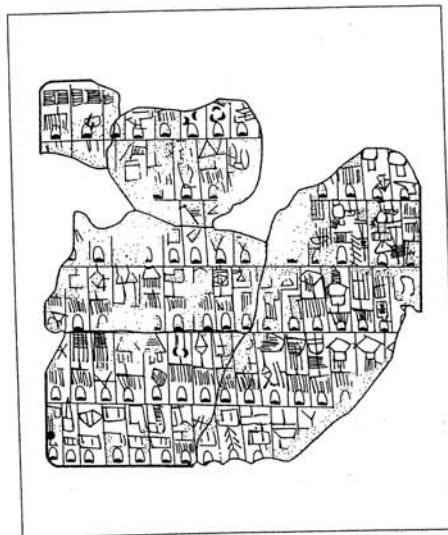


Fig. 2: ED Lu A リスト W 20266.1 表面部 (Ⅲ; Englund-Nissen 1993:Tafel 2)

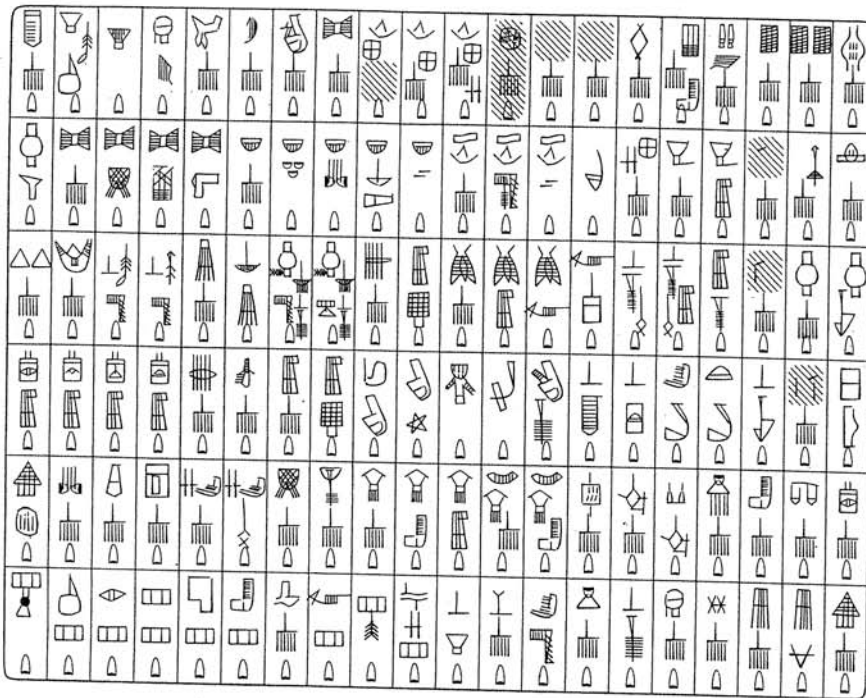
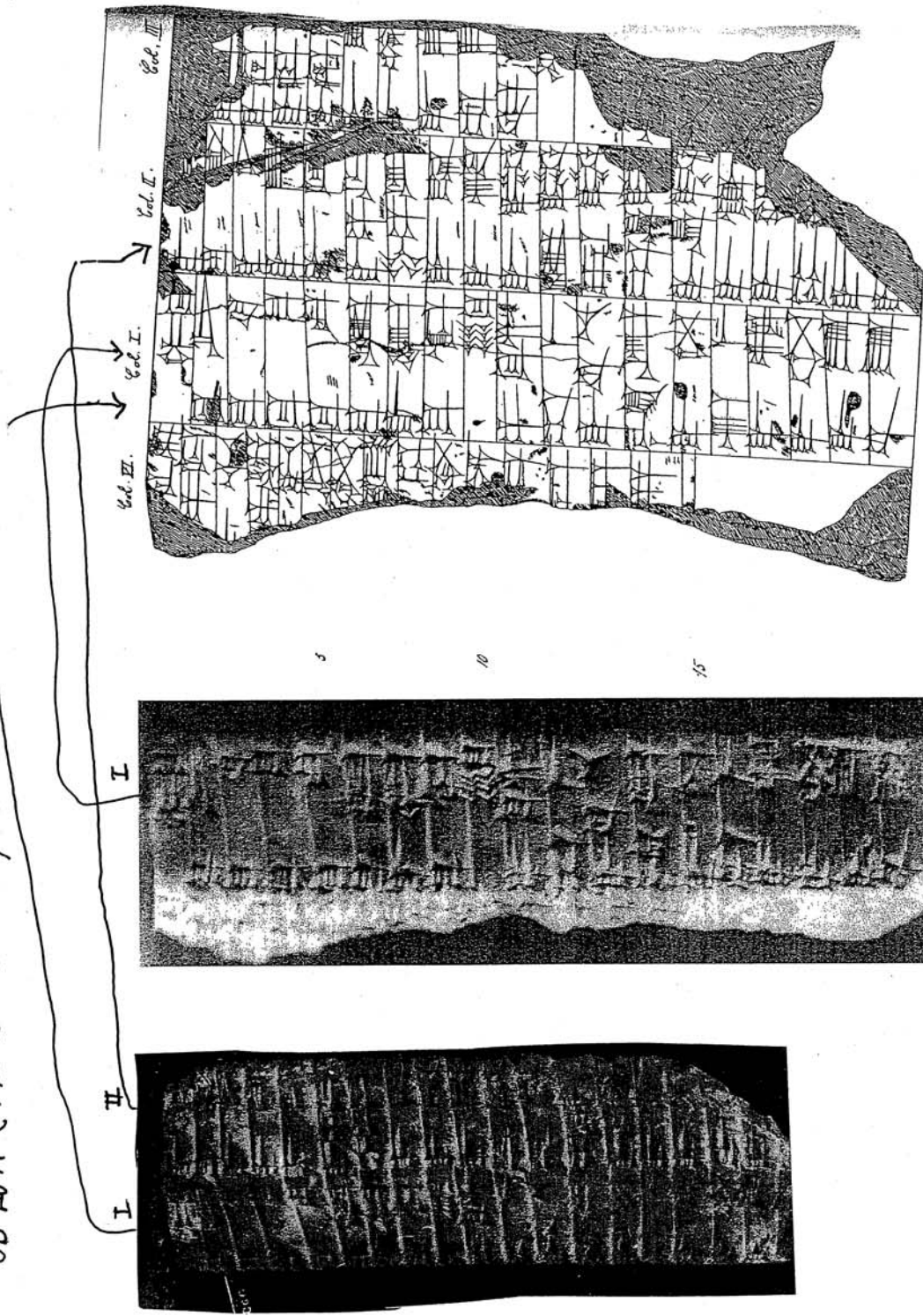


Figure 32: Composite drawing of the archaic lexical list Lu₂ A

Lu A

Lu A

OB L₀ A (7⁹17⁴. = 17⁹N 出±)



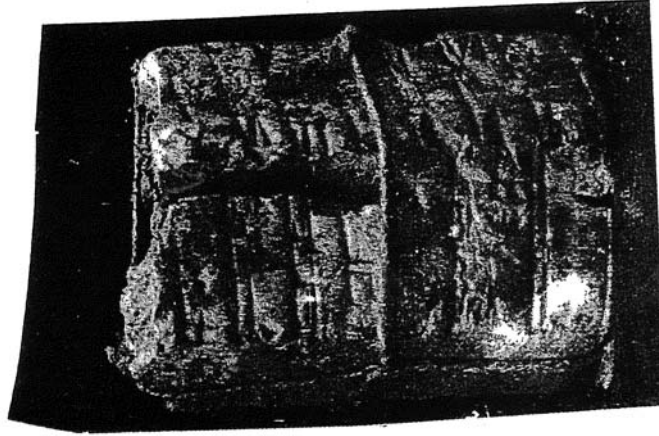
No. 43: Ni 1600 (or Ni 2528)

NI 1600

ED Cities

↑	↑	↑	↑														
ix	lipur	varma	truk														

Figure 26: Composite copy of the lexical list "Cities"



OB Lu A (𐎠𐎵𐎤𐎠.𐎠𐎲𐎣𐎠)

テル・タバンの出土文字資料から見た部族

沼本宏俊（国士舘大学教授）

山田重郎（筑波大学準教授）

1. テル・タバンの出土古バビロニア時代文書

(1) 語彙文書(3点) :

- ・ Tab T05B-36 : TU-TA-TI タイプ初級文字表.
- ・ Tab T05B-37 : 初級文字表
- ・ Tab T05B-38 : 初級文字表

(2) 書簡 Letters (16点) :

- ・ 半数以上は保存状態良好。サイズ様々 (c. 7.0 x 5.0 cm から 3.5 x 3.0 cm) .
- ・ 8点 (Tab T05B-41, Tab T05B-42, Tab T05B-43, Tab T05B-44, Tab T06-1, Tab T06-9, Tab T06-10, Tab T06-12+Tab T06-14) は、あきらかに Ṭābatum (Tel Taban) の地方領主である YasIm-Mahar 宛。

(8点の内訳)

- ・ 2点 (Tab T05B-42 and Tab T05B-43) は、宗主 IšI-Sumuabi からのレター・オーダー。べつの2点 (Tab T05B-41, Tab T05B-44) は、近隣都市の領主か官吏である TašI-' annu (*Ta-šI-an-nu*) からの書簡。以上4点の手紙のトピックは、当該地域の治安、穀物税(大麦)の収集・備蓄・輸送。銀の輸送。
- ・ 4点は、YasIm-Mahar の「兄弟 *ahūka*」 (=同僚) を自認する (Tab T06-9, Tab T06-10, Tab T06-12+Tab T06-14) か、彼を「我が兄弟 *ahI, ahIya* [genitive]」と呼ぶ (Tab T06-1)。人物からの手紙。土地の所有権、家畜や労働者の管理、銀の支払い等を扱う。
- ・ 2点 (Tab T06-3 + Tab T06-17, Tab T06-11) は、宛名がほとんど破損しているが YasIm-Mahar に送られたものである可能性がある。
- ・ 1点 (Tab T06-13) は YasIm-Mahar が送り主として現れる。
- ・ 残り5点 (Tab T05B-45, Tab T06-2, Tab T06-6, Tab T06-15, Tab T06-16) それ以外の人物の間の手紙か、破損していて誰と誰の間で交わされたか不明。

(3) 行政文書・法文書 (6点) :

- ・ 3点 (Tab T05B-39, Tab T05B-40, Tab T06-18) は行政文書。
 - ・ Tab T05B-39 : なんらかの祭儀に関わる月例輪番リスト。捺印され、輪番が決められた月名と各月名に続き、それぞれ2つの人名が記される。2行目と末尾(日付)で IšI-Sumuabi に言及。
 - ・ Tab T05B-40 : 標準ビール甕 (*pIhu*) の配給表。日付なし。33の人名に言及。
 - ・ Tab T06-18 : 人名からなる何らかのリスト。13の人名と配給された何らかの物品の数(1か2)が記録されている。
- ・ Tab T06-4 : 大型の契約文書 (H eight 11.6, Width 6.1, Depth 2.9 cm)。ほぼ完全な状態で封筒 (Tab T06-5) に入って発見された。「王」の称号の持つ IšI-Sumuabi (テル

カ(王) からタバトウム (テル・タバ) への不動産下賜を記録。

- Tab T06-7 : 封筒の小断片。
- Tab T06-8 : 粘土板小断片。法文書？

2. 不動産下賜文書 Tab T-06-4

Obv.

1. 10 IKU A. ŠÀ *i+na* A. GÀR *pí-í itl-ha-tim*
2. ÚS. SA AN. TA ÍD. *ha-bu-u[r]*
3. ÚS. SA KI. TA *mu-ut-ba-na-e*
4. SAG. DU AN. TA ÍD. *ha-bu-ur*
5. SAG. DU KI. TA *sa-ki-x-x-tum*
6. 5 IKU A. ŠÀ *i+na* A. GÀR *pí-it-ha-tim*
7. ÚS. SA AN. TA *qí-iš-í ti-DINGIR*
8. ÚS. SA KI. TA *i-í ba-a[]-e-ra-ah*
9. SAG. DU AN. TA *sa-ku-mê(?) -e^dIM*
10. SAG. DU KI. TA *be-el-lum*
11. 1+1/3 SAR É. DÛ. DÛ. A
12. ÚS. SA AN. TA *mu-ut-^dx*
13. ÚS. SA KI. TA *ri-kum*
14. SAG. DU AN. TA *a-ku-ki*
15. SAG. DU KI. TA *su-ma-ab*
16. ŠU+NÍGIN 15 IKU A. ŠÀ
17. ù 1+1/3 SAR É. DÛ. DÛ. A
18. A. ŠÀ ù É *ša* É. GAL
19. *a+na ia-si-im-ma-har*

Lower Edge

20. DUMU *su-ma-at-e-ra-ah*
21. *^mi-ší-su-mu-a-bi* LUGAL
22. IN. NA. AN. BA

Rev.

23. A. ŠÀ ù É *na-aš-bu-um*
24. *ša la ba-aq-ri ù la an-du-ra-ri*
25. *ba-qí-ir i-ba-qa-ru*
26. *ni-iš^d da-gan^dIM-ma-ha-ni*
27. ù *i-ší-su-mu-a-bi i-ku-ul*
28. *ku-up-ra-am em-ma-am up-ta-áš(?) -<ša>-aš*
29. ù 30 MA. NA KÛ. BABBAR Ì. LÁ. E
30. [IGI] *^m[su]-mu-ha-am-mi ša-pí-í [URU(?). qa]-tú-na-an. KI*
31. IGI *^mbu-nu-ma^dIM IGI^m mu-tu^da-mi*
32. IGI *a-bu-ul-la-an IGI i-ba-li-im*

33. IGI *an-za-nu-um* IGI *i-ba-al-pi*-DINGIR
 34. IGI *i-li-e-pu-uh* IGI *ha-am-mu-tar*
 35. 1 GÍN (over IGI) *da-di-e-pu-uh* DUMU BI-sa-ah
 36. IGI *ia-di-hi-im* DUMU *ha-am-mu-tar*
 37. IGI *ha-li-li-im*<<*im*>>
 38. IGI *mu-ut-ha-li* IGI *qi-iš-ṯi*(?)-DINGIR
 39. IGI *da-di-pa*ṯ-*li-ih*-^dIM IGI *bu-ne*-DINGIR
 40. IGI *ia-an-šī-ib*-^d*da-gan* IGI *mu-ut-aš-kur*
 41. IGI *hi-iš-né-e*-^dIM SANGA

Upper Edge

42. ITI *ki-nu-nim* UD 16 KAM
 43. MU *i-šī-su-mu-a-bi*
 44. *tap-pi-iš-tam*
 45. *iš-ku-nu*

(訳)

(1) *pithatum* 灌漑地の 10 ikū の耕地;
 上の横隣: ハブル川; 下の横隣: Mut-banae;
 上の縦隣: ハブル川; 下の縦隣: Saki[...]*tum*.

(6) *pithatum* 灌漑地の 5 ikū の耕地;
 上の横隣: Qišti-El; 下の横隣: Ibāl-Erah;
 上の縦隣: Sakume-Addu; 下の縦隣: Bellum.

(11) 1 と 1/3 SAR の建築済みの家屋 (と土地);
 上の横隣: Mut-[...]; 下の横隣: Rikum;
 上の縦隣: Akuki; 下の縦隣: Sumābu.

(16) 合計 15 ikū の耕地と 1 と 1/3 SAR の建築済み家屋 (と土地) — 「宮殿の」耕地と家屋—を Sumāt-Erah の子 Yasim-Mahar に対して、王たる Iši-Sumuabi が贈与した。

(23) これらの耕地と家屋は (法的にその帰属が正しく) 確立されたものであり、他者による請求ならびに土地開放の対象とならない。

(25) 権利を申し立てる者は Dagān, Addu-Mahani と Iši-Sumuabi による誓いにより、熱いアスファルトを塗りつけられ、30 mina の銀を支払わねばならない。

- (30) 証人: Sumu-Hammi, Qaṭṭunan の知事 (31) 証人: Bunuma-Addu; 証人: Mutu-Ami
 (32) 証人: Abulla-El; 証人: Ibālim (33) 証人: Anzanum; 証人: Ibāl-pi-El
 (34) 証人: Ili-epuh; 証人: Hammūtar (35) 1 sheqel : Bisah の子 Dādī-epuh
 (36) 証人: Hammūtar の子 Yadihim (37) 証人: Halilim

- (38) 証人: Mut-halī; 証人: KI[...]-E1 (39) 証人: Dadī-pālih-Addu; 証人: Bun-E1
 (40) 証人: Ianṣib-Dagān; 証人: Mut-Aškur (41) 証人: Hiṣnē-Addu, 祭司

(42) Kinūnum の月、16 日. (43-45) Iṣi-Sumuabi が(川の) 放水路を完成した年

2. テル・タバンの出土古バビロニア文書 (行政文書・法文書・書簡) ならびに他の文書史料に反映されるポスト・ハンムラビ時代のタバンの

(1) Iṣi-Sumuabi

- ・不動産下賜文書 (Hana/Terqa-タイプ)
 - ・Iṣi-Sumuabi は、“王” であり、不動産贈与者;
 - ・その名は年名「Iṣi-Sumuabi が放水路を完成した年」に記念されている。
- ・その他の T 8 出土文書:
 - ・行政文書の一つが Iṣi-Sumuabi の名を含む他の年名を保存:
 「Iṣi-Sumuabi 王が Šamaš に[...]を献上した年」(MU i-ṣi-su-mu-a-bi LUGAL a-na ʾUTU [...] ú -še-lu-ʾú?)
- ・Yasim-Mahar 宛ての Iṣi-Sumuabi の手紙: Iṣi-Sumuabi は Yasim-Mahar (Tabatum/T. Taban) の宗主であることを示唆。
- ・Terqa (Tell Ašara) 出土文書: 「王 Iṣi-Sumuabu」が契約文書 (TFR 1, 9) に言及される。誓い: “Dagan, Itur-Mer と Iṣi-Sumuabu” による。
- ・結論: Iṣi-Sumuabi/u = Terqa の王は、ユーフラテス中流域とハブル中下流域を支配していた。

(2) 前 18 世紀のテルカの支配者

(a) Mari の Zimri-Lim

(b) Babylon の Hammurabi of (-c. 1750)

(c) Terqa (*alias* HANA 王国) の独立

・Yapah-Sumu[abu]:

- ・”王” (TFR 1, 8/8E).
- ・UGULA Ha-na (Alalakh 出土文書).
 > 彼が Terqa を開放して独立したか?

・Iṣi-Sumuabi/u:

- ・“王” (TFR 1, 9; T. Taban の不動産下賜文書).
- ・彼の名は T. Taban と H. ed-Deniye [=Haradum] 出土文書の複数の年名に現れる。
- ・Qattunān の知事 (šāpiṭum) が T. Taban 不動産下賜文書に言及される。
 > Iṣi-Sumuabi/u はテルカの王でユーフラテス中流域とハブル流域を支配した。Tabatum(Tell Taban)は、彼の王国において Qattunān を州都とする行政州に含まれていた。

・Yadih-Abu:

- ・“王” (TFR 1, 1-7).

- ・ Terqa 出土の契約文書 (TFR 1, 5) 年名「Yadih-Abu が Ṭabatūm の Annunitum (神像) を建てた年」
- ・ 2007 年 T. Taban 出土文書には Yadih-Abu の年名がみとめられる (「総計 163 GUR の大麦、マルカーヌ月、30 日、Yadih-abu 王…」)。
- Yadih-Abu はユーフラテス中流とハブル流域を支配。

(3) Yasim-Mahar の地位と Trench 8 出土文書

(a) 不動産下賜文書: Yasim-Mahar に下賜された財産は「宮殿の耕地と家屋 (AŠA ú É šá É. GAL)」。

(b) 書簡からの情報:

- ・ Yasim-Mahar は T. Taban/Ṭabatūm に居住。
- ・ Iši-Sumuabi/u ➢ Yasim-Mahar: “都市、都市周辺の灌漑地、および防備の砦について手抜きなきようにせよ (a-na URU.KI sa-la-hi-im ū ma-aš-ša-ra-tim ni-di a-hi-im la ta-ra-aš-ši) (TabT05B-42, ll. 4-9 // TabT05B-43, ll. 4-5)。
- ・ その他の人物 ➢ Yasim-Mahar: “あなたの宮殿の城門がつつがなきように (a-na KÁ É. GAL-li-ka šu-ul-mu(-um)) (TabT05B-44, l. 6; TabT06-1, ll. 6-7)。
- ・ Yasim-Mahar の地位: Ṭabatūm に宮殿をもち、Ṭabatūm の都市とその周辺の耕地の管理について、テルカの王に対して管理責任を負う。しかし、下賜された土地の規模から見て、都市周辺の耕地すべてを自身で所有していたわけではない。おそらく Ṭabatūm 市とその周辺で土地と家畜を所有する複数の有力者の代表として Terqa の王によって任命 (承認) された人物であろう。ローカルな部族社会の代表者? (こうしたシステムはマリの Zimri-Lim 時代にも Ṭabatūm で行われていた [後述])。

(c) 小結: Terqa, Ṭabatūm 等の都市を含むユーフラテス中流域とハブル流域は、Mari の Zimri-Lim、Babylon の Hammurabi、そして Terqa の王たちとその支配者を換えながらも、ほとんどいつも一つの政治的統一体として支配された。Iši-Sumuabi 時代にも Zimri-Lim 時代同様、Ṭabatūm は、Qattunān 洲に含まれている (上述) ことから推して、マリ時代の行政州分割 (Terqa, Saggaratum, Qattunān [Mari]) は基本的に継承された。こうしたマリ時代から Terqa 時代への連続性は、政治的局面にとどまらず、文化的側面 (カレンダー) においても認められる (Mari, Terqa, Ṭabatūm の カレンダー (Tab T05B-39) は同一)。

3. 部族社会に関連するデータ

(1) 不動産下賜文書にみる人名: ほとんど全てアムル語人名。アムル語の言語的特徴にくわえて、個人の出身地 (1, 14)、親族関係、信仰 (Addu, Erah, Mahar, El, Ami) などについてのデータを含む。

1. *mu-ut-ba-na-e* cf. *mu-ut-<aša5>-ba-na-e* (Durand, SEL 8 [1991], p. 92) “Man of Banae (地名?)”
2. *sa-ki-x-x-tum*
3. *qi-iš-ti-DINGIR1*: *qišt+El* “Gift of El”

4. *i-[-ba-a]l-e-ra-ah*: ybl+Erah “Moon carried out”
5. *sa-ku-mè(?) -e^dIM(Addu)*: ?+Addu “...of Addu”
6. *be-el-lum*: ?
7. *mu-ut^d[-x]*: mutu+DN “man of DN”
8. *ri-kum*: ?
9. *a-ku-ki*: ?
10. *su-ma-ab*: sumu+abum “descendant of father(s)”
11. *ia-si-im-ma-har DUMU su-ma-at-e-ra-ah*: sym+Mahar “Mahar placed”,
sumāt+Erah “descendants of the Moon”
12. **i-[-ši-su-mu-a-bi*: yš’ +sumu+abum “he has stemmed from Sumu-abum”
”[su]-mu-ha-am-mi ša-pí-i[-i] URU(?). qa[-]ú-na-an. KI: sumu+hammu
“descendant of Hammu”
13. **bu-nu-ma^dIM*: būnu+ma+Addu “Really the son of Addu”
14. **mu-tu^da-mi*: ” Son of the god Ami”. (Tehran 市の出身者)
15. *a-bu-ul-la-an*: ?
16. *i-ba-li-im*: ybl+ending
17. *an-za-nu-um*: ‘anz+an+ending
18. *i-ba-al-pí-DINGIR*: ybl+pí+El “The mouth of god carried out”
19. *i-lí-e-pu-uh*: ‘l+i+yp’ “my god is brightened”
20. *ha-am-mu-tar*: ‘amm+yatar “paternal uncle is excellent/abundant”
21. *da-di-e-pu-uh DUMU BI-sa-ah*: dād+i+yp’ “my beloved one is
brightened”
22. *ia-di-hi-im DUMU ha-am-mu-tar*: yd’ +ending “he knows”
23. *ha-li-li-im-⟨⟨im⟩⟩*: halil+ending “he praises/ praised”
24. *mu-ut-ha-li*: mutu+hāli “man of maternal brother”
25. *qí-iš-[-tí]l(?) -DINGIR*: (see above)
26. *[-da-di-pa]-li-ih^dIM*: dād+i+palih+Addu “my beloved is Addu”
27. *bu-ne-DINGIR*: bunu+il “son of the god”
28. *ia-an-[-ši-ib^d]-da-gan*: nšb+Dagan “Dagān has set up”
29. *mu-ut-aš-kur*: mutu+Aškur “man of Aškur/Asqur (a god?)”
(see Durand, SEL 8)
30. *hi-iš-né-e^dIM SANGA*: hišn+i+Addu “my help is Addu”

(2) 神名

- ・契約文書中：Addu, Ami, El, Erah (アムル系), Dagān. (シリア、ユーフラテス中流域起源)
- ・書簡のあいさつ文：Šamaš u Dagān liballiṭka 「シヤマシユとダガンがあなたを祝福しますように。」
- ・誓い (不動産下賜文書)、rev. 26 : Dagān, Addu-Mahani
- ・Addu-Mahani: この種の文脈では特殊。Mahanu(m)は Mari 文書中で重要なベドウィン集散地であり Addu の祭儀中心としてしばしば登場する。位置的には、Jajirah の北東部にあたる。Dagān : テルカ (王国首都)、定住民 vs Addu-Mahani = タバト

(3) 職名 sugāgum と部族社会

- ・ Ṭabatūm のおいて都市代表とされた Yasim-Mahar とは何者か？
- ・ ARM XXVII, no. 107: Qaṭṭunān 州知事 (sāpiṭum) Zimri-Addu からマリの Zimri-Lim への手紙 (約 50 行) : Ṭabatūm における 地方都市代表 sugāgum の交代と土地の割当てを扱う。この手紙に照らすと Yasim-Mahar も sugāgum の役職では？

・手紙から分かる点:

- (1) 都市 Ṭabatūm に割り当てられた 2/3mana の銀をかつてマリ王 Zimri-Lim は Hammutar (=Ṭabatūm の sugāgum?) に課し、Hammutar は Qaṭṭunān 州知事 Zakira-hammu にこの銀を払っていた。
- (2) Qaṭṭunān 州知事が Zimri-Addu に代わったあとも Hammutar は、Zimi-Addu に銀を支払ってきたが、マリ王は Ṭabatūm の sugāgum として Yashadum を任命した。

Mari 王	Z i m r i - L i m	
Qaṭṭunān 州知事	Zakira-hammu	Zimri-Addu
Ṭabatūm の sugāgum	Hammutar	Yashadum

- (3) 州知事 Zimri-Addu は、これまでの習慣を Yashadum に説明し、銀の支払いを求めた。すると Patakhim (部族名?) の人々が集まり、相談し、支払いを約束した。
(数行破損)

- (4) 州知事 Zimri-Addu は、5 iku の耕地を所有し、重い ilku (労役) 義務を果たしているユーフラテス河岸の常備軍 (behrum) と家来 (sūt-rēsi)、ならびにやはり 5 iku の耕地を取って Qaṭṭunān 州の先遣隊 (aliktu) と同様に、Patakhim の人々に 5 iku の耕地を扶養地 (šukusatu) として取らせ、また、その地の人々 (DUMU. MEŠ mātim = 他の部族の人々?) には 3 iku の耕地を割り当てる、と約束した。

- (5) その後、彼らの誰ひとりとして銀を支払おうとしないので、州知事は Qaṭṭunān から Ṭabatūm に土地の割当のために人を派遣した。

- (6) 州知事 Zimri-Addu は、上記のルールでの土地の割当を Mari 王 Zimri-Lim が Pataktum の人々に布告し、「これら宮殿の (所有物である) 土地 5 iku を割り当てる」と説明すべし、と進言した。

・この手紙から、以下が明らか。:

- (1) Zimri-Lim 時代には、つねに sugāgum という地方代表者が Ṭabatūm に置かれた。
 - (2) (州知事ではなく) 中央の王が sugāgu を任命した。
 - (3) Sugāgu は、都市 Ṭabatūm とその周辺に居住する部族の長の中から 1 人選出され、選出された sugāgum は王から土地の割当を受け、そのかわり銀 2/3mana の銀を州知事 (=王国側) に支払った。
- ・ Tell Taban の不動産下賜文書で土地を割り当てられている Yasim-Mahar は Terqa 王 Iši-Sumuabi によって sugāgum として任命された人物であろう。Mari の書簡と Tell Taban の文書は、sugāgum が地方の側から部族社会の長として部族の権利を守りつつ、王国に対する責任を果たし、王国に銀で納税し、都市とその周辺の耕地の保全に責任を負ったことを示している。そして、部族社会と都市王権を繋ぐこのシステムは、マリ王国時代からテルカ王国時代に基本的に変化なく継承された。

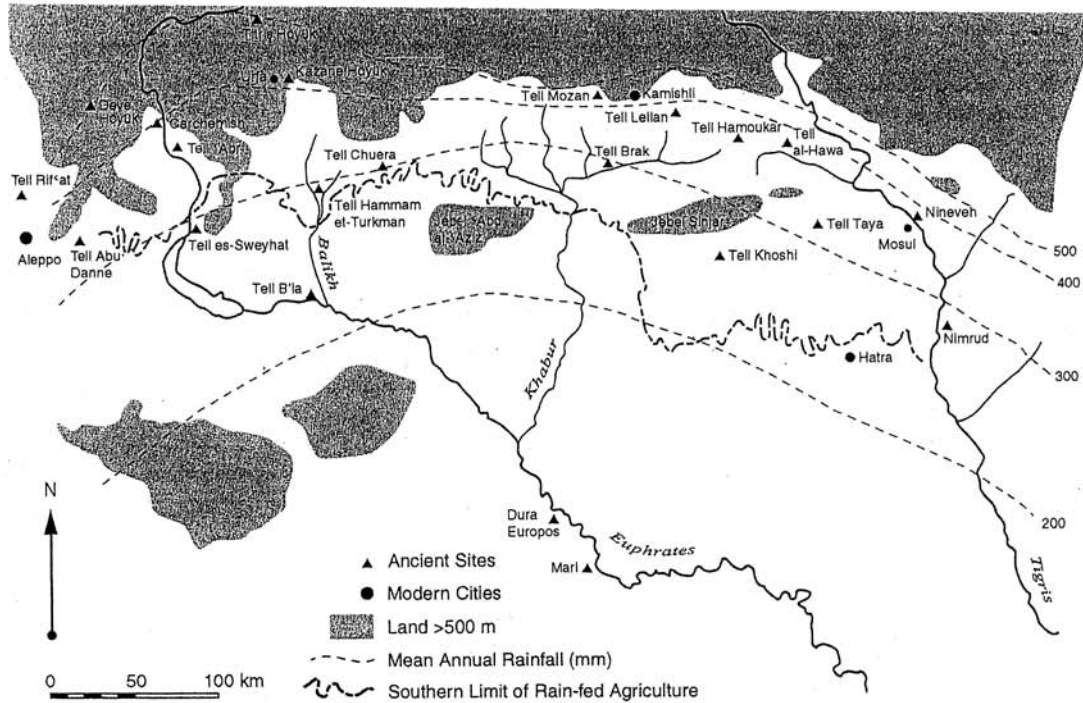


Figure 2.1. Jazirah of Syria Showing Approximate Rainfall Isohyets (in mm per Annum) and Tell es-Sweyhat in Relation to the Limit of Rain-fed Cultivation. From TAVO Map A X 4

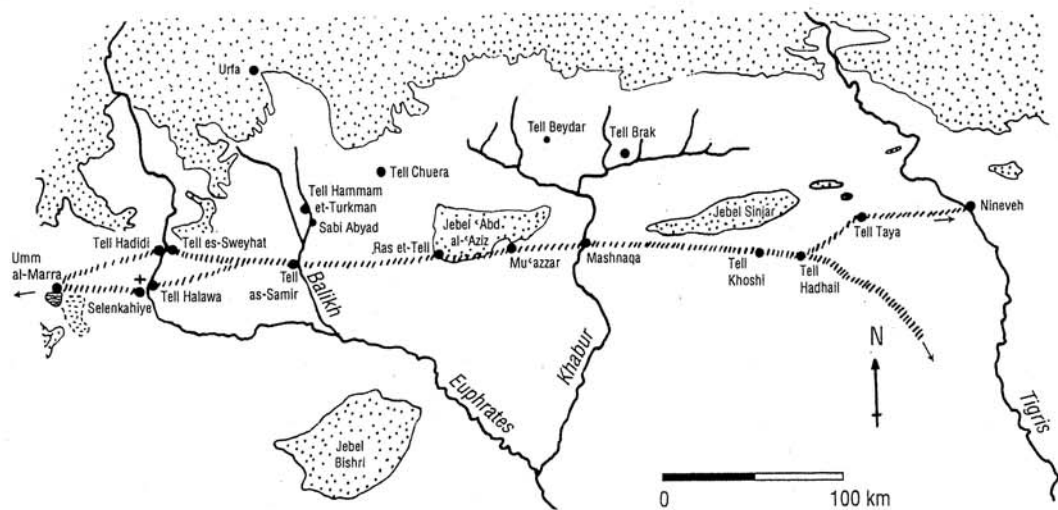


Figure 9.8. Suggested East-West Route across the Jazirah from Nineveh on the Tigris River to Major Crossing Points of the Euphrates River around Upper Lake Assad

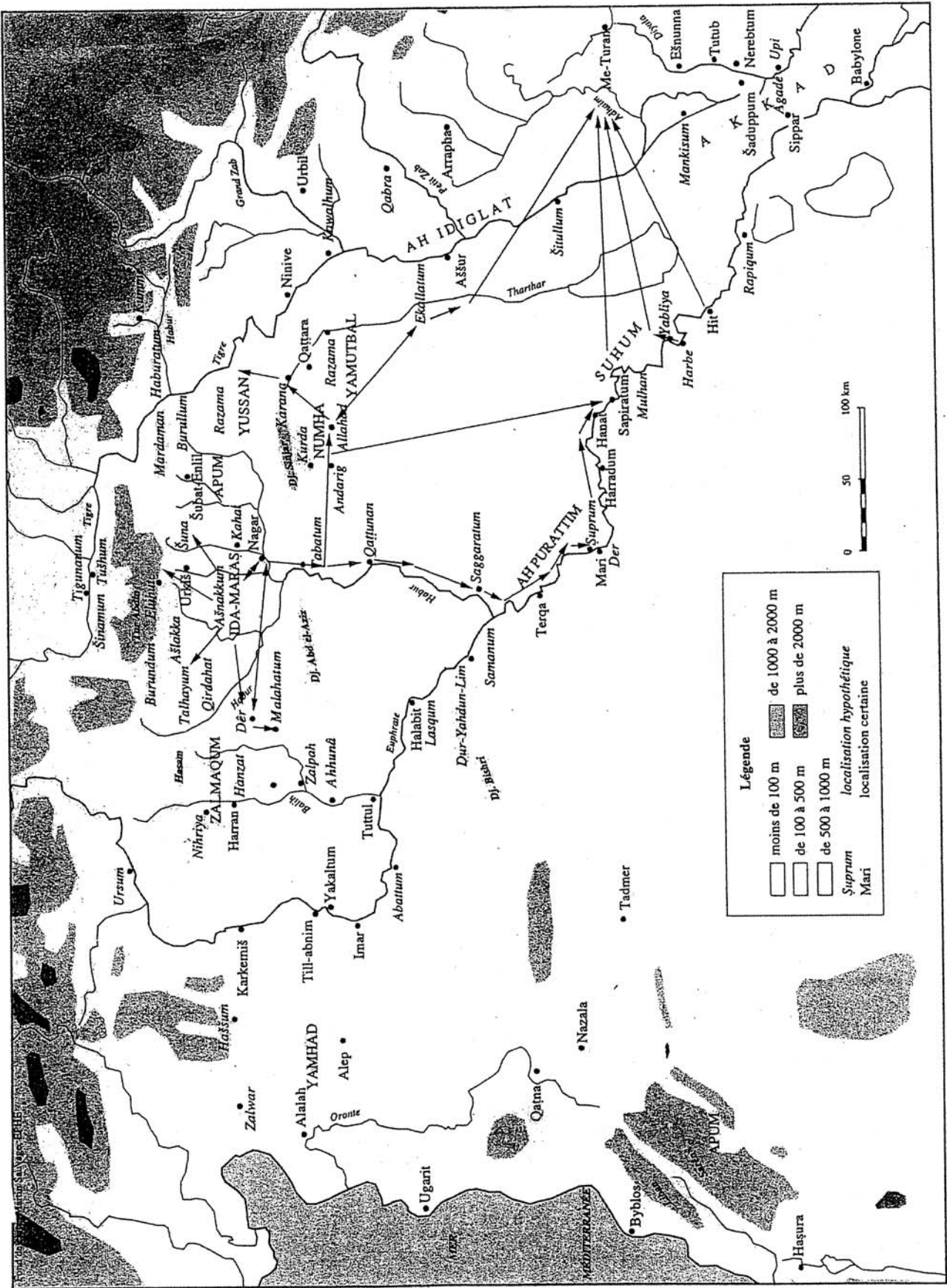


Fig. 1 - Les déplacements des Bensim'alites à l'époque de Zimri-Lim.

初期騎馬遊牧民の考古学から見た部族

高濱 秀 (金沢大学教授)

初期騎馬遊牧民文化の墓地の中には、墓が列を成すものが時折見られる。一列を成す古墳群は、家族などの何らかの単位を表わすと考えることもできる。

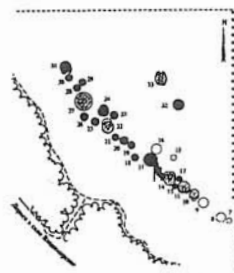
特に興味深いのはアルタイのトゥエクタ古墳群の例である。そこでは、南北に並ぶ古墳の列が斜面に数多く見出され、比較的東側に、ひととき大きな古墳の列がある。この古墳群に葬られた人々のなかに、特別に有力な家族が存在したことを思わせる。

モンゴルのオラーン・オーシグでは、山の東・南・西方の10箇所ほどに、一種の積石塚であるヘレクスル群が分布している。我々の調査しているのは、そのうちのオラーン・オーシグ I 遺跡であるが、そこでは、ヘレクスル群と鹿石群がともに見出される。初期騎馬遊牧民文化に先立つ後期青銅器時代の遺跡と考えられる。

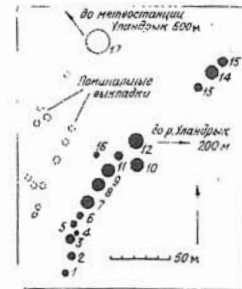
調査の結果、ヘレクスルは墓であることが明らかになった。そうすると、ここのヘレクスル群の各々が家族などの墓地であり、互いになんらかの関係を持つ集団が山を囲んで墓域を形成したと考えることも可能である。

個々のヘレクスルには主として東側に石堆群が附属し、それぞれに馬の頭骨・頸骨・蹄が納められている。同様な石堆群が、鹿石の周りにも見出された。鹿石群はヘレクスルと同じ儀礼をもって祭られる儀礼的な施設と考えられる。ジャルガラント遺跡などの大石堆群もその大規模なものと考えられよう。

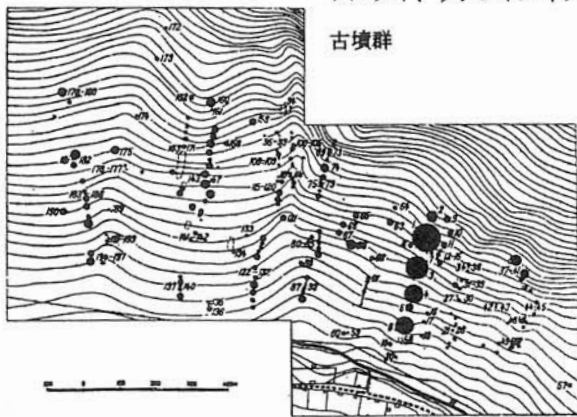
しかしヘレクスル群全てに鹿石群が伴うわけではない。オラーン・オーシグ山の周りでは、今のところ、オラーン・オーシグ I のほかに、鹿石群は1箇所しか発見されていない。鹿石群はある一定の広い地域、あるいは部族などの祭祀の場と考えることができるかもしれない。



北カフカス、ケレルメス古墳群



アルタイ、ウランドリク古墳群



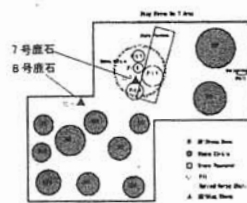
アルタイ、トゥエクタ古墳群



オラーン・オーシグ山周辺



オラーン・オーシグ I



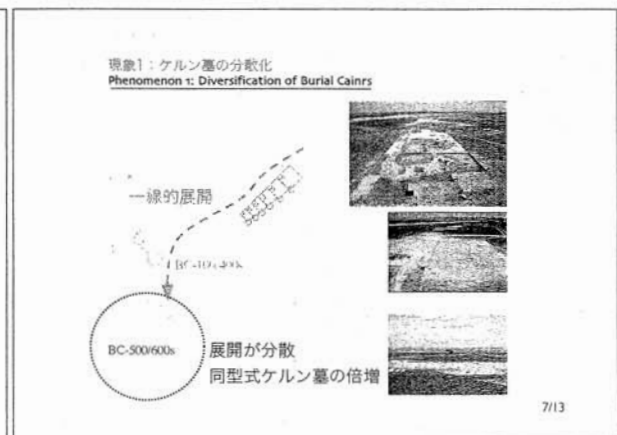
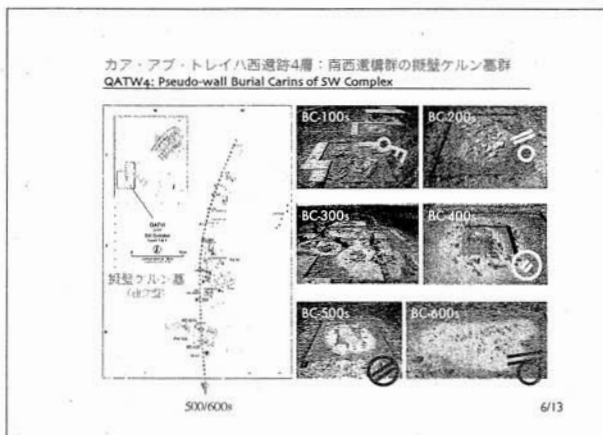
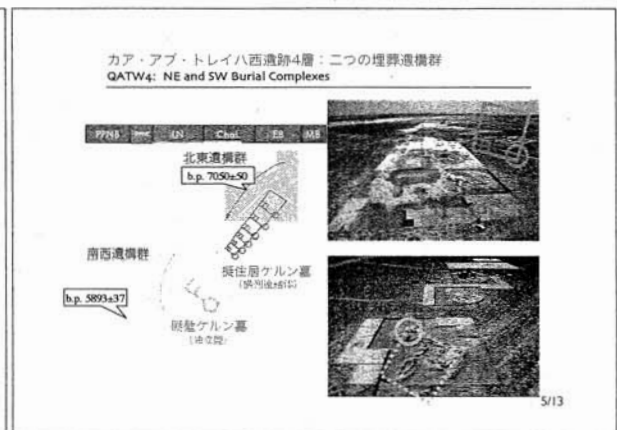
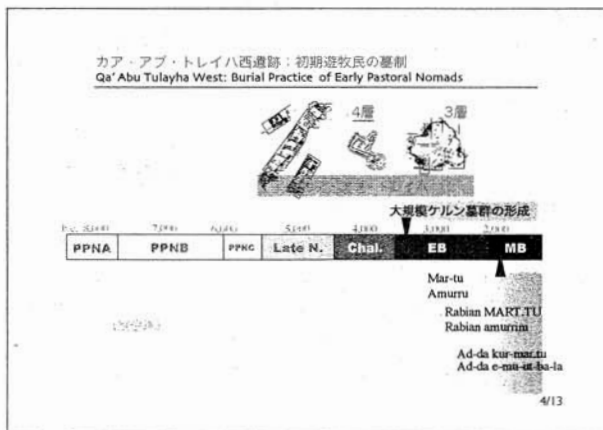
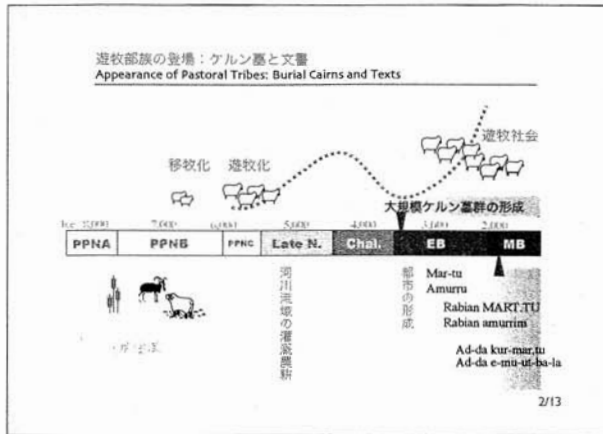
7号・8号鹿石付近の石堆



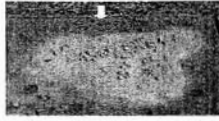
ジャルガラント遺跡の石堆

遊牧部族の形成：カア・アブ・トレイハ西遺跡におけるケルン墓造営集団の分層化

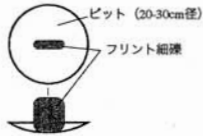
藤井純夫（金沢大学教授）



現象2: 追悼穴の減少
Phenomenon 2: Decrease in Mourning Pits

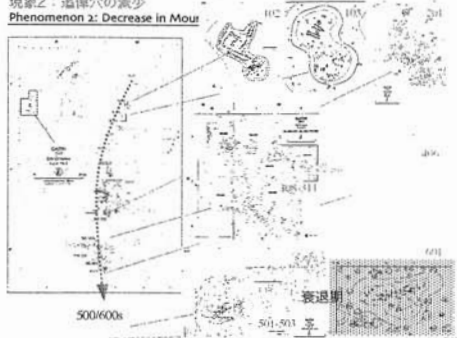


追悼穴の模式図



8/13

現象2: 追悼穴の減少
Phenomenon 2: Decrease in Mourning Pits



9/13

ケルン墓塚群と追悼穴: その相関
Burial Cairns and Mourning Pits: Correlation

BC-500/600sを境に

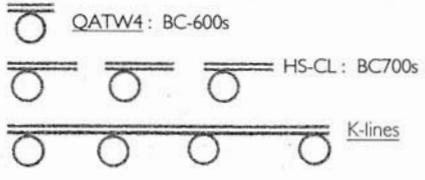
- 一線の展開が分散化
- 同型式ケルン墓の倍増 (2-3倍)
- 追悼穴の減少 (1/2-1/3)

BC-500/600s

- 被葬者層の拡大
- 埋葬集団の等質的な分層化
- 集団大型化に伴う氏族の成立? (上位概念としての部族も成立?)

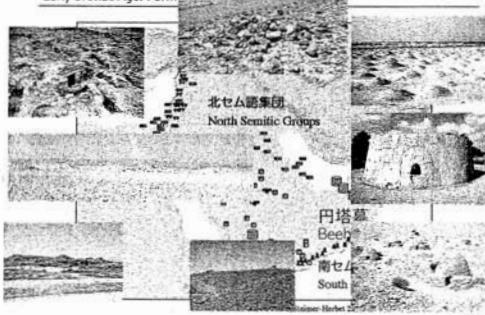
10/13

銅石器時代末: K-line (氏族長墓?) の分布
Final Chalcolithic: Distribution of K-lines



11/13

前期青銅器時代: 大塚
Early Bronze Age: Form



12/13

まとめ
Conclusions

同一墓域内における被葬者・埋葬集団の分層化プロセスを通して
同一地域内における同型式墓域の並立プロセスを通して



- 集団の大型化に伴い区分 (氏族) が成立
- 同時に上位アイデンティティ (部族) が確立?

13/13

科学研究費補助金 「セム系部族社会の形成」 平成 19 年度研究報告

2009 年 3 月 10 日

発行： 文部科学省科学研究費補助金平成 17 年度発足「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ 山系の総合研究」
総括班（代表 大沼克彦）

事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1 -1 -1 国士舘大学イラク 古代文化研究所内 大沼研究室

Tel: 042-736-5489 Fax: 042-736-5482 Email: kaonuma@kokushikan.ac.jp

ホームページ: <http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html>
